

紀要愛媛

第 22 号

伊予東部地域における弥生時代の刃器について	沖野 実	1 ~ 12
別名寺谷 I 遺跡出土の古代施釉陶磁器 —未報告資料の再整理—	青木聡志	13 ~ 30
中世伊予における壺・甕・播鉢 2 —亀山焼系瓦質土器を中心に—	首藤久士	31 ~ 42
愛媛県西条市富岡遺跡出土の青銅製花瓶をめぐって	松葉竜司	43 ~ 64
愛媛県における戦争遺跡調査の動向	藤本清志	65 ~ 94

2026

公益財団法人 愛媛県埋蔵文化財センター

伊予東部地域における弥生時代の刃器について

沖野 実

1 はじめに

過去、愛媛県内の弥生時代の発掘調査報告書において、いわゆるカッティング・ツールの名称は、報告者それぞれが適宜命名を行っており、依拠する一元的な定義が存在しない、あるいは明示していないことで混乱をきたしている状況といえる。根源的な要因は遺跡単位での個別の石器の詳細な検討、および通時的視点における問題点整理の不足に集約される。そのため、ここでは近年発掘調査資料の蓄積が進展した今治平野を中心として、伊予東部地域の刃器について新たな視点で再定義を試みたい。

2 名称

ここでいう刃器とは、剥片や素材の縁辺にエッジをもった石器のことをさす。特に横に長い刃部をもつという特徴がある。こういったものを含めた弥生石器研究は、沿革を含め国内各地で優れた研究が多くあり、議論としては醸成されている(たとえば上峯2013、岡崎ほか1977、幸泉2023、斎野1988、下條2008、原田2015、原田ほか2025、乗松2023・2026、森2017・2018)。学史から問題点の抽出を行うことは仮説を設定するうえで重要だが、紙幅の都合により、ここでそれらを提示することは割愛する。

使用痕跡と製作技術的観点でみれば、伊予東部地域の刃器は目的とする任意のエッジが保持されている状況ではそのまま使用されている状況が看取できる。使用により切れが悪くなったり刃が欠けたりすると、二次加工が施されて刃部は再生される。刃部を再生する過程では、形状そのものも適宜分割・切断され、使用に適した形状に整えられる(図1)。一連のリダクション・シーケンスを考慮する限り、二次加工と形態のみで器種を命名することは全くの正解とはいえない。

そして本稿の目的は、既往研究にみる示準化石的な、型式学的分類という分節化を最大の関心事としない。技術のデザインは技術的合理性だけでなく社会的要因によっても強く規定されることを念頭に置きながら、石器が道具としてたどる廃棄までの脈絡とその背景を勘案して刃器を再定義することにある。

3 リダクション・シーケンス

刃器がたどる廃棄に至るまでの一連の流れ(Schiffer1972)を資料を通してしてみると、まずはじめに原岩ではなく、ブランクが入手される。この場合のブランクとは、流通に適した母材や経済網の中で円滑に他者間を往来するためのインゴットのようなものを指す。ブランクは黒色緻密質安山岩が好まれる。場合によっては片岩類も利用されたり、他地域ではさらに局所的な地域石材も使用される。石器石材としての特質はもはや語るまでもないが、石材資源に乏しい瀬戸内世界に

において、その均質性と膨大な産出量を背景とした安定的な需給体制の確立は縄文時代後期にはある程度成立していると考えてよい。よってブランクは長距離の輸送が前提となる。輸送中の破損を極力減らすため、コルテックスの残るものや、あらかじめ縁辺を調整し、二面角または三面角で構成されるように成形されている。この段階のものは輸送中に互いが接するため、表裏に擦れや微細な加撃痕が残るものが散見される。輸送の観点からも強度異方向性を保持する黒色緻密質安山岩や片岩類は適している。ブランクは板状の素材・塊状の素材あるいは大型剥片であり、入手した先で消費形態に応じて要請された適切なかたちへと改変されていく。一般的には任意の厚さに分割されたり、搬入状態によっては急斜度な切断を経て、二次加工を施して使用したり、刃器としてそのまま使用されたりする。

ブランクを目的剥片へと分割する際は両極打法が選択される場合が多い。目的剥片の剥離前には台石と接触する部分と、ハンマーが接する部分に適切な稜や打面を設けるための調整剥離が行われることもある。適切な打面・稜を設けたあと、当座の目標である薄い両極剥片は剥離される。両極剥片は末端(エッジ)形状が安定的ではないものの、主目標までの概念的な距離は短く、複雑な手続きなしで即座に獲得・達成されるという利点がある。剥離された剥片は末端が安定していないため選択的に利用される。デビテージはすべて管理下に置かれ、安定的な末端形状を保持するもの、または加工によってそれが得られるものは刃器へ、最大厚を中心に持っていたり、厚さは均一であるが小型のものは石鏃や石錐などに利用される。両極剥片剥離はそれが不可能になるまで何度も行われる。剥片剥離のたびに擦り調整や細かな剥離によって加撃する稜上の調整を行う。ブランクは徐々に体積を削減していき、剥離される剥片も小型のものになっていく。両極剥片は求める要素を具備していればそのまま使用される。任意の形状にする際は縁辺は切り取り・挟入などの二次加工が行われる。この際、アウトラインへの強い志向性がある場合には石庖丁であったり、掐刀子のような切断刃器が作成される。また片岩の場合は穿孔が加えられたりする。この段階では、場合によっては変成度の高い片岩類やハリ質石材であったとしても表裏に研磨を施すことがある。この研磨は有効なものもあれば、刃器製作が保持するハビトゥスが顕在した創発であったりする。適切な外形が獲得できたら目的に応じた刃部が作成される。

刃器は使用により刃部が消耗する。摩耗であれば研ぎ直しや再加工が、欠損であれば剥離や研磨による再調整で刃部再生を図る。最終的にまったく刃器として機能しなくなったとき、廃棄されるに至る。廃棄される際は竪穴建物・溝・谷・土坑あるいは往来の邪魔にならないところなどに使われない剥片や細片などとともに捨てられることがある。遺構に伴わない場合も多いため、包含層一括資料として処理されることも多い。また、竪穴建物内で多量の石器が出土すると建物を伴った石器工房であると結論を下しているものもあるが、それには注意を要する(田村2012、Sillitoe & Hardy2003)。

4 実資料

この一連のフローの中で適合する遺物をみてみると、ブランクは糸大谷遺跡Ⅱ区出土のものが典型例のひとつである。厚みはあるが扁平で、原礫面を残しており、大型である。また今若遺跡

刃器のライフサイクルの推移↓

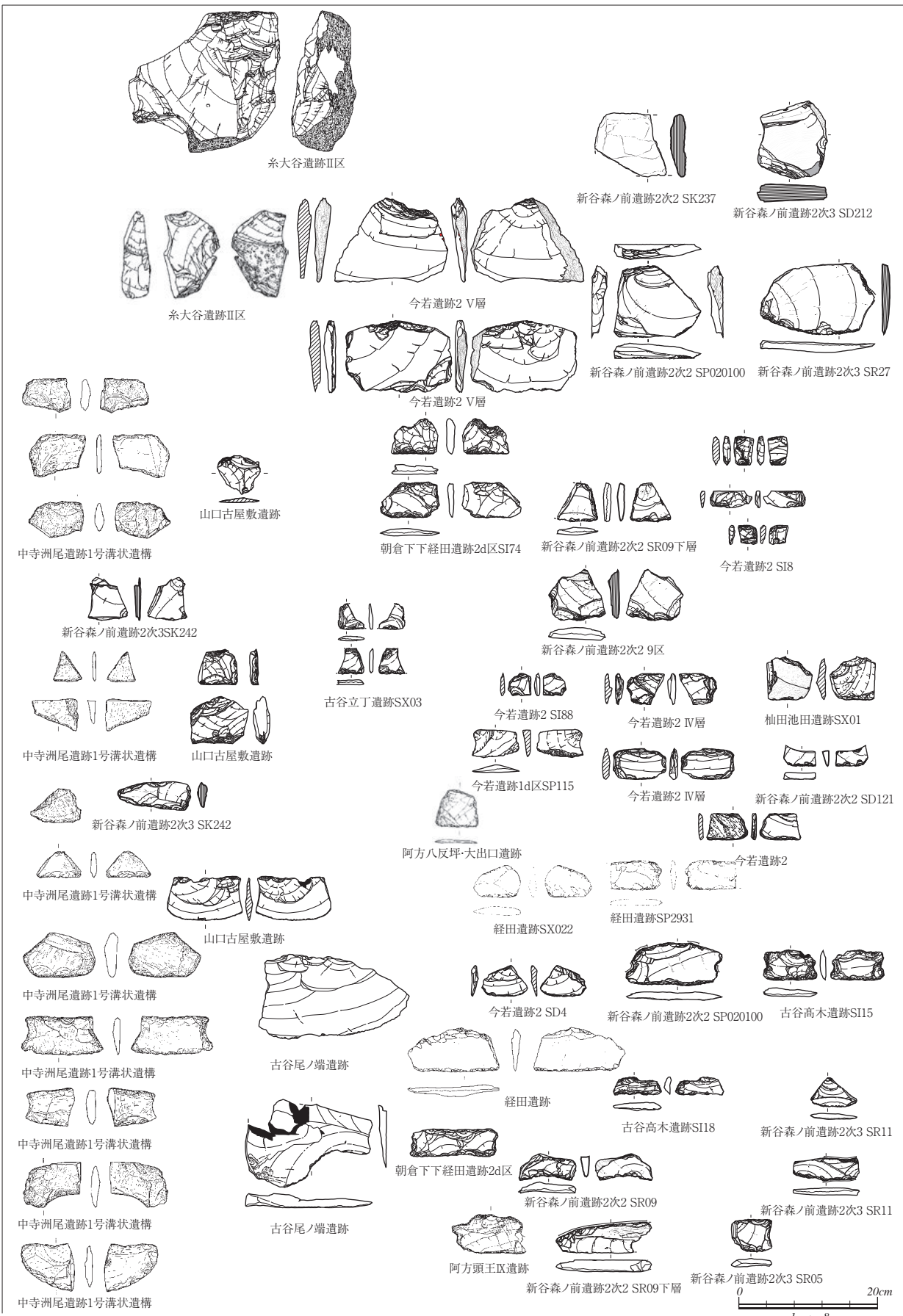


図1 伊予東部における刃器関連資料とライフサイクル

2V層、新谷森ノ前遺跡2次調査浅谷1-A.SD212のような分割剥片や、新谷森ノ前遺跡2次調査低位段丘3-B.SP020100、新谷森ノ前遺跡2次調査浅谷1-D.SR27のようなものも搬入素材である。後者には二次加工や使用痕が認められており、これ単独でツールとして利用されていたことを示す。さらに新谷森ノ前遺跡2次2 SP020100はいわゆる抉入打製石庖丁と呼称される刃器と共伴するデポあるいはキャッシュである。どちらもツールとして考えてよい。これは例えば岡山県百間川原尾島遺跡三ノ坪・横田調査区土坑61などと同じ様相を示す(竹広2003、柳瀬編1996)。百間川原尾島遺跡三ノ坪・横田調査区土坑61の帰属時期は弥生時代前期後半であり、弥生時代の早い段階にはこのツール・セットが確立していたことがわかる。ブランクはすでに弥生時代前期から存在するが、特に伊予東部Ⅳ様式あたりから流通するものの規格性が強くなる。次に、両極剥片剥離段階では中寺洲尾遺跡1号溝状遺構、山口古屋敷遺跡、朝倉下下経田遺跡2d区SI74、今若遺跡2SI8などにもその資料がみられる。先述したとおり、両極剥片剥離はそれが不可能になるまで進行するため、ブランクが残核化したものも多く、これをカッティング・ツールや楔形石器と混同してしまうことが多い。加えて特徴の似たものも多く、あまり報告書に掲載されない資料である点は注意したい。伊予東部Ⅰ～Ⅵ様式の時期すべてでみられる。

次に剥片の分割段階のものは中寺洲尾遺跡1号溝状遺構、山口古屋敷遺跡、古谷立丁遺跡SX03、今若遺跡2SI88、今若遺跡2Ⅳ層、新谷森ノ前遺跡2次低位段丘1-C.SK242などが挙げられる。この資料もスクレイパー等の欠損品として同種多量遺物と判断され、報告されないことが多い。

続いて刃部が安定している段階のものとして、中寺洲尾遺跡1号溝状遺構、山口古屋敷遺跡、古谷尾ノ端遺跡、経田遺跡、新谷森ノ前遺跡2次調査低位段丘3-B.SP020100、古谷高木遺跡SI15などが挙げられる。山口古屋敷遺跡や古谷尾ノ端遺跡のものはそれ自体が搬入状態だろう。ここでは掲載していないが、四国中央市の小富士遺跡、平坂Ⅱ遺跡、長命寺遺跡、医王寺Ⅰ遺跡や西条市明穂東岡Ⅱ遺跡第4集中区、前期末～中期初頭の鑄造鉄器関連遺跡として知名な同市大久保遺跡などでも確認されている。この段階の刃器は一般的にツールと認識しやすいもので、伊予東部Ⅰ様式～Ⅵ様式の時期まで幅広く展開する。この段階でも使用が進んで刃部が摩耗すると、両極剥片段階と同様に再加工やアウトラインの変更が行われる。西条市明穂東岡Ⅱ遺跡の第1集中区と第4集中区の接合資料などはこれにあたる。

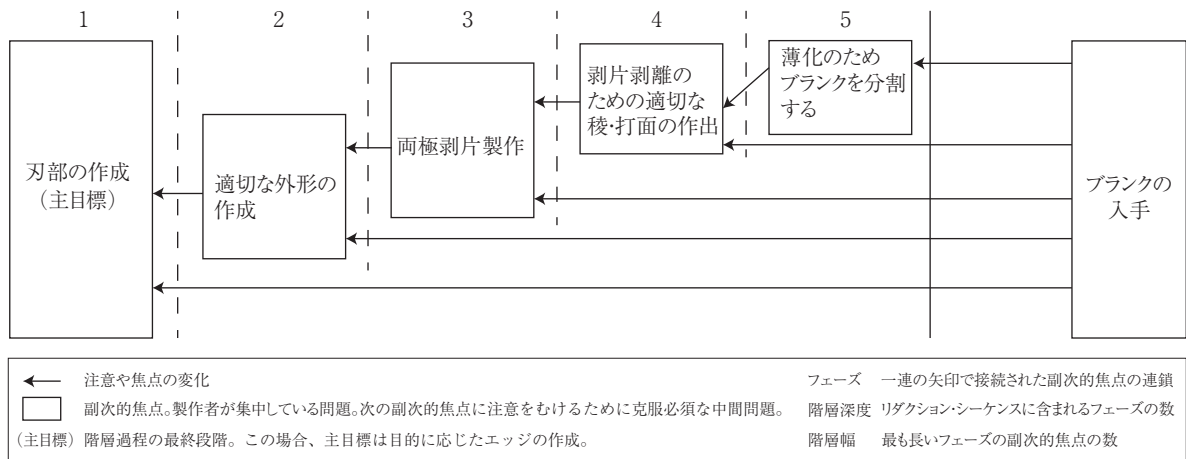
最後に、使用が進み廃棄される状態のものは、中寺洲尾遺跡1号溝状遺構、朝倉下下経田遺跡2d区、新谷森ノ前遺跡2次2調査浅谷2-A.SR09、古谷高木遺跡SI18、新谷森ノ前遺跡2次調査浅谷1-A.SR05などが挙げられる。刃部の摩耗が著しく進み、刃部は器体中央にむかって湾曲し、極めて鈍角となったりする。この状態のものは剥片・細片とともに確認されることが多い。

これら刃器の脈絡を構成する資料の中で、新居浜市の上郷遺跡からは包含層出土ではあるものの、ブランク、分割剥片、刃器、切断刃器の一括資料が得られている。愛媛県ではほぼみられることのない接合資料から証明できる好資料である。ブランクの形状も整っており、出土土器の様式から中期中葉の資料と判断してよいだろう。また同遺跡SK110の出土例も一括廃棄資料であり、石鏃、石核、刃器が揃う。

5 プロブレム・ソリューション・ディスタンス

以上が刃器のもつライフサイクルである。これを従来の型式・形態学的分類ではなく、リダクション・シーケンスに従った技術複雑性の階層モデルによって表したものが図2である。これは特定の石器製作技術のために要請された行動的複雑さをモデル化したものであり、石器の背景にある文化や認知の変化と密接に結びつく(Bryche et al.2026、Greenfield & Schneider1977、Haidle2009、Lombard2012、Mahaney2014、Muller et al.2017、Oswalt1976、Perreault et al.2013、Stout2011)。階層的に構造化された副次的焦点の連鎖はフェーズを構成する。各フェーズは単線的ではあるものの、階層深度は深く、複数存在する。それはブランクや大型剥片、製作過程における石器の状態に応じて選択されており、安定した目的的な刃部を獲得するという包括的な最終目標に対して等至性を保持している。

技術複雑性という観点でみるかぎり、従来の「剥片・二次加工剥片・使用痕剥片・スクレイパー・刃器・石庖丁」といったカッティング・ツールは、基本的に同様のシーケンスで構成されていることがわかる。これは打製・磨製関係なくほぼ同じであることが重要である。この分類(Pbblem-Solution Distance(Köhler1925、Haidle2010)以下、P.S.D)によれば、上記器種類は同様の技術範疇におけるバリエーションとみなすことができる。つまり伊予東部では、弥生時代を通じて打



(Greenfield & Schneider1977, Haidle2009, Mahaney2014, Muller et al2017, Stout2011をもとに作成)

- ・まずはじめに消費地でブランクが入手される。ブランクの素材は主目標に適合した石材が選択される。
(伊予東部では瀬戸内世界の広域経済網によって讃岐岩質安山岩が利用される。また近傍の緑色片岩なども利用される。中・南予ではローカルな中・小規模の経済網により、赤色珪質岩やホルンフェルスも選択されたりする)
- ・ブランクの縁辺は長距離輸送を見越して、あらかじめ二面角および三面角からなる破損防止のための剥離による成形・整形が行われていた。
- ・ブランクは板状の素材であり、消費地における用途によって任意の厚さに分割されたり、搬入状態によっては二次加工が施されそのまま使用されたりする。
- ・ブランクの分割により素材薄化が達成され、両極剥片剥離のための適切な打面が獲得される。
- ・両極剥片の作成という当座の目標は、ことなるフェーズ間での注意を要するものの、複雑な手続なく即座に達成される。
- ・両極剥片は取捨選択される。デビテージは管理され、小型の剥片は石鎌などにも利用される。
- ・両極剥片は急斜面調整・切断・挟入・穿孔等の二次加工により適切な外形が作成される。場合によっては石質問わず表裏の研磨も行われる。適切な外形が達成されたら目的に応じた刃部が作成される。
- ・使用による「使い減り」が進行すると、副次的焦点1・2は何度も繰り返されレストアされる。刃器としての機能を失ったあとは廃棄されたり、あるいは別用途に再利用されたりする。
- ・ブランクの搬入形態によってインデックスされるフェーズの数は増えるため、階層深度は深くなるが、階層幅自体は広くなく、技術複雑性は低い。また各副次的焦点の相互接続性も低い。

図2 伊予東部における弥生時代の刃器製作・使用におけるリダクション・シーケンスの階層モデル

製刃器・磨製刃器はそれぞれ対立的な構造上において作成されているわけではなく、むしろ両者はパレットに内在的に諸要素(潜在したこれらの要素は条件に応じて顕在化する)をストレージしつつ、同様の認知的複雑性のもとでエンコードされていることを示している。

伊予東部(おそらく広義の瀬戸内沿岸地域)では、その等質的環境下において価値観を共有した関連社会グループ(Relevant Social Group)が成立する(Bijker & Pinch1987)。関連社会グループによって「技術の社会的構造(The Social Construction of Technology。以下、SCOT)」が構築される。SCOTによって流通する経済単位は統一されていくことになり、これによって生じたりハースル(Atkinson & Shiffrin1968)やスキーマ(Bartlett1932)によって石器製作者の身体技法や習慣的身体が徐々に確立されていき、石器製作は収斂されていった。刃器のリダクション・シーケンスは弥生時代を通じた一連の強力な経済生産システム(Geneste1991)の成熟過程を示している。後に到来する鉄器の生産・普及という重大な景況への受け皿は、一部の打製石器生産と磨製石器生産の技術的融合によりすでに整っていたと考えてよい。石器から鉄器への移行過程において両者の密接な関係性を想定する村上恭通らの仮説は、石器製作にみる等質的環境下における認知的水準の均平化という側面によって補強される(禰宜田2019、野島2014、村上2007、村上編2017)。

6 成立時期

この経済生産システムがいつ頃から始まったかは重要な関心である。検討するために弥生時代以前の資料についても触れるべきである。

資料数が少ないため不明瞭な部分が多いものの、今治市永地遺跡では中津式段階に切断刃器が出土している。断面はバイポーラによって凸レンズ状を呈し、加撃部は線状の稜となる。同市臥間遺跡では縁帯文～伊予東部Ⅱ-1様式段階で石核と刃器が出土している。石核は打面転位型で横長剥片を剥離しており、刃器の素材となった剥片も主要剥離面はポジ面を残すものとなっている。同市糸大谷遺跡Ⅱ区では先述したブランクとともに打面転位型の石核が確認されている。同市辻堂遺跡の第Ⅱ遺構面出土遺物は一括性の高い好資料である。切断剥片、切断刃器、抉入刃器、石核が出土している。刃器は体部が切断され、刃部が曲線を呈する扇状のものと、端部に抉入が施され直線的な刃部(現状は使い込まれている)をもつものとなっている。石核はコルテックスを残し、塊状のブランクの小口面からハードハンマーで剥片剥離を行っている。報告者である中野良一は第Ⅱ遺構面出土の土器をすべて縄文時代後期としつつも、石器の特徴(おそらく抉入刃器)をもって「…土器以外では石斧や石鎌、石錘や石庖丁などの石器もみられ、弥生時代のものもあるが土器は出土していない」とした。氏の経験則より発せられた疑問は端的に的を得ているが、単独の石器のプロポーシオンで時期を判断するのは危険である。同市馬島亀ヶ浦遺跡KⅢ区SX-01では刃器、石核、剥片の出土がみられる。比較的大きな刃器の素材剥片は打面転位と交互・並列剥離の石核から作成されている。石核は両極打法の残核もみられる。特に注目したいのがSX-01の黒色緻密質安山岩ブランクの集積である。これにより縄文時代後期における外部搬入形態があきらかとなった。この馬島亀ヶ浦遺跡の石器群は真鍋昭文によって丁寧な石器分類が行われ、遺跡内石器生産状況が復元されている。ただ、本項を構成する観点である技術複雑性とい

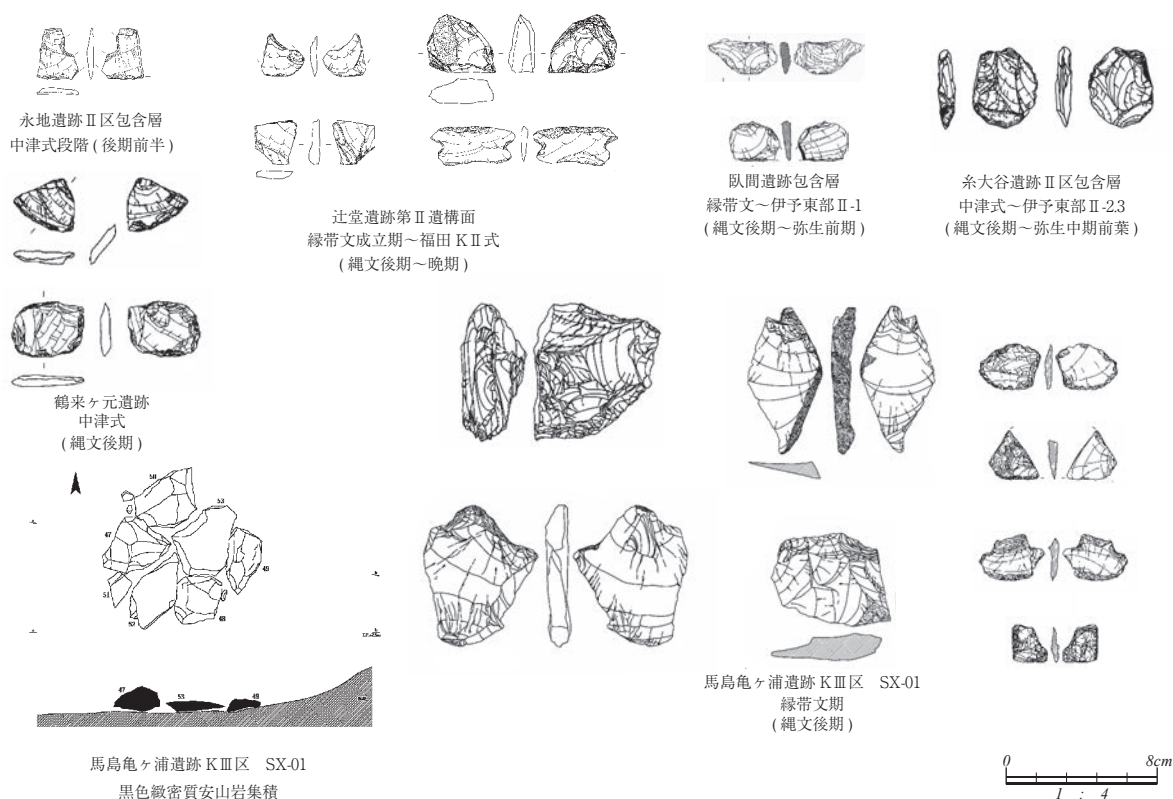


図3 伊予東部における縄文時代の石器、剥片剥離技術

うフィルターを通すと、全体性が完全には捉えきれていないことで石器製作模式図の不足や矛盾が生じてしまっている(真鍋1999)。多田仁による大開遺跡の総括も同様である(多田2008)。西条市鶴来ヶ元遺跡では再加工された刃器が確認されている。石核や剥片の状況は判然としないが、刃器の素材から打面転位型と並列剥離の2種があることは間違いない。

以上をみる限り、縄文時代後期段階では打面転位、交互・並列剥離の剥片剥離技術と両極打法が併用されており、剥片や刃器、石鏃や石錐など主目標となるものによって剥片剥離技術が選択されていた可能性が高い。流通するブランクの形態もあまり整っていないため、状況に応じたりダクション・シーケンスを選択しなければならないという桎梏が生じてしまっている(ベイカーとピンチのいうinterpretative flexibilityの段階)。縄文時代晩期はさらに資料が少なく検討材料に乏しいが、打面転位、交互・並列剥離の剥片剥離技術が一部に残るものの、今治市中寺洲尾遺跡1号溝状遺構の出土例や西条市池の内遺跡SK-9の整ったブランクや切断刃器、残核を加味すると、伊予東部においては縄文時代晩期中葉～弥生時代初頭にはおおむね両極打法を中心としたりダクション・シーケンスが中心となっていくと考えられる(closure & stabilizationの段階)。

7 副次的石材との関係性

次に、石器石材について補足する。主題となる刃器における黒色緻密質安山岩と片岩類の関係については先行して述べたため、他のツールにも利用される副次的石材についても若干の追記補足しておく。

石器石材は図4に示した通り、合理的経済主体(金2022)によってもたらされる当該期システムの一柱を担う要素であり、アクター(ラトゥール2019)の反応の記録媒体でもある。石器石材は観測のための空間的定点になることが可能であり、常に上書きされる変化に富む要求情報の蓄積でもあり、あるいは自身が合理的経済主体を可変させる影響そのものでもあるため、軽視できない(国武2008、Binford1979、田村2005)。

今治平野周辺では、先述した中寺洲尾遺跡第1号溝状遺構で豊富な資料がある。漆黒色の黒曜石、チャート(報告ではメノウとされている)、白色石材¹が出土している。糸大谷遺跡Ⅱ区では白色石材、角閃石片麻岩、黒曜石がみられる。今若遺跡2では伊予東部V-3・4様式に比定されるS18で白色石材が出土している。新谷森ノ前遺跡では弥生時代の後半期に比定される遺構のいくつかで東部変成岩類²、白色石材などが確認されている。古谷立丁遺跡では鳴滝頁岩と目される砥石が出土している。伊予東部Ⅱ-2～Ⅳ-1あるいはⅤ～Ⅵ様式に該当する資料と考えられる。大三島の大見遺跡では羽島下層式段階に漆黒色の黒曜石、乳白色の黒曜石、赤色珪質岩が出土して

いる。江口貝塚では縄文時代中・前期段階に姫島産黒曜石、チャート、水晶が、後・晩期段階に姫島産黒曜石と水晶が伴う。

周桑平野周辺では、中村田所遺跡SI2で白色石材が出土している。久枝Ⅱ遺跡では伊予東部Ⅲ～Ⅳ-1様式の範疇におさまるSD-11で白色石材がみられ、さらに、伊予東部Ⅱ様式に比定される包含層中から赤色珪質岩が出土している。大久保遺跡においては伊予東部Ⅱ様式の範疇とみられるいくつかの遺構から層灰岩製の素材が出土している点は極めて重要である。片岩のブランクと鑄造鉄斧片、刃器と柱状片刃石斧・鑄造鉄斧・石鏃が共伴している点も大変興味深い。道場遺跡では、西条市試掘調査H24年度35trで、そして近隣の松ノ丁遺跡の試掘調査で層灰岩製石器が出土している。いずれも伊予東部Ⅱ-1～3様式、あるいはⅣ～Ⅴ様式の時期のものである。また時期は大きく遡るものの、妙口遺跡ではチャートを使用した局部磨製石器、ハリ質の白色石材

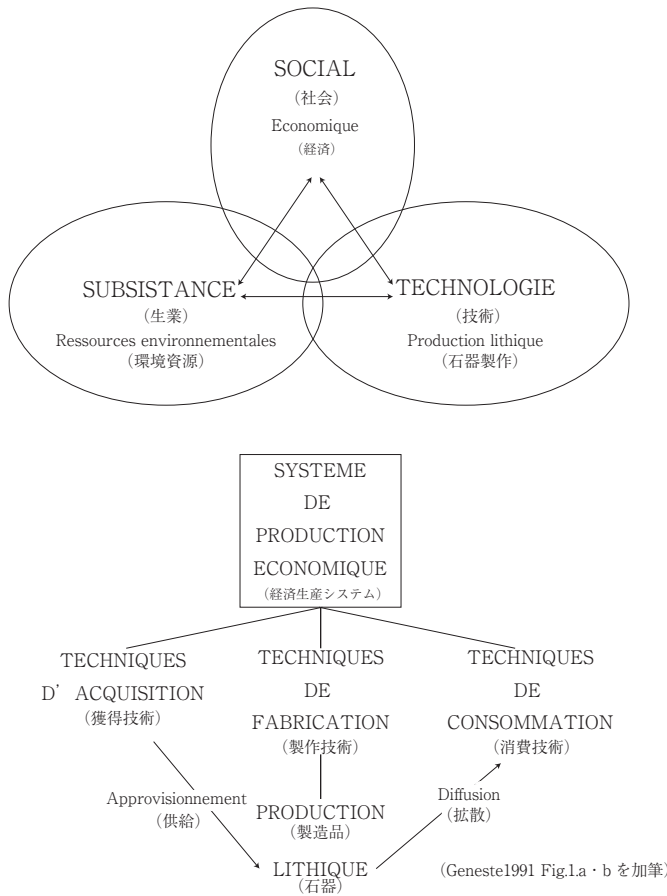


Fig.1-Relation au sein du système cultural entre les sous-systèmes de la subsistance, de la technologie et de l'économique intervenant dans l'étude de l'approvisionnement. Ces différents champs conditionnent la dynamique du discours et la nature des implications spatiales, environnementales et économiques des données technologiques obtenues au cours de l'analyse.

図4 システム概念とサブシステムの関係

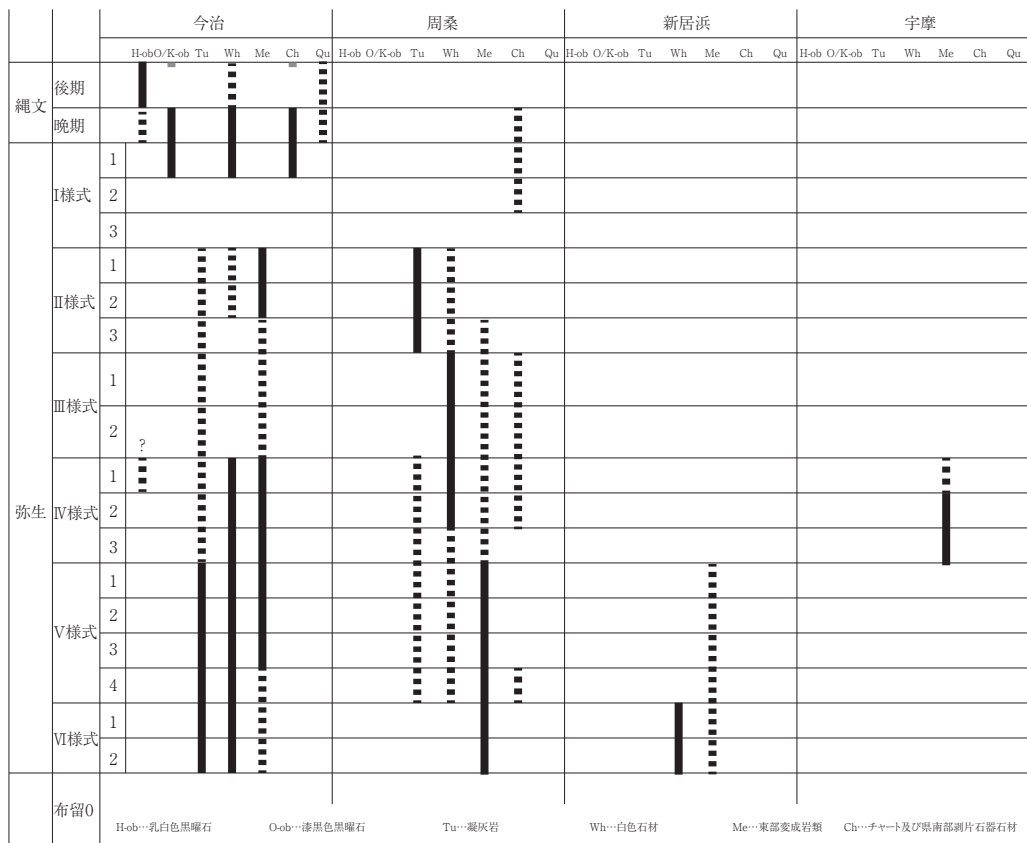


図5 伊予東部における副次的石器石材の利用と消長

(おそらく凝灰岩)を使用したバイフェイスが出土している。このハリ質の白色石材はEUP中葉の宝ヶ口I遺跡でも主として利用されている。

新居浜平野周辺では、中村田所遺跡で伊予東部II-1~2様式に位置づけられるSIIにおいてまとまった量のサヌカイトの出土がみられるが、外来石材は伴っていないようである。星原市東遺跡B調査区SI-002もたくさんのサヌカイトが出土したとだけ報告されており、それ以外の記載がないため判断が難しい。県内全域にいえることだが、黒色緻密質安山岩はまとめて「サヌカイト」と判断されているため、県中予・東予で産出する黒色緻密質安山岩が含まれるかどうかの検討はほとんど行われていない。優良石材の産出が低調な環境下における石器石材の利用状況は極めて重要な観点であるため、是正すべき点であることを強調したい。横山城跡では弥生時代後半の白色石材の砥石が出土している。

宇摩平野周辺では発掘調査の類例が少なく言及できる部分が少ない。長命寺遺跡では東部変成岩類がみられる。伊予東部IV-1~V様式前半の資料である。基本的には黒色緻密質安山岩と片岩類で構成され、それらに対する依存度が極めて高く、現段階では外来石材の特徴をみいだせない。当然これは当地において他の石材の無価値性を示しているのではなく、黒色緻密質安山岩という価値あるものの差異(伊藤2022、グレマス1992)を示す。

今治平野と周桑平野の一部を除いて調査例と報告資料数が少ないため、検討材料自体が僅少であるものの、縄文時代後・晩期までは黒色緻密質安山岩を主体としながらも多用な石材利用を

行っており、姫島産黒曜石や隠岐産あるいは腰岳産黒曜石、水晶、県南部で見られるチャート、赤色珪質岩なども入ってくる。石材の利用状況は縄文時代前期あるいはそれ以前からの様相をある程度残していると考えられる。弥生時代前期後半以降は剥片石器に使用する石材は本格的に黒色緻密質安山岩に絞られてくる様子がうかがえ、この段階で他方から持ち込まれていた少数の外来剥片石器石材は姿を消していく。これは砥石・磨石に利用される白色石材が広域に展開しはじめる時期と連動していると考えられる。東部変成岩類や白色石材が広く普及するのは伊予東部IV様式の時期となる。これは刃器ブランクの形態的均質性の確立と軌を一にする点は無関係ではないだろう。

8 課題

以上、刃器の定義と刃器を中心とした混成ネットワークの一部を簡便に記した。本来は各要素を精緻に記述し布置的關係性を編む必要がある(安斎2003)が、諸般の都合上、割愛せざるをえなかった。最後にいくつかの課題・問題点を提示したい。

現在報告されている資料を中心にまとめたが、報告書で報告された遺物の選別自体が旧来の方法で行っているものであるため、全容を表現する資料として十全でない。未報告資料も含めた悉皆的な検討は不可欠である。またミユラーも自著の中で示す通り、P.S.Dによるモデル化は最大の認知能力を示すものではなく、あくまでシーケンス内のタスクを達成するための必要最小限の認知的複雑さのモデル化であることも付記せねばならない。ゆえに本来であれば全ての石器製作におけるフローを復元すべきである。また、地域も雑駁とした平野単位で報告したが、本来は遺跡ごとにデータを導く必要があることは言うまでもない。解決せねばならない問題点は多いが、以後の検討に必要な情報整理がなされていけば、本分類の有用性も多角的に検討できるようになるだろう。

註

- *1 白色石材とは変質安山岩あるいは流紋岩等を指す。一部凝灰岩を含み愛媛県内考古学業界では総称して「伊予砥」などと呼称されていた。産地としては主に石鎚層群に沿って伊予市高野川～西条市影無・楠窪あたりとなる(沖野新一2015、沖野実2023)。
- *2 東部変成岩類とはざくろ石角閃片岩・片麻岩・変はんれい岩・苦鉄質片岩を指す(日本地質学会2016)。これに関しては新居浜市天神の木遺跡の報告書で言及している。

参考文献

- 安斎正人2003『旧石器社会の構造変動』、同成社
- 伊藤嘉高2022「ANTと法」『アクターネットワーク理論入門 「モノ」であふれる世界の記述法』、ナカニシヤ出版
- 上峯篤史2013『縄文・弥生時代石器研究の技術論的転回』、雄山閣
- 岡崎 敬・小田富士雄・児島隆人・下條信行・高島忠平・永井昌文・永松土巳・布目順郎・橋口達也・藤田 等・藤野隆博・三島 格・山崎一雄・山田登志夫1977『立岩遺蹟 立岩遺蹟調査委員会(飯塚市教育委員会

- 内)』、河出書房新社
- 沖野新一2023『愛媛の石探訪』からさき文化通信合冊本、唐崎旧石器資料館 ※2015の号はこの中に含む
- 金 信行2022「遂行性アプローチの分析視角とそのインプリケーションについて」『アクターネットワーク理論入門 「モノ」であふれる世界の記述法』、ナカニシヤ出版
- 国武貞克2008「石材環境からみた移動=生業領域論」『東京大学公開シンポジウム-伝播を巡る構造変動-』予稿集、東京大学
- グレマス・アルジルダス・ジュリアン著・赤羽研三1992『意味について』叢書記号学的実践16、水声社
- 幸泉満夫2023「四国松山平野の初期農耕段階に伴う横刃型刃器類に対する認識 Recognition about the Early Agricultural Coarse Scrapers in Matsuyama Plain, Shikoku Region」『遺跡』第55号、遺跡発行会
- 斎野裕彦1988「南小泉遺跡出土の弥生時代の石器例」『年報 仙台市文化財調査報告書』、仙台市教育委員会
- 下條信行2008「大型石庖丁について」『下條信行先生愛媛大学退任記念献呈論文集・著作集 地域文化の考古学大陸系磨製石器論』、愛媛大学法文学部考古学研究室
- 竹広文明2003『サヌカイトと先史社会』、溪水社
- 多田 仁2008「大開弥生集落における石器」『大久保遺跡(大久保・竹成地区・E地区)・大開遺跡・松ノ丁遺跡(1次・2次)』、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 田村 隆2005「この石はどこからきたか - 関東地方東部後期旧石器時代古民族誌の叙述に向けて - 」『考古学』Ⅲ、有限会社平電子印刷所
- 田村 隆2012「ごみ問題の発生」『物質文化』(92)、物質文化研究会
- 日本地質学会2016「日本地方地質誌7 四国地方」、朝倉書店
- 欄宜田佳男2019『農耕文化の形成と近畿弥生社会』、同成社
- 野島 永2014「研究史からみた弥生時代の鉄器化」『国立歴史民俗博物館報告』第185集、国立歴史民俗博物館
- 乗松真也2023「石器の生産と流通にかかわる集落-弥生時代中期の瀬戸内地方における検討-」『紀要愛媛』第19号 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 乗松真也2026『弥生石器と瀬戸内社会』、新泉社
- 原田 幹2015「鋸歯状刃部磨製大型石庖丁」『金沢大学考古学紀要36』、金沢大学
- 原田 幹2025「西川津遺跡出土石器の使用痕分析」『島根県古代文化センター調査研究報告書59 島根県西川津遺跡出土品2』、島根県古代文化センター
- 原田 幹・橋口 豊・佐藤兼理・白石哲也2025「舞岡公園実験水田における石器収穫実験」『人類誌集報』20、東京都立大学
- 真鍋昭文1999「遺物」『馬島亀ヶ浦遺跡・馬島ハゼヶ浦遺跡-来島海峡大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第4集-』、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 森 貴教2017「弥生時代北部九州における石庖丁の消費形態-立岩系石庖丁を中心として-」『古文化談叢』79巻
- 森 貴教2018『石器の生産・消費からみた弥生社会』、九州大学出版会
- 柳瀬昭彦編1996『百間川原尾島遺跡5 旭川放水路(百間川)改修に伴う発掘調査Ⅺ』岡山県埋蔵文化財報告106、岡山県文化財保護協会
- ラトゥール,ブリュノ著・伊藤嘉高訳2019『社会的なものを組み直す』、法政大学出版局
- Atkinson, R. C., Shiffrin, R. M., 1968. HUMAN MEMORY: A PROPOSED SYSTEM AND ITS CONTROL PROCESSES. IN Kenneth. W. Spece, & Janet. Taylor Spece (Edits), *THE PSYCHOLOGY OF LEARNING AND*

- MOTIVATION*. Vol.2. Academic press
- Bartlett, Frederic. C., *Remembering 1932. :A study in experimental and social psychology*. Cambridge University Press
- Bijker, Wiebe. E., Hughes, Thomas. P., Pinch, Trevor. J. 1987 *The Social Construction of Technological Systems New Directions in the Sociology and History of Technology*. Cambridge, Massachusetts. *MIT Press*. 17-50
- Binford, Lewis. R., 1979. Organization and Formation Processes: Looking at Curated Technologies. *Journal of Anthropological Research* 25 255-273
- Bryche, Chloee., Federico, Giovanni., Seye, Arthur., Fournel, Arnaud., Osiurak, Francois., 2026 Insights into the cognitive evolution of genus Homo: Eye-tracking analysis of stone tool recognition in trained versus novice modern Humans, *Current Research in Behavioral Sciences* 10
- Geneste, Jean-Michel., 1991 L' APPROVISIONNEMENT EN MATIERES PREMIERES DANS LES SYSTEMES DE PRODUCTION LITHIQUE: LA DIMENSION SPATIALE DE LA TECHNOLOGIE. *Tecnologia y Cadenas Operativas Liticas U.A.B.* 15-18
- Greenfield, Patricia. M., Schneider, Leslie., 1977 Building a Tree Structure: The Development of Hierarchical Complexity and Interrupted Strategies in Children's Construction Activity. *Development Psychology* Vol.13, No.4 , 299-313
- Haidle, M. N., 2009. How to think a simple spear. In: de Beaune, S.A., Coolidge, F.L., Wynn, T. (Eds.), *Cognitive Archaeology and Human Evolution*. Cambridge University Press, Cambridge, pp. 57-73
- Haidle, Miriam. N., 2010. Working-Memory Capacity and the Evolution of Modern Cognitive Potential : Implications from Animal and Early Human Tool Use. *Current Anthropology*. Vol.51, pp. 149-166
- Kawahata, Hodaka., Hatta, Yoshiki., Kajita, Hiroto., Ota, Yuki., Yoshida, Akihiro., Nishina, Kenji., Aono, Tomoya., Köhler, W., 1925. *The Mentality of Apes*. Routledge, London
- Lombard, M., 2012. Thinking through the Middle Age of sub-Saharan Africa *Quaternary International* 270,pp. 140-155
- Mahaney, Robert. A., 2014. Exploring the Complexity and Structure of Acheulean Stoneknapping in Relation to Natural Language. *PaleoAnthropology* 2014. pp. 586-606
- Muller, Antoine., Clarkson, Chris., Shipton, Ceri 2017 Measuring behavioural and cognitive complexity in lithic technology throughout human evolution. *Journal of Anthropological Archaeology* Vol.48
- Oswalt, Wendell. H., 1976. *An Anthropological Analysis of Food-Getting Technology*. Wiley-Interscience Publication, New York
- Perreault, Charles. P., Brantingham, Jeffrey., Kuhn, Steven. L., Wurz, Sarah., Gao, Xing., 2013. Measuring the Complexity of Lithic Technology. *Current Anthropology*. Vol.54, 397-406
- Schiffer, Michael. B., 1972. Archaeological Context and Systemic Context *American Antiquity*, Vol.37.No.2
- Sillitoe, Paul., & Hardy, Karen., 2003. Living Lithics: ethnoarchaeology in Highland Papua New Guinea. *Antiquity* 77
- Stout, Dietrich., 2011. Stone toolmaking and the evolution of human culture and cognition. *PHILOSOPHICAL TRANSACTIONS OF THE ROYAL SOCIETY B*, 366 1050-1059
- Vygotsky, Lev. S., 1989. Concrete human psychology. *Soviet Psychology*. 27. 2. PP. 53-77

(2026年3月31日)

別名寺谷 I 遺跡出土の古代施釉陶磁器

—未報告資料の再整理—

青木聡志

はじめに

別名寺谷 I 遺跡は愛媛県今治市別名字寺谷に所在し(図1)、今治新都市開発に伴い平成16年度に発掘調査が実施された。古代では鍛冶炉29基・掘立柱建物跡・段状遺構で構成された鍛冶工房跡が確認され、在庁官人あるいは在地の官人層が主導した官営の鍛冶工房跡と評価されている(池尻・和田2007)。別名寺谷 I 遺跡は遺構だけでなく、緑釉陶器や灰釉陶器、越州窯系青磁などの奢侈品が多数出土しており、越州窯系青磁では愛媛県内唯一の托が出土している。近年別名寺谷 I 遺跡の東に位置する別名端谷 I 遺跡2次の発掘調査が実施され、別名端谷 I 遺跡2次では200点を超える緑釉陶器が出土し、別名地区は愛媛県内でも有数の緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁が出土する地域であることが明らかになりつつある。別名寺谷 I 遺跡では、報告書において緑釉陶器24点、灰釉陶器10点、越州窯系青磁3点報告・掲載されているが、未報告資料として緑釉陶器70点、灰釉陶器51点出土していることが出土遺物一覧に報告されている。つまり、緑釉陶器94点、灰釉陶器61点、越州窯系青磁3点出土していることになり、緑釉陶器は別名端谷 I 遺跡2次、八町・八町1号遺跡(今治市)、糸大谷遺跡(今治市)、灰釉陶器は阿方春岡遺跡(今治市)、別名端谷 I 遺跡2次に次ぐ出土点数であり、愛媛県内有数の出土量を誇るといえる。

別名寺谷 I 遺跡の緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁の未報告資料を整理することは、別名寺谷 I 遺跡の古代の再評価につながるとともに、愛媛県内におけるこれらの需要のあり方を考えるうえでも重要である。よって、本稿では別名寺谷 I 遺跡で出土した緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁を未報告資料も含めて整理し、本遺跡における古代の施釉陶器・初期貿易陶磁器の需要のあり方について検討したい。

1 別名寺谷 I 遺跡における緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯形青磁の既報告資料

前述したように、別名寺谷 I 遺跡の報告書では緑釉陶器24点、灰釉陶器10点、越州窯系青磁3点^{註1}が報告されている(図2)。緑釉陶器は碗、皿、碗か皿、耳皿、器種不明が出土し、皿には輪花皿が認められる。高台形状は、削り出し蛇ノ目高台と削り出し輪高台が認められ、720は削りがやや甘い。705には内底面に「一」字形のヘラ記号が認められる。報告されているものはいずれも京都産であり、一部篠窯の製品が出土している。時期は9世紀後半～10世紀前半にかけてみられ、10世紀前半ごろが多い。灰釉陶器は碗、皿、段皿、壺が報告されている。高台はいずれも貼り付け高台であり、486のように断面が方形状のものや715のような三日月状が認められる。時期はK14窯式新段階(713、717)、K90窯式、H72窯式(345、715)がみられ、9世紀前半～10世紀後半の

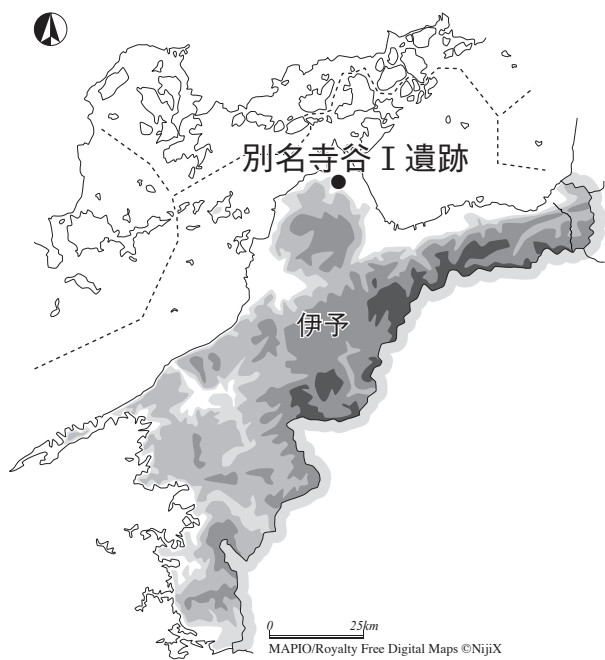


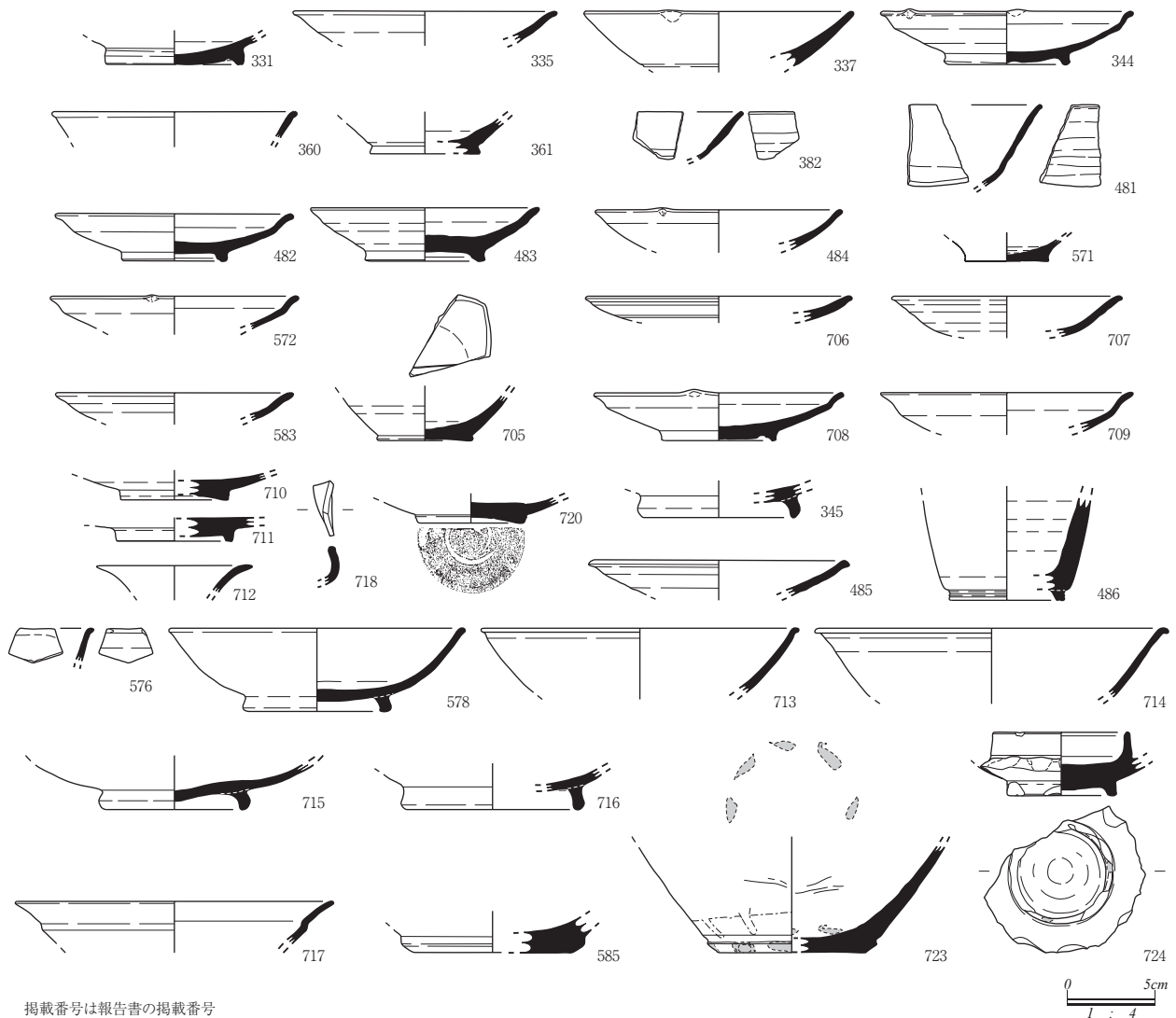
図 1 別名寺谷 I 遺跡の位置および全測図

時期幅が想定される。越州窯系青磁は碗、鉢、托が出土し、いずれも I 類である。724は高台や托の一部が人為的に打ち欠かれている。

報告書掲載資料からは、緑釉陶器・灰釉陶器ともに碗・皿が中心であり、緑釉陶器は9世紀後半～10世紀前半、灰釉陶器は9世紀前半～10世紀後半にかけて認められ、9世紀後半～10世紀前半に集中していることを指摘できる。越州窯系青磁は緑釉陶器・灰釉陶器が集中する9世紀後半～10世紀前半頃に持ち込まれたと想定され、鉢や托といったあまり出土しない器種が認められるのが特徴である。

2 別名寺谷 I 遺跡の緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁の未報告資料

緑釉陶器、灰釉陶器、越州窯系青磁の未報告資料は、報告書に掲載されている出土遺物一覧を参照すると、緑釉陶器70点、灰釉陶器51点の合計121点がB・Cランクのいわゆる未掲載資料とし



掲載番号は報告書の掲載番号

331, 335, 337, 344, 360, 361, 382, 481~484, 571, 572, 583, 705~712, 718, 720 緑釉陶器 345, 485, 486, 576, 578, 713~717 灰釉陶器 585, 723, 724 越州窯系青磁
 331-S13 335-SB1-SP83 337-SB1-SP84 344, 345-DAN1 360, 361-DAN2 382-SK02 481~486-SD08 571, 572-2号土器溜まり 576-SP18 578-SP30 583-SP58 585-SP64
 705~718, 720, 723, 724'包含層

図2 別名寺谷I遺跡既報告資料

て報告されている。別名寺谷 I 遺跡における未報告資料の資料調査は2025年8月に実施し、緑釉陶器49点、灰釉陶器42点、越州窯系青磁4点確認でき、合計95点の未掲載資料が認められた。報告書の出土遺物一覧の総数と確認した未報告の点数は一致しないが、以下では未掲載資料として確認した緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁について報告する²⁾(図3～5)。

1～4は越州窯系青磁である。いずれも碗であり、I類である。3は内面が全面施釉、外面は下部が一部露胎している。4は内外面に重ね焼き時の砂目の痕跡が認められる。

5～53は緑釉陶器である。碗、皿、碗か皿が出土し、耳皿や壺、瓶類は認められない。10、20、30は輪花皿・碗であり、10は切れ込み、20、30は押圧によって輪花にしていると考えられる。15は口縁端部内面に1条の沈線が認められる。37、41は稜碗であり、41はやや大型の碗の可能性ある。底部は5のような削り出し円盤高台、6のような削り出し蛇ノ目高台、34～36のような削り出し輪高台が認められる。5は内外面ともに釉の大部分が剥がれ、胎土が黒色化しており、土中の変化もしくは二次的な要因によって生じたと考えられる。15も5同様に胎土が黒色に変色し、内面は淡緑色の釉が認められ、外面は大部分の釉が剥がれている。釉調は淡緑色から深緑色を呈するものが多い。産地はほぼ全て京都産であり、38は東海産の可能性ある。防長産と近江産は出土していないと考えられる。

54～95は灰釉陶器である。碗、皿、段皿、瓶類が出土している。54はやや大型の碗、63は段皿であると考えられる。69、70、94、95は外面に釉が掛かり、内面は露胎しているため壺や瓶などの袋物であったと考えられる。94は灰釉陶器の器形としてはあまりみられない形態であり、須恵器の可能性あるかもしれない。66、80、90、91は内外面ともに部分施釉であり、底部内面付近は露胎している。89は内面は全面施釉であるのに対し、外面は部分施釉である。59と90では内面に直接重ね焼きの痕跡が認められる。時期はK90窯式(9世紀後半)～O53窯式(10世紀前半)が中心であると考えられる。産地は尾張産と美濃産がみられる。

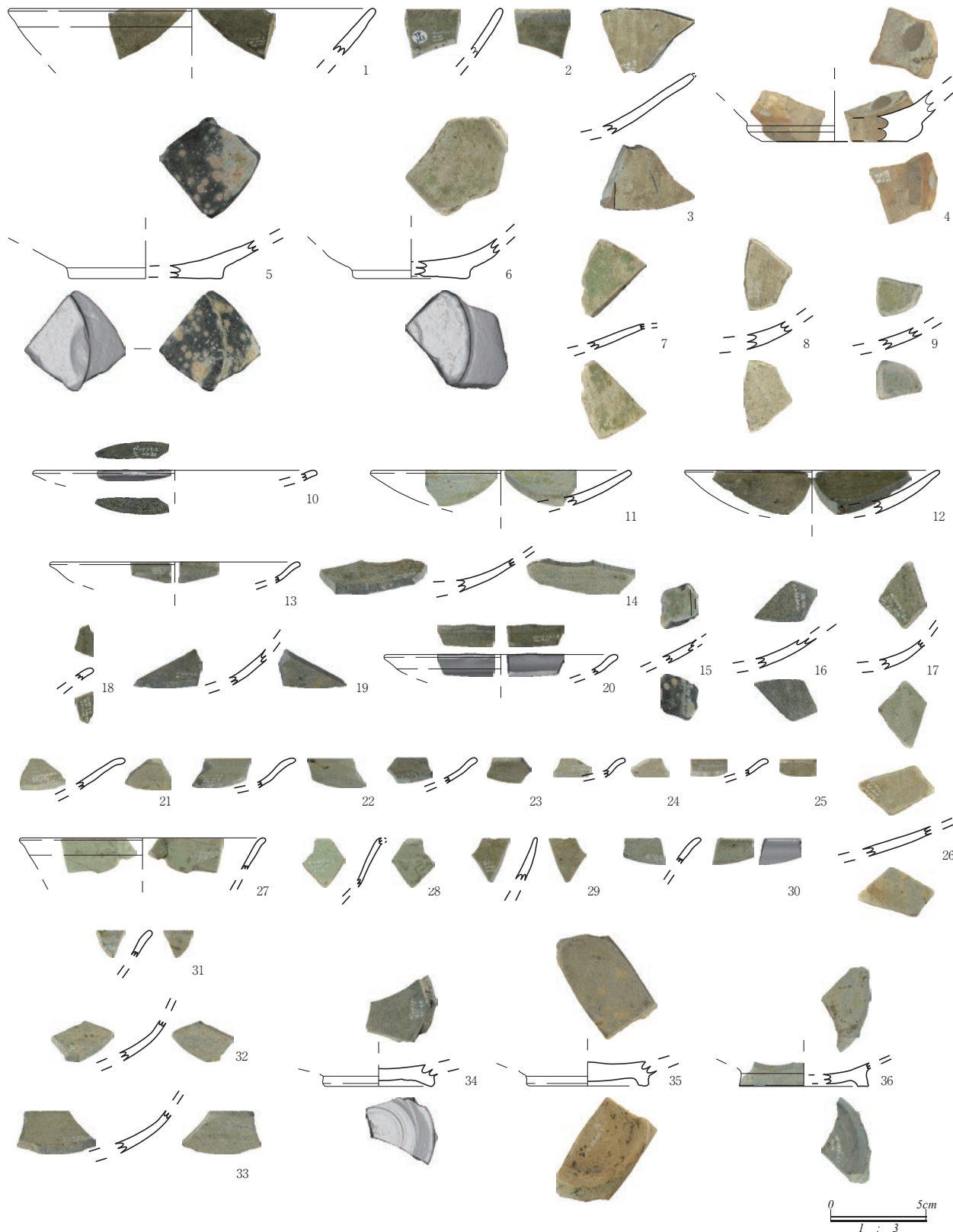
3 数量分析を通した別名寺谷 I 遺跡出土施釉陶器・初期貿易陶磁器

別名寺谷 I 遺跡で出土した緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁の既掲載資料と筆者が確認した未報告資料の合計132点を対象に、器種・時期・産地について整理する(図6)。

(1)器種

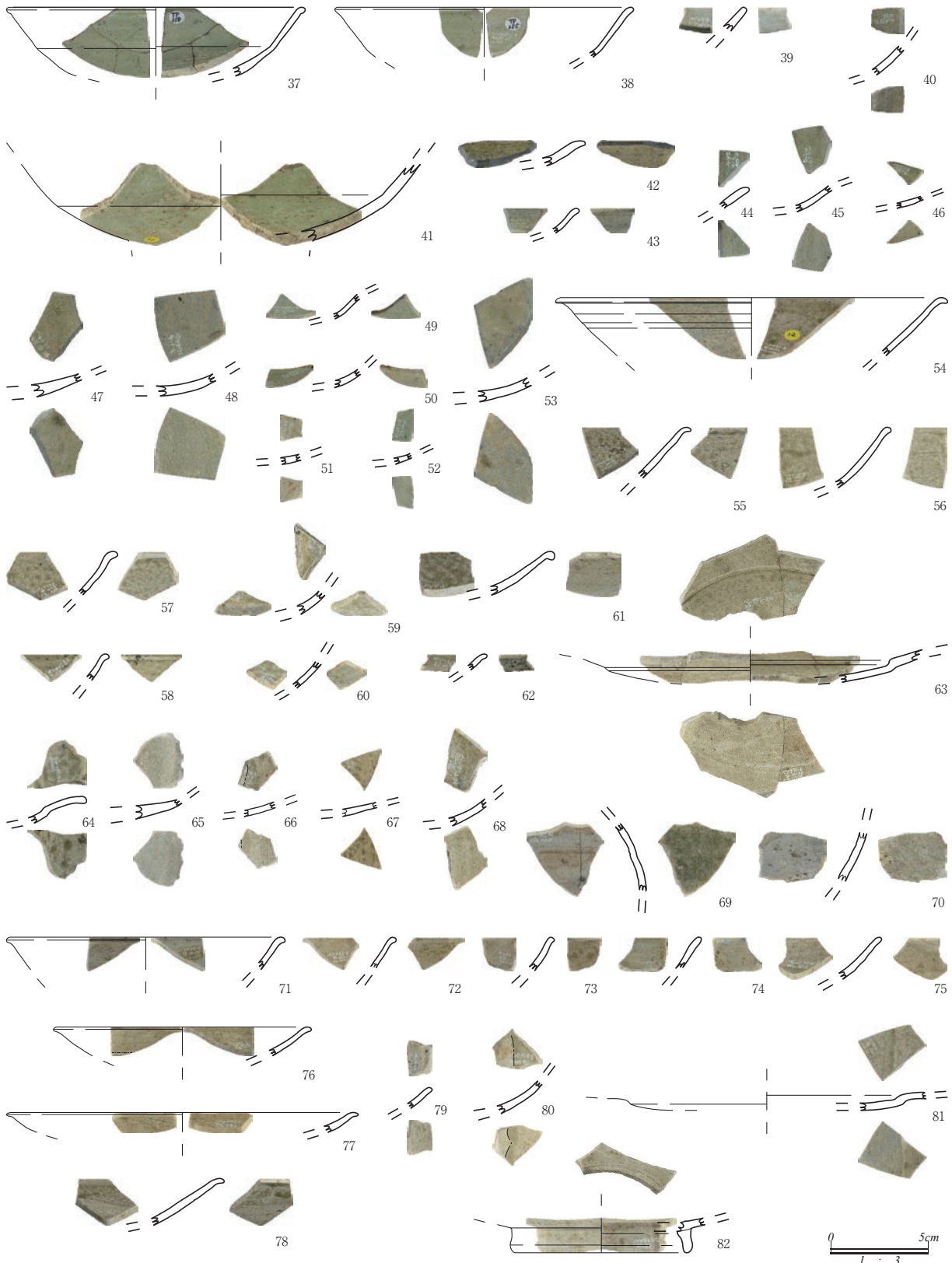
緑釉陶器は皿40点、碗19点、碗か皿11点、耳皿2点、瓶1点認められ、皿が圧倒的多数を占めている。灰釉陶器は皿22点、碗15点、碗か皿7点、段皿3点、瓶類3点、壺2点出土し、皿の出土がやや多い。灰釉陶器段皿が出土しているのは注目される。灰釉陶器段皿は、愛媛県内では古市遺跡(松山市)で1点報告され(栗田ほか2000)、種別は異なるが八町1号遺跡2次で緑釉陶器段皿が1点出土している(青木2025)。越州窯系青磁は碗5点、鉢1点、托1点確認できる。托は、愛媛県内での出土は本遺跡例のみであり、受部は全面が意図的に打ち割られて遺存しておらず、打ち欠かされている。全種別からみると、皿の出土数が多く、灰釉陶器段皿や越州窯系青磁托といった愛媛県内でも類例の少ない器種が認められるのが別名寺谷 I 遺跡の特徴であると言える。

(2)時期



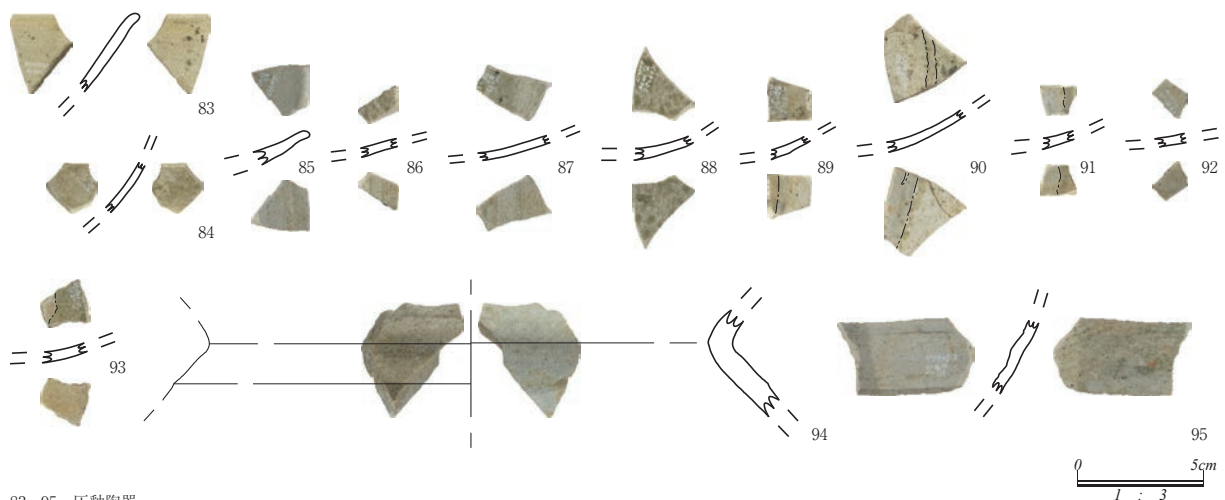
1~4 越州窯系青磁 5~36 緑釉陶器
 1~4, 17~19, 27~33 椀 5, 6, 8, 9, 34~36 椀か皿 7, 10~16, 20~29 皿
 1~4 I類 5~36 京都産
 5~9 9世紀前半 10~19 9世紀後半 20~36 10世紀前半
 1, 3, 6, 7, 8, 10~12, 16, 18, 20, 22, 23, 25, 26, 30, 35, 36 包含層 2, 9 SX02 4, 33 土器溜封 5 不明 13 DAN01 27 DAN01-P19? 28 DAN01-P12 14, 19 カシロ
 15, 21, 24, 29, 32 SK02 17, 34 SD02 31 4区土器溜封

図3 別名寺谷I遺跡未報告資料1



37~53 緑釉陶器 54~82 灰釉陶器
 37~41, 54~60, 71~74 椀 50~53, 67, 68, 82 椀か皿 42~49, 61, 62, 65, 66, 75~80 皿 63, 64, 81 段皿 69, 70 瓶類
 38 京都か東海 37, 39~53 京都 54~70 尾張 71~82 美濃
 37~53 9世紀後半~10世紀前半 54~70 9世紀後半 71~82 10世紀前半
 37, 38, 43, 73, 80 DAN01 39, 40, 42, 48, 54~59, 61, 63, 64, 71, 72, 74~76, 78, 81, 82 包含層 41, 53, 69, 70 不明 44, 45 カジロ 46, 50, 60, 65, 68 SX02 47 P24 49 DAN01-P14 51 SK02 52, 62, 66, 77, 79 SD02 67 SP10

図4 別名寺谷I遺跡未報告資料2



83~95 灰釉陶器
 83,84 椀 91~93 椀か皿 85~90 皿 94,95 瓶類
 83~95 濃尾
 83~95 9世紀後半~10世紀前半
 83,88,94,95 包含層 84 SD01 85,87,89,90,93 SD02 86 不明 91 DAN01 92 SK02

図5 別名寺谷I遺跡未報告資料3

緑釉陶器

器種別出土点数

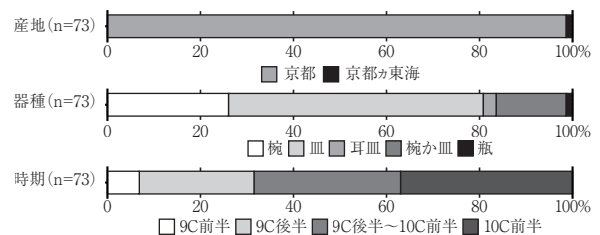
椀	皿	耳皿	椀か皿	瓶	合計
19	40	2	11	1	73

時期別出土点数

9C前半	9C後半	9C	9C後半~10C前半	10C前半	10C後半	10C	不明	合計
5	18	0	23	27	0	0	0	73

産地別出土点数

京都	京都カ東海	近江	防長	不明	合計
72	1	0	0	0	73



灰釉陶器

器種別出土点数

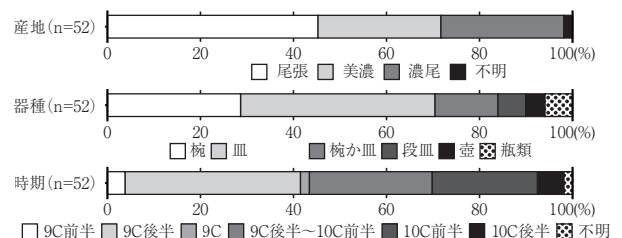
椀	皿	椀か皿	段皿	壺	瓶類	合計
15	22	7	3	2	3	52

時期別出土点数

9C前半	9C後半	9C	9C後半~10C前半	10C前半	10C後半	10C	不明	合計
2	20	1	13	12	3	0	1	52

産地別出土点数

尾張	美濃	濃尾	不明	合計
24	14	13	1	52



越州窯系青磁

器種別出土点数

碗	鉢	托	合計
5	1	1	7

分類別出土点数

I類	II類	合計
7	0	7

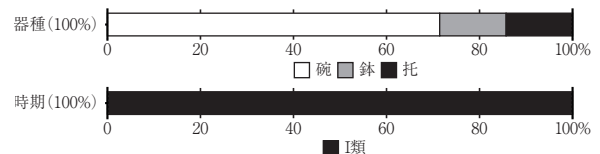


図6 別名寺谷 I 遺跡緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁器種・時期・産地別集計

緑釉陶器は9世紀前半5点、9世紀後半18点、9世紀後半~10世紀前半23点、10世紀前半27点出土している。9世紀後半~10世紀前半にかけて多数出土し、10世紀後半は1点もみられない。灰釉陶器は9世紀前半2点、9世紀後半20点、9世紀1点、9世紀後半~10世紀前半13点、10世紀前半12点、10世紀後半3点、時期不明1点出土している。9世紀~10世紀にかけて出土し、特に9世紀後半~10世紀前半にかけて多数認められる。越州窯系青磁はI類のみであり、8世紀末~10世紀中頃にか

けてみられる。緑釉陶器と灰釉陶器の時期的なまとまりから考えると9世紀後半～10世紀前半に持ち込まれたと想定される。別名寺谷 I 遺跡では、緑釉陶器・灰釉陶器ともに9世紀前半から少量ながらも認められ、9世紀後半～10世紀前半にかけて多数出土し、いずれの時期も緑釉陶器・灰釉陶器ともに20～30点前後みられる。10世紀後半には緑釉陶器・灰釉陶器ともに出土量が急激に減少し、緑釉陶器は1点も出土しておらず、灰釉陶器は数点しか確認できない。

(3)産地

緑釉陶器は京都産72点、京都産か東海産1点認められ、近江産、防長産は1点もみられない。大多数が京都産であり、京都産か東海産としたものも京都産の可能性が高い。灰釉陶器は尾張産24点、美濃産14点、濃尾産14点、不明1点である。尾張産がやや多いが、産地別の出土量は時期的な生産地の変化を反映していると考えられる。

4 他遺跡との比較からみた別名寺谷 I 遺跡の施釉陶器・初期貿易陶磁器の様相

前節で別名寺谷 I 遺跡で出土した施釉陶器・初期貿易陶磁器の器種・時期・産地について整理した。ここでは愛媛県内の事例と比較し、別名寺谷 I 遺跡の様相について検討する。

別名寺谷 I 遺跡では皿を中心とした供膳具が多数を占め、そのなかでも愛媛県内で類例の少ない灰釉陶器段皿が数点出土しているのは注目される。また、緑釉陶器や灰釉陶器の瓶類、越州窯系青磁托といった特殊な遺物が認められる。供膳具中心のあり方は愛媛県内の他の遺跡と同様であるが、皿が中心という特徴は別名寺谷 I 遺跡でしかみられない(青木2024、池尻2018)。

緑釉陶器・灰釉陶器は9世紀～10世紀にかけてみられ、特に9世紀後半～10世紀前半の時期にまとまっていることが明らかになった。愛媛県内では緑釉陶器・灰釉陶器ともに9世紀前半は出土数および出土遺跡が少なく、9世紀後半～10世紀前半に増加し、10世紀後半に減少する。別名寺谷 I 遺跡の時期的な変化は愛媛県内における他の遺跡の時期的変化と類似している。しかし、9世紀後半～10世紀前半にかけて20～30点以上緑釉陶器が出土している遺跡では、10世紀後半にも少量ながら出土しているのに対し、別名寺谷 I 遺跡では1点も出土していない。緑釉陶器が数十点以上出土し、このような時期的変化を示す遺跡として本遺跡以外に阿方春岡遺跡がある。阿方春岡遺跡は緑釉陶器・灰釉陶器ともに10世紀後半ごろのものが全く出土していないのに対し、別名寺谷 I 遺跡は10世紀後半に比定される灰釉陶器が数点出土している。このような違いや別名寺谷 I 遺跡の時期的な出土のあり方は、遺跡の性格に起因していると想定される。阿方春岡遺跡は官人層の居宅と考えられ、9世紀後半～10世紀前葉の短期間で廃絶したとされている(小黒・橋本2000)。別名寺谷 I 遺跡は在庁官人あるいは在地の官人層が主導した官営の鍛冶工房跡と評価され、本遺跡を含めた別名・高橋地区では古代の鉄生産に関わる生産遺跡が広がり、時期的に一部時期が併存する形で高橋佐夜ノ谷II遺跡(7世紀後半～8世紀前半)→高橋板敷I遺跡・別名端谷I遺跡(8世紀～9世紀)→別名寺谷I遺跡(9世紀後半～10世紀前半)へ推移したと考えられている(池尻・和田2007、櫛部2008)。つまり、鉄器生産に関わる生産遺跡が長期間に渡って同じ場所で運営されていないことを示唆しており、鍛冶工房が10世紀後半には本遺跡とは別の場所に移り変わっていたために、当該期の施釉陶器が急激に減少したと考えられ、同時期の在地土器もほとんどみられな

調査面積(m ²)	緑釉陶器	点数/100m ²	灰釉陶器	点数/100m ²	越州窯系青磁	点数/100m ²	合計(緑釉・灰釉)	点数/100m ²	合計(緑釉・灰釉・越州窯)	点数/100m ²
3220	73	2.27	52	1.61	7	0.21	125	3.88	132	4.1

図7 別名寺谷 I 遺跡における緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁出土密度

遺跡名	調査面積(m ²)	緑釉陶器	点数/100m ²	灰釉陶器	点数/100m ²	合計(緑釉・灰釉)	点数/100m ²	初期貿易陶磁器出土	性格
別名寺谷 I 遺跡	3220	73	2.27	52	1.61	125	3.88	○	鍛冶工房
八町遺跡群A区	4404	175	3.98	47	1.07	222	5.04	○	
八町遺跡群B区	670	9	1.35	2	0.3	11	1.65	○	
八町遺跡群C区	1000	8	0.8	2	0.2	10	1.0	○	
八町遺跡群D区	1000	6	0.6	0	0	6	0.6	○	
幸の木遺跡	10800	10	0.1	3	0.03	13	0.12		集落
伊予国分寺跡4次	446	8	1.8	4	0.9	12	2.69		国分寺関連
四村額ヶ内遺跡	700	16	2.29	0	0	16	2.29		集落
四村日本遺跡	500	3	0.6	0	0	3	0.6	○	官人の居宅か
中寺馬之丞遺跡	600	5	0.84	0	0	5	0.84		集落
別名端谷 I 遺跡2次	3837.5	201	5.24	50	1.3	251	6.54	○	
阿方春岡遺跡	3200	56	1.75	62	1.94	118	3.69	○	官人の居宅か
糸大谷遺跡	10060	100	0.99	4	0.04	104	1.03	○	臨海性集落
平田七反地遺跡	6400	24	0.38	0	0	24	0.38	○	集落
岩崎遺跡	13000	9	0.07	3	0.02	12	0.09		官的施設の一部か
樽味四反地遺跡	5619	22	0.39	0	0	22	0.39		集落
旗屋遺跡 II	1050	23	2.2	1	0.1	24	2.29		集落

※青木2025を基に一部加筆・修正

※四村額ヶ内遺跡、四村日本遺跡、中寺馬之丞遺跡、糸大谷遺跡は、緑釉陶器の出土点数は資料調査での未報告資料確認後の点数、灰釉陶器は報告書掲載出土点数。別名寺谷 I 遺跡、旗屋遺跡 II は、緑釉陶器は報告書掲載資料と報告書掲載未報告資料の出土点数、灰釉陶器は報告書掲載出土点数。その他の遺跡は、報告書で掲載されている緑釉陶器・灰釉陶器の出土点数。

※別名端谷 I 遺跡2次は報告書が未刊行であり、令和6年度から整理作業を実施している。緑釉陶器の出土点数は青木2024を参考にしており、灰釉陶器は未整理段階の概算の出土数である。整理作業を通して、緑釉陶器、灰釉陶器ともに表で示した数値より増加しており、発掘調査報告書の刊行をまって正式な数値としたい。

図8 伊予国内の緑釉陶器・灰釉陶器出土点数および出土密度

くなる。

緑釉陶器・灰釉陶器の産地は、愛媛県内の他の遺跡の産地構成と同様であり、生産地の時期的な動向を反映させながら施釉陶器を入手している。

100m²あたりの出土点数からみると、緑釉陶器は2.27点、灰釉陶器は1.61点、越州窯系青磁は0.21点、緑釉陶器と灰釉陶器を合計した出土点数では3.88点を示す(図7)。本遺跡よりも大きい数値を示すのは八町遺跡群A区と別名端谷 I 遺跡2次しかなく(図8)、前者は国府津や館、曹司といった伊予国府の重要な拠点の一つ、後者は在地の官人・領主層が直接経営していた可能性がある、鍛冶を中心とした工房集落の性格が想定されている。別名寺谷 I 遺跡は前述したように在庁官人あるいは在地の官人層が主導した官営の鍛冶工房跡と評価されているように、国府との強い関係性があったからこそ施釉陶器や初期貿易陶磁器を多数入手することができたと考えられる。

5 別名寺谷 I 遺跡における施釉陶器・初期貿易陶磁器の利用について

施釉陶磁器の多くは包含層からの出土であるが、約半数は遺構から出土している。ここでは時期ごとの分布や周辺の遺構との関係に着目し、施釉陶磁器の利用のあり方について検討する。

(1)別名寺谷 I 遺跡における集落の概要

別名寺谷 I 遺跡は弥生時代・古代・中世にまたがる複合遺跡であり、小開析谷の奥部に位置している。谷筋付近には鍛冶炉やそれに伴う遺構、谷部と丘陵裾部の傾斜変換点付近に段状遺構や溝が検出され、これらとは独立して調査区西側に広がる小規模な谷の斜面に竪穴住居などが広がっている。古代では、出土遺物の年代や遺構の重複関係から7世紀、8世紀～9世紀、10世紀の遺構変遷が想定されている。7世紀段階は、調査区西側の小規模な開析谷の斜面部に構築された

SI04があり、遺構の規模や形状・立地などからSI05・SI06はこの時期に属する可能性が高い。8世紀～9世紀に位置づけられる遺構はSI02・SX03・SK01～05があり、SI02、SX03は丘陵裾部の傾斜変換点付近、SK01～05は谷部に位置している。10世紀の遺構はSI03、SB01、DAN01～03、鍛冶炉29基、土器溜まりなどがみられ、谷部や東側緩傾斜面を中心に展開している。遺構は鍛冶炉とそれに伴う掘立柱建物跡・段状遺構を中心として、その周囲にこれらの遺構と主軸方向を併せた溝・段状遺構などが配置されている。鍛冶炉は、西側では掘立柱建物跡、東側では段状遺構に伴い、それらの長軸方向に沿って列状に配置されるなど、配置に規則性がみられる。列状配置という規範は、操業時において首尾一貫して厳守され続けたと考えられる。鍛冶炉には相互に重複関係がみられ、とくにDAN02中心部では5基の鍛冶炉が切り合う状況が確認されている。炉の造り替えが少なくとも5回程度おこなわれたものと判断される。

このように、別名寺谷 I 遺跡では3段階の時期変遷が想定され、検出された遺構や出土遺物から、7世紀段階の集落的様相から8世紀～9世紀ごろに官衙的機能をもつ集落へと変化し、10世紀には官衙関連の生産遺跡として変容している。

(2)全体の出土傾向

報告書では、掲載・未掲載含めてSI03、SB01、DAN01、DAN02、DAN03、SK02、SD07、SD08、SD10、1号土器溜まり、2号土器溜まり、SP18、SP30、SP58、SP64、包含層から施釉陶磁器が出土していることが出土遺物一覧で報告されている。未報告資料の資料化にあたり、土器にかかっている注記を参照し、改めて出土情報について整理し直し、時期ごとの出土数を表したのが図9である。報告書作成時に、発掘調査時の遺構番号の振り替えなどが行われた可能性はあるが、注記情報から未掲載資料の出土情報についてみると、DAN01、SD01、SD02、SK02、SX02、カジロ、4区土器溜まり、土器溜まり、SP10、SP12、SP14、SP24、SP30、包含層から出土していることが判明した。これらのうち、4区土器溜まりと註記されているものは出土遺物一覧と照らし合わせると、1号土器溜まりの種別および点数が一致しており、1号土器溜まりから出土したものと判断される。土器溜まりと註記されたものは、出土遺物一覧で越州窯系青磁の出土情報について触れられていないが、2号土器溜まりから出土したものと考えられる。報告書でSD02は弥生時代の遺構と報告されているが、施釉陶器が12点出土しており、古代に属する遺構であった可能性がある。その一方で、弥生時代の遺構として同様に報告されているSD1でも緑釉陶器が1点出土しているが、弥生土器が多数を占めているため、緑釉陶器は混入であると想定され、SD1に近接しているDAN2に伴うものと考えられる。

別名寺谷 I 遺跡では、DAN1やDAN2の周辺遺構、SX02、SD02で多く出土している(図10)。さらにいえば、前述した遺構は谷筋に集中し、丘陵斜面に位置する遺構からはDAN01とSI03を除いて1点も出土していない。施釉陶磁器は谷筋に面した遺構を中心とした空間で受容されていたと考えられる。また、特定の施釉陶器が集中して出土する遺構は認められないため、使用方法や場での緑釉陶器・灰釉陶器の選択的な使い分けは想定し難い。

(3)時期別使用のあり方

時期別の施釉陶磁器の分布から、時期による施釉陶磁器の使用のあり方についてみていく(図

遺構	区分	9C前半	9C後半	9C	9C後半～10C前半	10C前半	10C後半	I類	不明	小計
SI03	緑釉陶器					1				1
DAN01	緑釉陶器		1		3	1				5
	灰釉陶器				1	2	1			4
DAN02	緑釉陶器		1		1					2
SB01	緑釉陶器		1			1				2
SD01	灰釉陶器				1					1
SD02	緑釉陶器		1		1	1				3
	灰釉陶器		2		5	2				9
SD08	緑釉陶器					4				4
	灰釉陶器		1	1						2
SK02	緑釉陶器		1		2	4				7
	灰釉陶器				1					1
SX02	緑釉陶器	1			2					3
	灰釉陶器		3							3
	越州窯系青磁							1		1
カジロ	緑釉陶器		2		2					4
2号土器溜まり	緑釉陶器		1		1					2
4区土器溜まり	緑釉陶器					1				1
土器溜まり	緑釉陶器					1				1
	越州窯系青磁							1		1
SP10	灰釉陶器		1							1
SP12	緑釉陶器					1				1
SP14	緑釉陶器				1					1
SP18	灰釉陶器		1							1
SP19	緑釉陶器					1				1
SP24	緑釉陶器				1					1
SP30	灰釉陶器		1							1
SP58	緑釉陶器		1							1
SP64	越州窯系青磁							1		1
包含層	緑釉陶器	4	9		9	11				33
	灰釉陶器	2	11		5	8	2		1	29
	越州窯系青磁							4		4
小計	緑釉陶器	5	18		23	27				73
	灰釉陶器	2	20	1	13	12	3		1	52
	越州窯系青磁							7		7

図9 別名寺谷 I 遺跡遺構別時期集計

11～13)。

9世紀前半

施釉陶磁器が出土した遺構はSX02しかなく、大多数は包含層からの出土である。SX02で出土した緑釉陶器は細片であり、この時期の廃棄状況を示している可能性は低く、のちの埋没に伴う混入であると考えられる。別名寺谷 I 遺跡では包含層から出土した6のように、蛇ノ目高台をもつ緑釉陶器が認められ9世紀前半でも中頃に近い時期と想定され、この時期から施釉陶器を需要する階層もしくは空間が形成されていたと考えられる。

9世紀後半

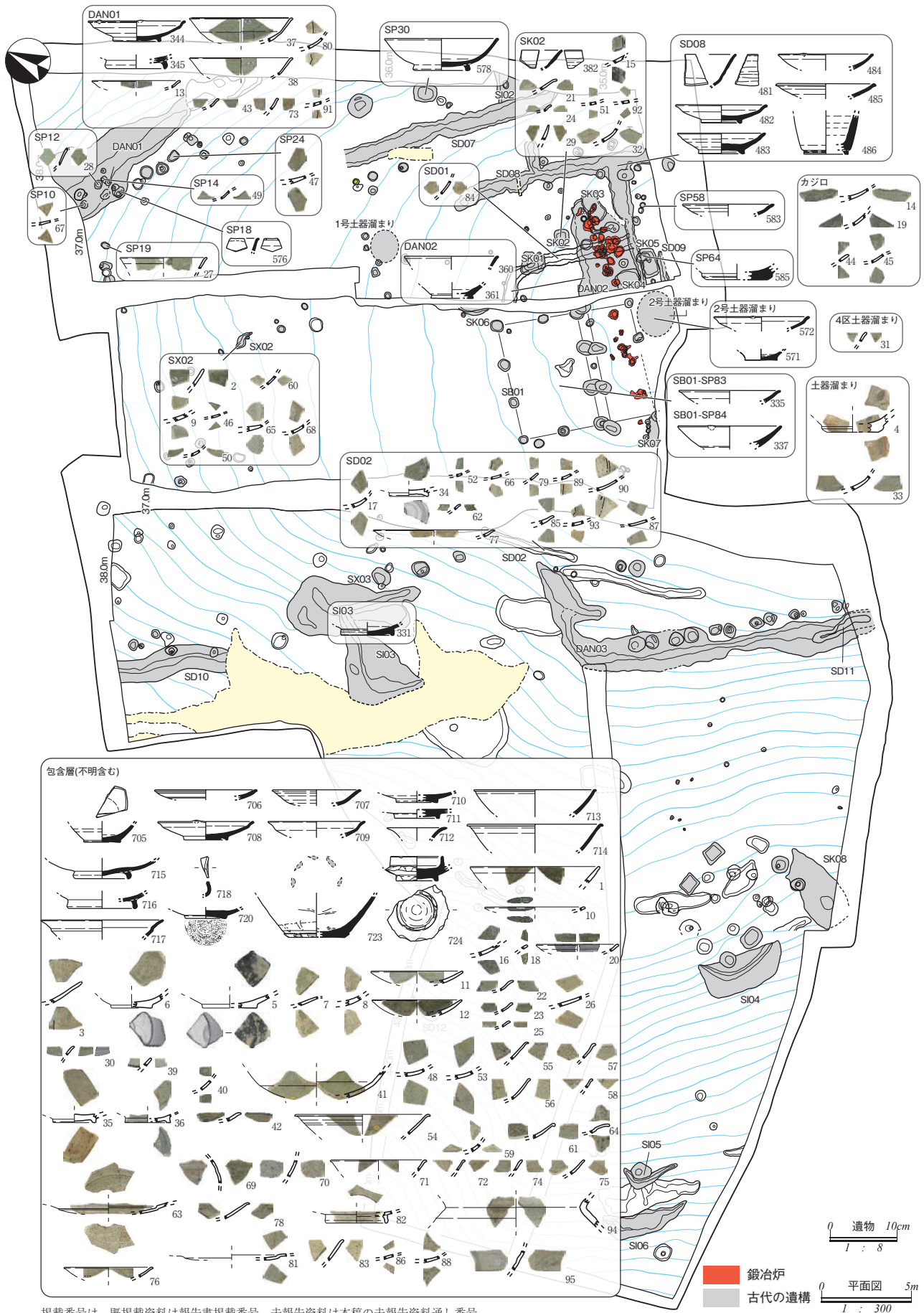
施釉陶磁器は調査区の谷筋に面した遺構を中心に出土しており、DAN01やDAN02を構成する関連遺構やその周辺、SD02、SX02に集中している。緑釉陶器が鍛冶炉から出土しており、鍛冶炉周辺もしくは鍛冶炉そのものから出土したか不明であるものの、小規模ながらも9世紀後半から鍛冶を行っていた可能性が示唆される。

9世紀後半～10世紀前半

この時期の施釉陶磁器は、9世紀後半もしくは10世紀前半の施釉陶磁器が出土する遺構およびその範囲と同様であり、調査区の谷筋に面した遺構を中心に出土し、DAN01やDAN02を構成する関連遺構やその周辺、SD02、SX02に集中している。

10世紀前半

施釉陶磁器の分布は9世紀後半と同様に谷筋に面した遺構であるDAN01やDAN02およびその周辺に集中している。DAN2周辺では土器が多数まとまって出土した2号土器溜まりやSD08から少



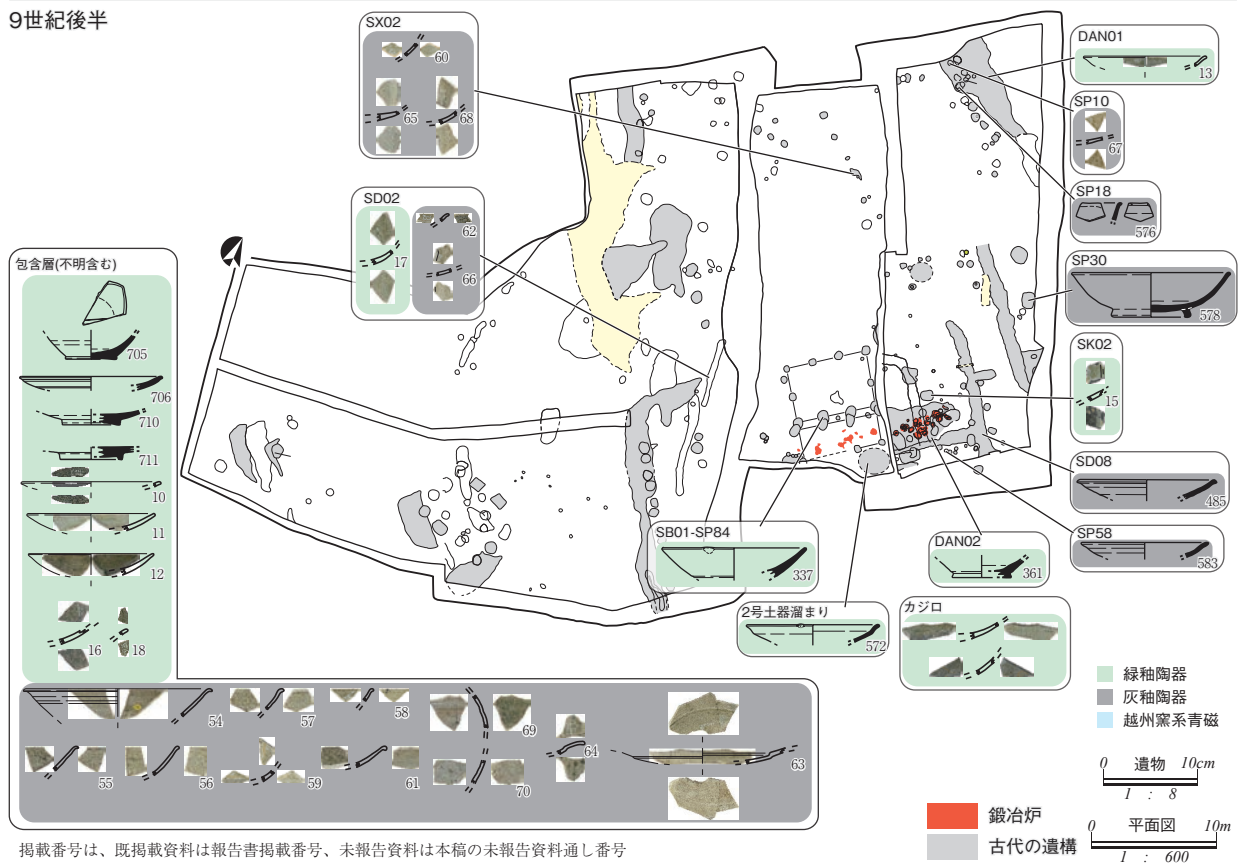
掲載番号は、既掲載資料は報告書掲載番号、未報告資料は本稿の未報告資料通し番号

図 10 別名寺谷 I 遺跡施釉陶器・陶磁器出土分布図 1

9世紀前半



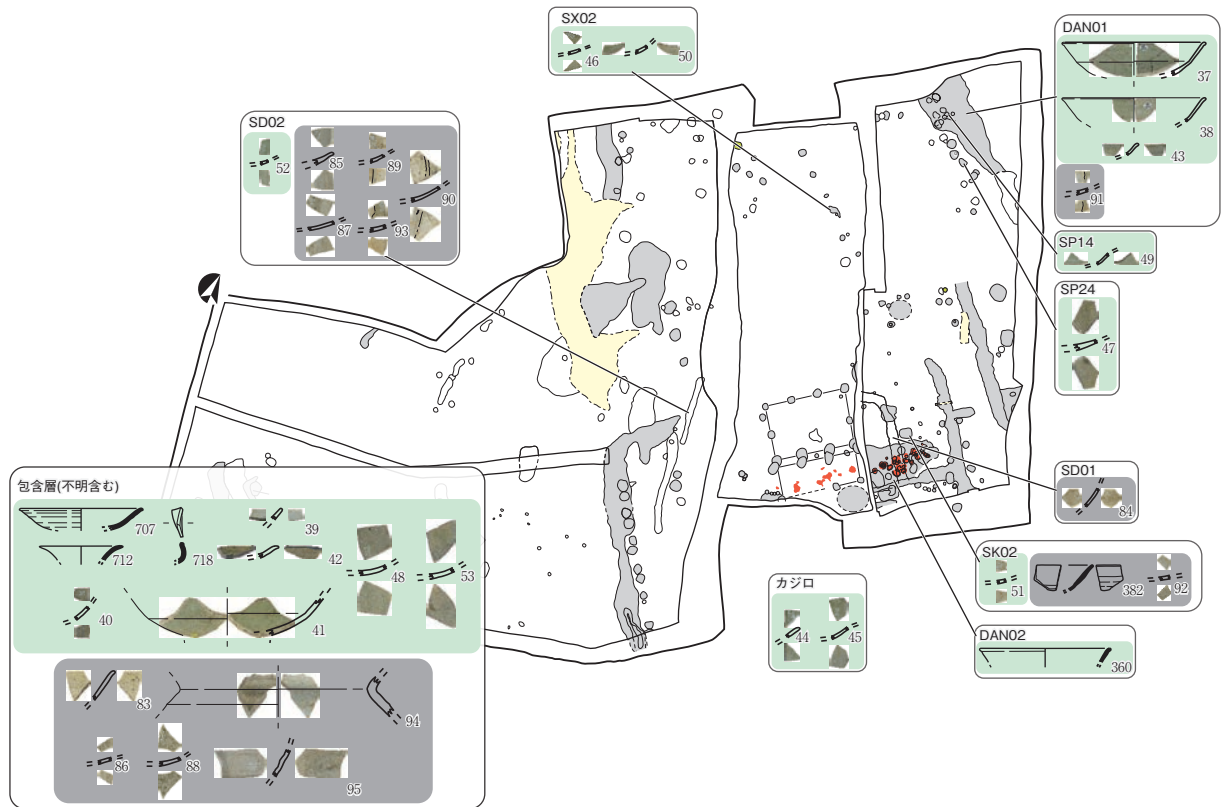
9世紀後半



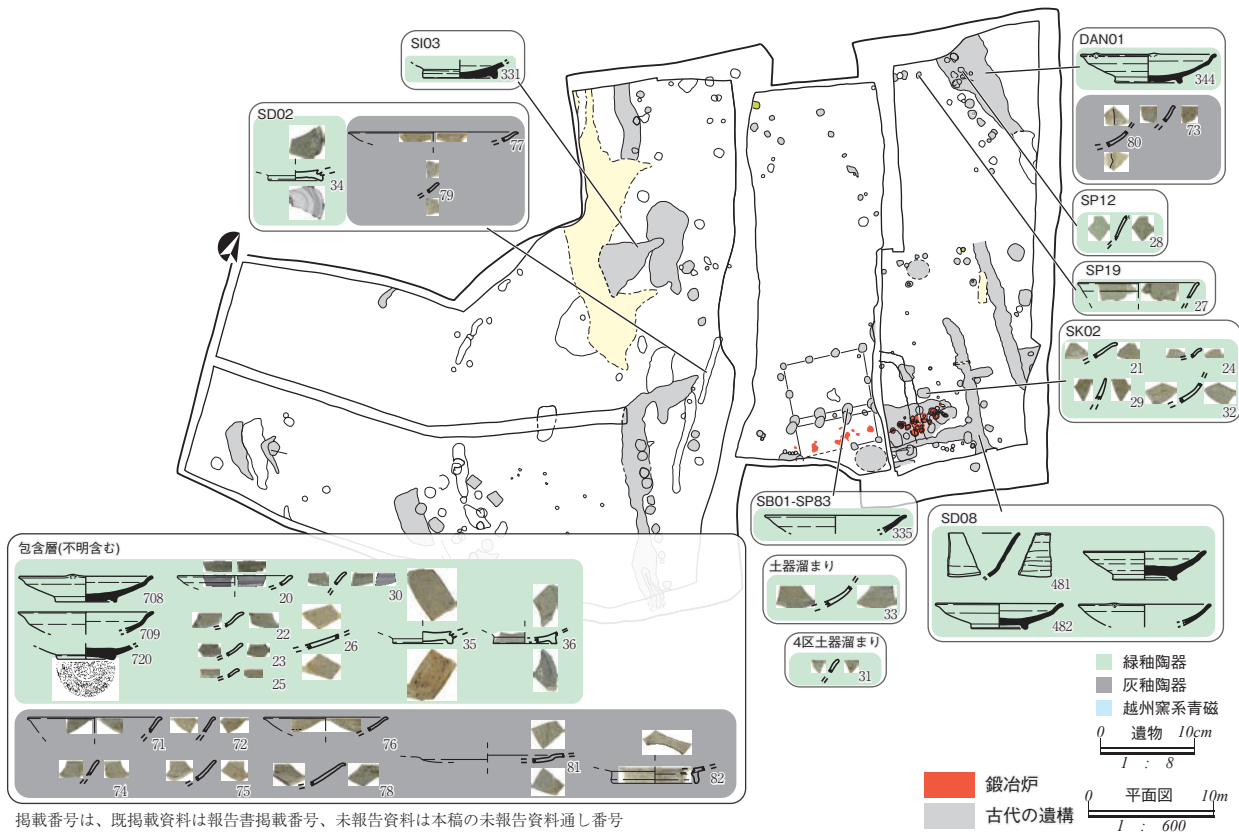
掲載番号は、既掲載資料は報告書掲載番号、未報告資料は本稿の未報告資料通し番号

図 11 別名寺谷 I 遺跡施釉陶器・陶磁器時期別出土分布図 2

9世紀後半～10世紀前半



10世紀前半



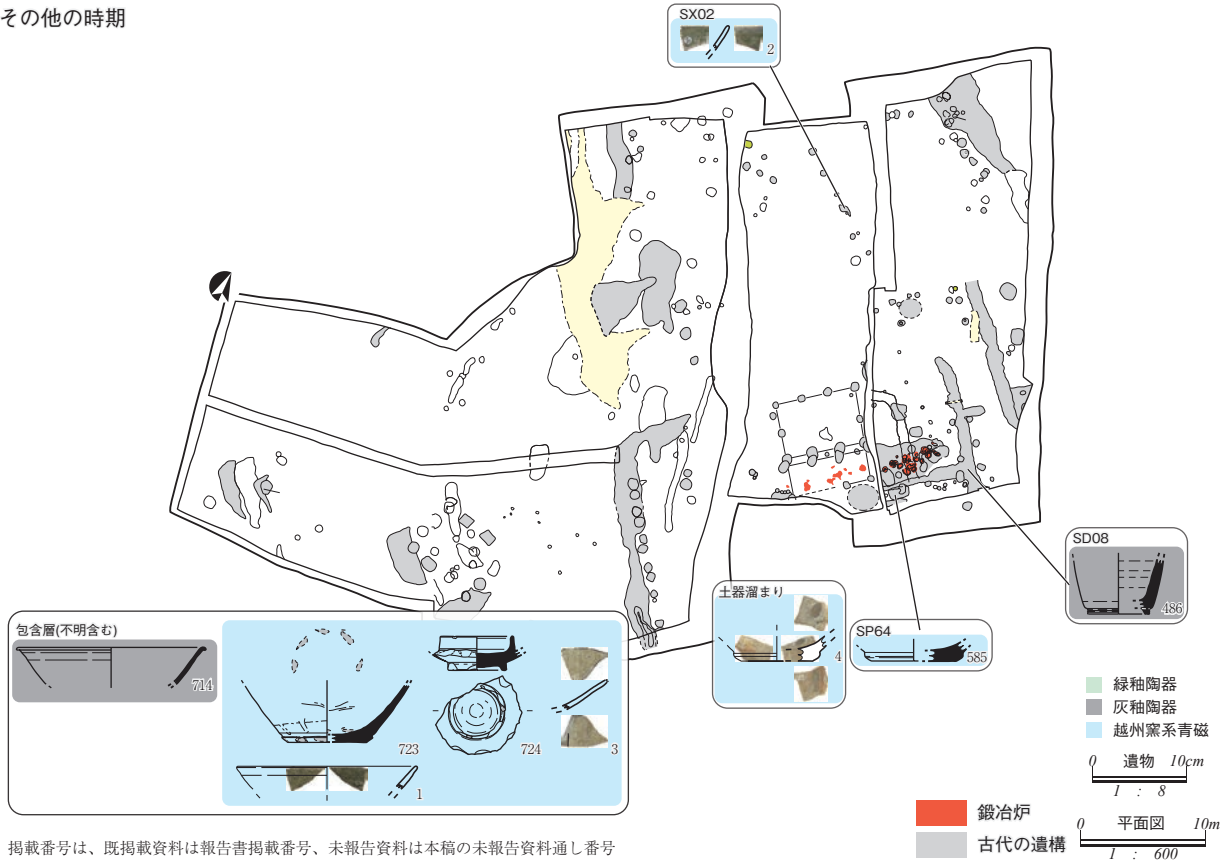
掲載番号は、既掲載資料は報告書掲載番号、未報告資料は本稿の未報告資料通し番号

図 12 別名寺谷 I 遺跡施釉陶器・陶磁器時期別出土分布図 3

10世紀後半



その他の時期



掲載番号は、既掲載資料は報告書掲載番号、未報告資料は本稿の未報告資料通し番号

図13 別名寺谷I遺跡施釉陶器・陶磁器時期別出土分布図4

量緑釉陶器が出土しており、何らかの儀式・儀礼が行われたのちに多量に出土した土師質土器や黒色土器とともに廃棄された可能性が想定される。

10世紀後半

施釉陶磁器が出土した遺構はDAN01しかなく、施釉陶磁器の出土量が激減し、緑釉陶器は1点もみられず、灰釉陶器しか出土していない。DAN01は10世紀後半まで機能していたと考えられるが、前時期まで施釉陶磁器がまとまって出土していたDAN02周辺では1点もみられない。

そのほかの時期

越州窯系青磁はSX02、1号土器溜まり、DAN02周辺の遺構から出土し、特定の遺構に偏ることなく分散して分布している。

(4)別名寺谷 I 遺跡における施釉陶磁器の利用

以上、別名寺谷 I 遺跡で出土した施釉陶磁器の遺跡内および時期別にみた分布状況について検討した。別名寺谷 I 遺跡では前述したように施釉陶磁器は谷筋に面した遺構を中心とした空間に集中し、特にDAN01とDAN02の周辺およびそれらの関連遺構、SX02、SD02にまとまっている。DAN01は付帯施設と考えられる小穴が検出され、床面では被熱痕跡等は確認されていないため、鍛冶工房ではないものの、何らかの作業空間であったと考えられる。DAN02では床面から鍛冶炉がまとまって検出され、SB01も庇で鍛冶炉が確認されていることからDAN02とSB01は鍛冶工房であったと考えられている。このような生産域で施釉陶磁器がまとまって出土していることは、この周辺で饗宴・儀礼が行われていたことを示唆している。饗宴・儀礼の痕跡として、1号土器溜まりや2号土器溜まり、SD08では土師質土器を中心とした土器の大量一括廃棄をうかがえ、このような土器の大量一括廃棄は儀礼的な意味をおびた土器の使用法として国府や官衙関連の遺跡で認められると指摘されている(鈴木2011)。DAN02周辺では、前述した土器の一括廃棄遺構だけでなく、SK02やSD02から施釉陶磁器が多数出土している。このことは、土師質土器の一括廃棄に伴う儀礼とは異なる儀礼がDAN02周辺で盛んに行われていたことを示唆しているかもしれない。

6 おわりに

本稿では、別名寺谷 I 遺跡で出土した緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁の未報告資料を整理し、これらの器種や時期、産地について再検討した。別名寺谷 I 遺跡では、施釉陶磁器が9世紀後半～10世紀前半にまとまり、10世紀後半以降はほとんどみられないことを明らかにした。そして、施釉陶磁器の遺跡内での利用を明らかにするために、施釉陶磁器の分布状況について検証した。別名寺谷 I 遺跡では遺跡全域から出土しているのではなく、居住域もしくは作業場と考えられるDAN01と生産域であるDAN02周辺を中心に施釉陶磁器が必要されていたことを明確にし、これらの遺構周辺で執り行われた儀礼で使用されていた可能性について指摘した。今後は周辺地域の施釉陶磁器の出土状況について整理し、地方における施釉陶磁器の利用のあり方について検討を重ねていきたい。

謝辞

以下の方々や調査機関には資料調査の便宜の他、多くの御指導や御教示を賜りました。記して感謝を申し上げます。(敬称略)

高橋照彦、福本佳織、持永壮志朗

愛媛県教育委員会、公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター

註

1 池尻・和田2007では、718は灰釉陶器耳皿、720は無釉陶器皿と報告されている。大阪大学大学院の高橋照彦先生に資料を実見していただいたところ、718、720ともに緑釉陶器とご教示いただいた。そのため本稿では緑釉陶器として報告する。

2 緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁の年代・産地については尾野2003、高橋1995a、b、2003、高橋2020などを参照して、筆者が判断した。筆者の勉強不足もあり、一部資料の年代・産地については誤っているものがあると思われる。ご教示およびご批判をいただき、今後の糧にしていきたい。

未報告資料の図化では、Agisoft社製Metashapeを用いて3次元データを作製し、出力したデータをCloudCompare(Ver.2.13.2)で調整して断面および画像を書き出した。書き出した画像はAdobe社のPhotoshop2025(Ver.26.1.0.121)で加工し、その後Illustrator2024(Ver.28.7.1)でCloudCompareで書き出した断面図とPhotoshopで加工した画像を貼り付けて作図した。パソコン画面上でロクロ目や稜線が水平になるように傾きをあわせたが、細片が非常に多く、傾きや復元径において判断に迷うものが大半であった。資料化を第一の目的として図化したため、傾きや復元径に誤っているものが含まれているが、ご容赦いただきたい。なお、作図の方法については青木2025aを参照していただきたい。

参考文献

青木聡志2024a「別名端谷Ⅰ遺跡の古代の評価をめぐる基礎的整理—緑釉陶器と土師質土器三足盤—」『紀要愛媛』第20号 43-80頁

青木聡志2024b「遺跡からみた古代・中世の日高丘陵—小泉・別名地区の近年の発掘調査成果—」『伊予史談』415号 15-27頁

青木聡志2025a「遺物実測補助における3Dスキャナー利用の一事例」『紀要愛媛』第21号 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター 69-86頁

青木聡志2025b「愛媛県八町遺跡群における施釉陶器・初期貿易陶磁器からみた古代の様相」『中近世陶磁器の考古学』第19巻 雄山閣

池尻伸吾・和田正人2007『別名端谷Ⅰ遺跡・別名端谷Ⅱ遺跡・別名成ルノ谷遺跡・別名寺谷Ⅰ遺跡・別名寺谷Ⅱ遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第139集 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

池尻伸吾2018「第4節 まとめ」『旗屋遺跡Ⅱ 上三谷篠田・鶴吉遺跡 JR予讃線他埋蔵文化財調査報告書』埋蔵文化財発掘調査報告書 第194集 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 46-56頁

小黒裕二・橋本貴登2000「第10章考察」『阿方春岡遺跡 阿方牛ノ江遺跡 矢田八反坪遺跡 矢田大出口遺跡 矢田平山近世墓 矢田平山古墳 矢田平山遺跡 一般国道196号今治北道路埋蔵文化財調査報告書』埋蔵文化財発掘調査報告書 第88集 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 319-328頁

尾野善裕2003「古代の尾張・美濃における緑釉陶器生産」『古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器—生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会 20-37頁

榑部大作2008『高橋板敷Ⅰ・Ⅱ遺跡』今治市埋蔵文化財調査報告書第93集 今治市教育委員会

栗田茂敏・相原浩二・河野史知2000『古市遺跡・下苅屋遺跡2・3次』松山市文化財調査報告書第75集 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

鈴木康之2011「日本中世の宴会と土器」『家具道具室内史』第3号 家具道具室内史学会 69-83頁

高橋透2020『多賀城施釉陶磁器』宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅴ 宮城県多賀城跡調査研究所

高橋照彦1995a「緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 257-278頁

高橋照彦1995b「平安期緑釉陶器の生産の展開と変質」『国立歴史民俗博物館研究報告』第60集 国立歴史民俗博物館 137-166頁

高橋照彦2003「平安京近郊の緑釉陶器生産」『古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器—生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会 5-19頁

図版出典

図1 池尻・和田2007図77を一部改変して筆者作成 図2～7、9～13 筆者作成 図8 青木2025bを一部改変して筆者作成

(2026年2月24日)

中世伊予における壺・甕・擂鉢 2 一亀山焼系瓦質土器を中心に一

首藤久士

1 はじめに

亀山焼は、岡山県倉敷市付近で中世に生産された、須恵器の系譜を引く焼き物である。高梨川右岸に立地する中世前期の生産地(亀山遺跡)は、平安時代に和歌で「甕の泊」と読まれた当時は海に近く、製品の出荷にも適していたと考えられる(伊藤1987)。

生産地と瀬戸内海を挟んだ伊予でも、中世において一定量の亀山焼および亀山焼系瓦質土器が出土しており(図1)、当時の人々に広く使用されていたことがわかる。よって、今回は当地出土の甕を中心に集成し、伊予における使用状況について考えてみたい。

2 調査・研究史

生産地の調査例としては、亀山遺跡で中世前期の登り窯が6基出土している。伊藤晃氏や調査を担当した岡田博氏により分類や変遷が提示されている(伊藤1987・岡田博1988)。また、中世末頃～近世の例であるが里見山中遺跡では、窯跡の一部が調査され(岡山県里庄町教育委員会2014)、中世後期の瓦質土器も出土することから、遺跡周辺に先行する中世後期の生産窯の存在が想定できる(首藤2025a)。一方の消費地では、草戸千軒町遺跡や大村遺跡などで編年が試みられてきた(篠原1987・柴田英1996・柴田亮2024)。このように、後期の生産窯が未調査であるため、現状では前期に生産地編年が、後期では亀山焼系瓦質土器として消費地資料を使用した編年研究が行われている。

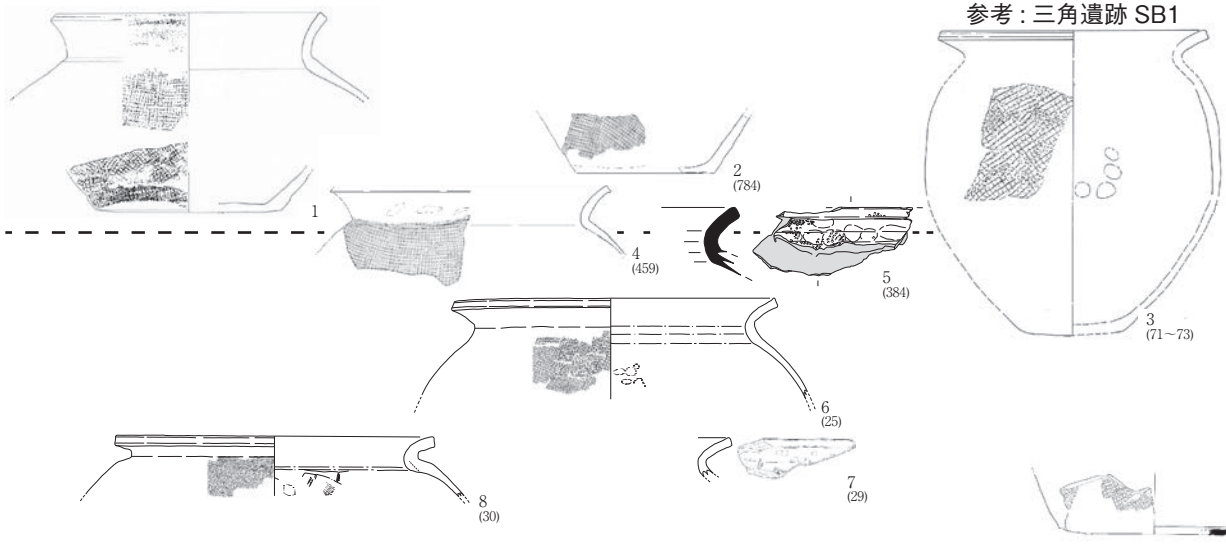
伊予では湯築城跡で中世後期の亀山焼系瓦質土器が一定量出土している(柴田圭1998)。また、中世土器勉強会や四国中世土器研究会でも亀山焼があつかわれてきた。その後、柴田圭子氏により瀬戸内各地における各時期の亀山焼の搬入状況や県内島嶼部の分布、山陽地域との南北流通により能島城跡や見近城跡をはじめとする中世後期の島嶼部へもたらされた甕のほか複数種の出土が指摘された(柴田圭2004、2005a、2011)。

これまで認識されてきた代表的な甕の形態的特徴は、中世前期では口縁部が頸部から緩やかに外反し、端部は平坦面をもつものがある。胴部は比較的長胴で、上半部に最大径を持つ。外面調整は基本的に格子叩きが主体となるほか、生産地(亀山遺跡)で13世紀前半には平行叩きも半数近くを占めている。また、内面には同心円状当て具痕が残る。中世後期では、引き続き外面に格子叩きのほか頸部周辺では縦方向のハケ目が顕著となる。胴部でも内面もしくは内外面にハケ調整の個体も確認できる。焼成は、前期では須恵質のほか焼成不良で瓦質となったものもみられる。後期ではほぼ瓦質焼成のみとなる(岡田博1987・荻野1992・佐藤1998)。



図1 伊予における亀山焼・亀山焼系瓦質土器の分布

13c



参考：三角遺跡 SB1

14c

1：伊豫神社経塚 2・4：南江戸上沖遺跡 3：三角遺跡 5：余戸弘川遺跡 6～9：船ヶ谷遺跡
 10：馬越和多地遺跡 11・12：大相院遺跡 13：経田遺跡 14：古照遺跡 15～21：湯築城跡
 (※各報告書を一部改変して転載。)

参考：馬越和多地遺跡 1次 SD02

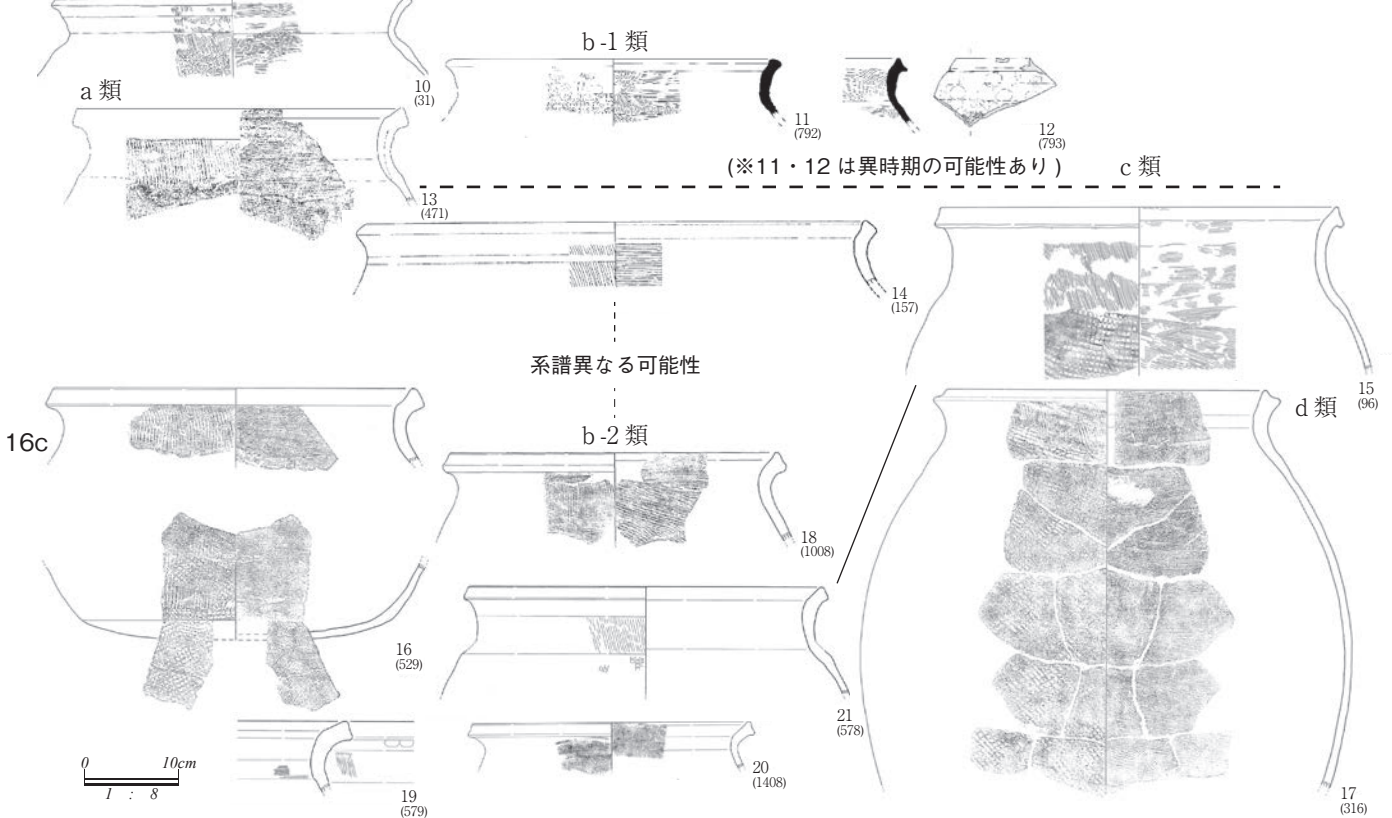


図2 伊予における亀山焼・亀山焼系瓦質土器の変遷

3 甕の変遷と瓦質土器甕の分類 (図2)

亀山焼は13世紀後半には伊予への搬入が開始され、宗教関連である伊豫神社経塚のほか(野口1982)、今治平野や松山平野およびその周辺部の集落遺跡などでみられる。14世紀では松山平野の資料が中心となるが、前半が多い。底部は平底が確認できる。また、8のように頸部が強く屈曲する形態もみられ、これを最後に伊予ではあまりみられなくなる*1。

柴田亮氏によると、この頸部の強い屈曲の段階(柴田第3段階)で胎土が土師質や瓦質へと変化する、調整の様相とともに注目される(柴田亮2024)。伊予でも中世前期で須恵質焼成がみられるが、当期では胎土の多くで砂粒や一部では雲母などが想定される含有物を一定量含む変化を捉えることができる。

一世紀近い搬入の空白期間を経て、15世紀後半頃より再び当地で確認できるようになるが、中世前期にみられた口頸部が「く」字状に屈曲する形態とは異なり、口唇部は端部に丸みを持ち頸部が浅くくびれ上方へ伸びるタイプとなる。調整も変化し、頸部外面を中心に両面ともにハケ目が顕著となる。また、頸部下方に段を持つものが多い傾向がある。提示資料は今治地域の経田遺跡なども使用しているが、松山平野の湯築城跡が主体である。

また、16世紀を中心として口頸部には多様性が認められ、資料上の制約もあるが今回は仮に4つに分類した。

a類：くびれの弱い頸部で、屈曲部分にはナデによって真上に立ち上がるような面を一旦形成した後、外反気味に上方へ伸び、口縁部内面にナデによる面を持つ。15世紀末頃にはみられ16世紀まで続く。16世紀中頃以降で屈曲度合いが若干強まる傾向がみられる。16世紀中頃には口縁部内側が若干肥厚する。

b類：頸部の屈曲が弱く、上方へ開くもの。15世紀末頃から16世紀に続く可能性がある。なお、16世紀中頃以降の18は別系譜の可能性もあり、b-2類とした。b-2類は頸部の屈曲が顕著となるとともに口縁部が肥厚する。

c類：頸部下方に明確な段を持ち、頸部で弱く屈曲しつつ上方へ開く。今回は16世紀前半～中頃で一括資料が捉えられた。16世紀中頃では前半に比べ頸部が短くなると考えられる。

d類：肩が張らず、頸部が弱く屈曲後、口縁部は他に比して真上方向にのびる。今回は16世紀中頃の17のみを提示したが、少なくとも後半へ続くと想定される。

4 甕の分布状況 (図1)

伊予全体としては、東伊予(以下、東予と表記)東部の新居浜平野から南伊予(以下、南予と表記)の宇和島地域および鬼北盆地まで分布する。前者では、新居浜地域を境に東側では現在のところ確認できない。川之江地域の上分西遺跡をみると、煮炊具とともに貯蔵具で隣接する讃岐地域の十瓶山窯製品が搬入されており、その動きが亀山焼の流通に影響した可能性も想定される*2。後者については、限定的な調査の中で大洲元城跡・地蔵ヶ岳城跡*3と板島城跡の山城や中世寺院である等妙寺旧境内で点的な事例があり、管見の限りでは南限である。佐田岬を介する豊後水道ルートで甕がもたらされたと考えられ、南予における瀬戸内を経由した流通の一端がうかがえる

好例である。

島嶼部について、図1では甕の時期が限定できる遺跡数が多くはないが、当該地域における遺跡の盛長からは(柴田圭2005)、後期となる事例が多いと考える。また、島嶼部の中世遺跡における出土比率は高く、芸予諸島において伊予側のうち調査例がある全ての主要な島で甕が確認されている。生産地の備中地域に比較的近く、瀬戸内流通を利用して搬入されたことがわかる。

時期別にみていくと、13世紀後半頃には搬入当初から今治平野および周辺部で面的な広がりをみせる。また、蒼社川や頓田川の河川周辺地域に多くみられる。同様に松山平野および周辺部にも分布し、両地域ともに比較的有力な遺跡が中心である。13世紀末～14世紀前半にかけては、引き続き今治地域では平野および周辺部に分布している。東予東部では新居浜地域で出土しはじめ、島嶼部も芸予諸島の能島城跡や忽那諸島の宮浦遺跡で出土しており、分布範囲が広がる。松山平野でも周辺部(北条平野)を含めて引き続き面的に分布し、一般集落まで消費が広がる。14世紀中頃になると減少傾向となり、細片資料が主体であるため時期決定に限界もあるが、判明する例は今治平野や松山平野でみられる。甕は点的な分布であり、沿岸部に近い地域で比較的多いと推定される。

15世紀後半では、搬入の再開が推測されるが数が少ない。現状では今治と松山の両平野で事例が少数ある。15世紀末頃には搬入量が増加し、16世紀前半にかけて再び一定量が搬入される。今治地域では平野や周辺部に分布し、なかでも沿岸周辺部・蒼社川左岸域・頓田川左岸域でまとまる傾向がある。周桑平野でも例がみられる。新居浜平野のほか、島嶼部の芸予諸島や忽那諸島で確認される。松山平野でも出土遺跡数が増加し、なかでも道後地域に一定量の分布がみられ、湯築城(同後期段階に相当)および城下の形成(柴田圭2014)と関連している。周辺部の久米地域で時期が判明する事例がみられる。

16世紀中頃以降では、今治地域で平野および周辺部でみられるが、分布は沿岸周辺部が中心となる。東予東部では新居浜平野で継続して出土するほか、西条地域でも例がある。島嶼部では芸予諸島で当該期の事例が増加傾向をみせる。松山平野では分布が継続し、道後周辺では増加傾向が続く。南予でも、当期には少なくとも大洲地域まで甕が搬入されている。

5 消費地遺跡における使用状況

甕について、内容物などが分かる出土事例は二次使用の場合も含め埋納容器(経塚・埋納銭)や甕棺の特殊例を除いて無い。軟質焼成が主体で表面の摩耗例が多いことも影響している。水などの液体もしくは軽量・軟質な固形物ならば使用に支障がないと推定されるが、硬質な備前焼甕とは貯蔵物(もしくは用途)が異なっていた可能性もある。あわせて使用期間の差も想定され、それらは当然価格にも反映されていたはずであるが、両者の価格差が判明する資料は管見に触れない。

他産地製品の甕との共伴資料は少なく、経田遺跡(ASK1 SD8)の例では備前焼甕と競合もしくは併用が想定されるが、両者は時期差をもつ可能性もある。

調理具の鉢との関係性については、後述のように同じ亀山焼系瓦質鉢と同一遺構での共伴例は

ほとんど確認できない。前期では東播系須恵器、後期を中心に備前焼との併用が想定でき、鉢は当時の主力商品を主として使用したと考えられる。使用方法や耐久性(首藤2025b)のほか価格差により消費者側が選択したものと考えられ、甕と鉢は同一生産地の可否に関わりなく消費者によって入手されている。

6 甕以外の器種についての予稿

生産遺跡や周辺地域でみられる器種は、中世前期では甕・播鉢・鍋・瓦を中心に、後期には甕・播鉢・鍋・釜などがある(伊藤ほか2006・岡田博1988)。

伊予出土の鉢については、島嶼部のほか四国島内でも分布するが量が少ないことから、年代が推定できる資料の蓄積が課題である(首藤2025b)。現状では松山平野(湯築城跡)～周桑平野で報告例があり、必ずしも沿岸部周辺には限定できず、また比較的有力な遺跡を中心にみられる。このように数が限られ、周辺で甕が出土することから搬入時の携行品と考えられる。中世前期には確認できず、後期の口縁部が肥厚する段階(広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編1996・鈴木2010)で島嶼部を中心に確認される。年代については、現段階では15世紀～16世紀に収まると想定される。

鍋は、時間的制約もあるが管見の限りでは今治平野周辺のほか湯築城跡を中心に分布し、多くが甕の出土遺跡周辺で見られることから両者がセットで搬入された可能性もある。出土時期は、中野良一氏が示すように16世紀前半～中頃が主体とみられる(中野2007)。

7 まとめ

以上のように、亀山焼や亀山焼系瓦質土器は13世紀後半～16世紀に搬入され、伊予の大部分にあたる新居浜地域～宇和島地域周辺に分布している。前期には今治平野や松山平野およびその周辺部で面的に分布し、新居浜平野のほか島嶼部の芸予諸島と忽那諸島でもみられる。14世紀中頃以降では減少傾向となり、14世紀後半～15世紀前半には今回搬入が確認できない。後期には搬入が再開され、16世紀には再び今治平野や松山平野およびその周辺部で面的にみられる。東予では新居浜平野や西条地域、周桑平野にも分布が広がる。島嶼部でも芸予諸島や忽那諸島に分布し、特に前者では増加傾向となる。

このうち今治平野周辺では、沿岸部のほか河川周辺に多く分布しており、蒼社川や頓田川を介した河川交通により搬入される。松山平野でも内陸部へ分布し、重信川の旧流路や石手川、砥部川周辺など河川流域周辺の事例が多いことから、これらの水運を中心に搬入されたのち陸路で甕が各消費地へ運ばれたと考えられる。

前述の柴田亮氏による甕の変化の時期について(柴田亮2024)、伊予では土器の胎土や焼成の変化が搬入の空白時期に先行している。あくまで一消費地からの限定された視点ではあるが、口頸部が「く」字状に開く連続した変化の中で胎土の変化とともに瓦質焼成の比率が高くなる。

また中世後期になると、口頸部が前期の形態と異なり、16世紀を中心に多様性が認められる。今回は時期の判明する一部の例を4種に分類したが、言及できなかった形態も存在している。こ

のような口縁部の多様化は、一般的に考えると生産地の複数化や、系譜が異なる複数の工人集団による生産などの可能性が想定できるが、先述のように生産地の調査例が無いため、実態は不明である。

遺跡内での出土数は限られるが(柴田圭2011)、中世遺跡の多くで甕が見つまっている。同時期に搬入される国産の甕が東播系須恵器から備前焼へと変化するなかで、14世紀後半～15世紀前半の搬入減少期を経たのちにも製品が受け入れられることから、亀山焼について一定量の需要が伊予で継続したと捉えられる。

また、伊予への搬入の空白期は、生産地周辺へ亀山焼の分布が縮小する瀬戸内地域の様相と一致している(荻野1993)。当地だけではなく比較的広範囲で甕の様相が連動していることから、生産地側もしくはその周辺地域における何らかの事情により生産・流通活動が停滞した可能性が高いと考えられる。

伊予における集成では、生産器種のなかで甕が圧倒的に主力として使用されていた。ほかに少量の鉢や今治地域および島嶼部が中心となる鍋などが搬入されており、今回ある程度の傾向を追えたものの、その他の器種については言及できなかった。今後の課題としたい。

謝辞

小稿をなすにあたりましては、石岡ひとみ氏、岡崎壮一氏、小野隼弥氏、亀井英希氏、柴田圭子氏、ソーシャル・リサーチ研究会の方々、竹政俊一氏、今治市教育委員会、愛媛県教育委員会、松山市埋蔵文化財センターの諸氏・諸機関には遺物見学の便宜を図っていただくとともに、多くのご教示をいただきましたことを記して御礼申し上げます。

註

- 1 県内における一括資料自体が少ないことも影響すると考えられ(池澤2004・柴田2005b)、事例の増加により今後当該例が認定できる可能性もあるが、亀山焼の限定的な出土傾向は変わらないと考える。なお、草戸千軒町遺跡でもⅡ期後半～Ⅲ期の様相について不明瞭である(篠原1987)。
- 2 ただし、十瓶山窯産甕の搬入量は限定的であり、時期的にも流入が継続した状況はみられず、その後に当地で使用された貯蔵具の様相は不明瞭である。
- 3 岡崎壮一氏(大洲市教育委員会)よりご教示いただいた。

参考文献

- 池澤俊幸 2004「四国における古代後期から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究』XVIII,日本中世土器研究会,pp.93-110
- 伊藤 晃 1987「第11章第2節3亀山焼の変遷」『岡山県の考古学』吉川弘文館,pp.567-573
- 伊藤 晃・乗岡 実・石井 啓・重根弘和・上西高登 2006「中世陶器の物流—備前焼を中心に—」『日本考古学協会2004年度広島大会研究発表会資料集』pp.151-172
- 岩崎仁志 2017「防長型播鉢の成立と展開—防長型瓦質土器の再検討(1)—」『山口考古』第37号,山口考古学会,pp.29-46

愛媛県歴史文化博物館 2026『伊予の経塚名品展』

岡田 博 1988「第6章総括」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査3』建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会,pp.229-240

岡田敏彦 2006「愛媛県内経塚覚書1」『紀要愛媛』第6号,pp.29-42

岡山県里庄町教育委員会 2014『里見山中遺跡』

荻野繁春 1992「中世西日本における国産貯蔵容器の地域的様相」『福井工業高等専門学校研究紀要人文・社会科学』第26号,福井工業高等専門学校,pp.29-103

荻野繁春 1993「西日本における国産貯蔵容器の分布」『福井県考古学会会誌』第11号,福井県考古学会,pp.45-94

佐藤竜馬 1998「十瓶山窯と亀山窯」『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』Ⅵ,香川県埋蔵文化財調査センター,pp.81-111

柴田圭子 1998「第2節遺物」『湯築城跡第1分冊』愛媛県埋蔵文化財調査センター,pp.293-333

柴田圭子 1999「第12章伊予の出土銭」『中村岡の久保出土銭』新居浜市教育委員会,pp.151-167

柴田圭子 2004「中部瀬戸内の流通と交通」『中世西日本の流通と交通』高志書院,pp.97-130

柴田圭子 2005a「芸予諸島における中世遺跡の動向」『考古論集川岡哲志先生退官記念論文集』pp.659-672

柴田圭子 2005b「四国における土器・陶磁器の編年」『全国シンポジウム中世窯業の諸相資料集』全国シンポジウム中世窯業の諸相実行委員会,pp.353-376

柴田圭子 2011「瀬戸内海島嶼部の様相」『考古学と室町・戦国期の流通』高志書院,pp.187-206

柴田圭子 2014「守護所としての湯築城と周辺景観」『守護所シンポジウム2@清洲 新・清洲会議』pp.291-300

柴田英樹 1996「第6節まとめ」『宮地遺跡・大木遺跡・大木古墳群・粧田山城跡・大村遺跡ほか』岡山県教育委員会,pp.230-235

柴田 亮 2024「亀山焼と勝間田焼の基礎的研究」『中近世土器の基礎研究』31,日本中世土器研究会,pp.27-42

篠原芳秀 1987「草戸千軒町遺跡出土の亀山焼甕」『中近世土器の基礎研究』Ⅲ,日本中世土器研究会,pp.93-96

鈴木康之 2010「草戸千軒町遺跡の播鉢さまざま」『備前歴史フォーラム資料集“摺る”～播鉢からみえる中世の社会』備前市歴史民俗資料館紀要12,pp.23-37

首藤久士 2025a「瀬戸内地域における瓦質土器の生産と流通」『中世の瀬戸内2生産・流通・港津』高志書院 2,pp.281-307

首藤久士 2025b「中世伊予における壺・甕・播鉢1」『ソーシャル・リサーチ』第50号,ソーシャル・リサーチ研究会,pp.39-54

中野良一 2007「中世伊予国の煮炊具について」『紀要愛媛』第7号,pp.49-60

西川 宏 1965「亀山焼の再評価」『考古学研究』第11巻第3号,pp.34-37

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1996『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書』Ⅴ,広島県教育委員会

野口光比古 1982「愛媛県伊豫神社経塚」『古代研究』24,pp.19-37

吉岡康暢 2003「中世陶器工人の存在形態」『中世諸職』シンポジウム「中世諸職」実行委員会,pp.11-49

使用報告書

朝倉中力遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター1987『朝倉高大寺遺跡・朝倉中力遺跡・朝倉下岡遺跡』

甘崎城跡：愛媛県教育委員会編2002『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書―埋蔵文化財編一』

石寺遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター1983『瀬戸内海大橋関連遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅳ(大島・宮窪町)』

板島城跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2011『板島城跡』

北井門遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2010『北井門遺跡』

伊予国府確認調査：愛媛県教育委員会1982『伊予国府跡確認調査概報(Ⅱ)』

馬越遺跡：今治市教育委員会2001『馬越遺跡発掘調査報告書』

馬越和多地遺跡：今治市教育委員会1998『馬越和多地遺跡・矢田西之窪遺跡Ⅱ』・愛媛県埋蔵文化財調査センター2006『馬越和多地遺跡2次』

梅ヶ鼻遺跡：愛媛県教育委員会編2002『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書―埋蔵文化財編一』

永地遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2003『永地遺跡』

枝松遺跡：松山市教育委員会ほか2008『枝松遺跡7～10次』

大洲元城跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2002『中城跡・底なし田Ⅱ遺跡・元城跡』

叶浦(B)遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター1980『大三島・伯方島本四連絡道路(一般国道317号)埋蔵文化財報告書(Ⅱ)』

上郷遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2009『上郷遺跡』

上吾川市ノ坪遺跡：伊予市教育委員会1991『上吾川・森埋蔵文化財調査報告書』

上徳居屋敷遺跡：今治市教育委員会2019『南日吉高堤遺跡・上徳居屋敷遺跡』

願蓮寺泉遺跡：愛媛県丹原町教育委員会2002『願蓮寺泉遺跡』

願蓮寺元泉遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2005『願蓮寺泉遺跡2次・願蓮寺元泉遺跡・願蓮寺建ヶ内遺跡』

来住町遺跡：松山市教育委員会ほか2001『松山市埋蔵文化財調査年報』13

北井門遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2010『北井門遺跡』

北久米町屋敷：松山市教育委員会ほか2000『来住・久米地区の遺跡Ⅲ』

北斎院地内遺跡：松山市教育委員会ほか2001『斎院の遺跡Ⅱ』

経田遺跡：愛媛県埋蔵文化財センター2014『経田遺跡』

久米高畑遺跡：松山市教育委員会ほか2012『久米高畑遺跡38・39・43・46次』

来島城跡：今治市教育委員会2004『市内遺跡試掘確認調査報告書』ⅩⅧ・愛媛県教育委員会編2002『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書―埋蔵文化財編一』

ケリア遺跡：伊予市教育委員会1989『下三谷西原・ケリア遺跡』

小泉アツコ遺跡：今治市教育委員会2005『神宮御池遺跡・小泉アツコ遺跡第3次調査』

国道遺跡：愛媛県教育委員会編2002『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書―埋蔵文化財編一』

小坂遺跡：松山市教育委員会ほか2011『東本遺跡9次・10次・小坂遺跡1次～6次・中村松田遺跡5次・6次』

古照遺跡：松山市教育委員会ほか1993『古照遺跡6次』

古谷横枕遺跡：愛媛県埋蔵文化財センター2020『古谷尾ノ端遺跡・古谷仙田岡遺跡・古谷横枕遺跡・古谷立丁遺跡・古谷高木遺跡・古谷坪ノ内遺跡・古谷シヨクガ谷遺跡』

郷桜井八反地遺跡：今治市教育委員会1994『郷桜井八反地遺跡』

五楽遺跡：松山市教育委員会ほか2012『五楽遺跡2次』

久枝遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2005『久枝遺跡・久枝Ⅱ遺跡・本郷Ⅰ遺跡』

桜井浜ノ上遺跡：今治市教育委員会2000『桜井浜ノ上遺跡』

三角遺跡：愛媛県砥部町教育委員会1990『埋蔵文化財調査報告書三角遺跡Ⅲ・水満田遺跡Ⅴ』

さんの遺跡：愛媛県宮窪町教育委員会2001『さんの遺跡』

正法寺遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター1993『旭方Ⅰ遺跡・旭方Ⅰ号箱式石棺・柳内遺跡・宮ノ谷遺跡・大川遺跡・正法寺遺跡』

新池遺跡：東予市教育委員会1999『新池遺跡・小池遺跡』

地藏原遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター1994『四国縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅴ—西条市編一』

実報寺高志田遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2005『長網Ⅰ遺跡・長網Ⅱ遺跡・実報寺高志田遺跡』

筋違L遺跡：松山市教育委員会ほか2001『福音寺地区の遺跡Ⅲ筋違L・N遺跡』

千足遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2006『千足遺跡』

杣田池田遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2009『杣田池田遺跡2次・3次』

太山寺経田遺跡：松山市教育委員会ほか1999『太山寺経田遺跡』

高橋湯ノ窪遺跡：今治市教育委員会1999『高橋湯ノ窪遺跡Ⅱ』

武志城跡：愛媛県教育委員会編2002『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書—埋蔵文化財編一』

樽味遺跡：愛媛大学埋蔵文化財調査室1989『鷹子・樽味遺跡の調査』・愛媛大学埋蔵文化財調査室1993『樽味遺跡Ⅱ』・愛媛大学埋蔵文化財調査室2003『樽味遺跡Ⅳ』・愛媛大学埋蔵文化財調査室2013『樽味遺跡Ⅴ』

樽味四反地遺跡：松山市教育委員会ほか2011『樽味四反地遺跡19次・20次』

樽味高木遺跡：松山市教育委員会ほか2009『樽味高木遺跡12次・13次』

大相院遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2004『善応寺畔地遺跡・大相院遺跡・別府遺跡』

大日裏Ⅴ遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター1994『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘報告書Ⅶ—小松町編Ⅱ—』

旦遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2000『旦遺跡・宮之前遺跡・長沢石打遺跡・長沢1号墳・長沢6号墳・二の谷2号墳・鉢又古墳群・郷桜井西塚古墳』

旦之上遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2005『福成寺遺跡・旦之上遺跡』

長網Ⅱ遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2005『長網Ⅰ遺跡・長網Ⅱ遺跡・実報寺高志田遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター

九十九島城跡：愛媛県教育委員会編2002『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書—埋蔵文化財編一』

辻町遺跡：愛媛県埋蔵文化財センター2026『辻町遺跡4次』

鶴来が元遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター1994『四国縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅵ—小松町編Ⅰ—』

等妙寺旧境内：愛媛県鬼北町教育委員会2022『史跡等妙寺旧境内』

土居の内遺跡：愛媛県教育委員会編2002『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書—埋蔵文化財編一』

道後今市遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター1994『道後今市遺跡X』・松山市教育委員会ほか1994『道後城北』

遺跡群Ⅱ】

道後鷺谷遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2004『道後鷺谷遺跡2次』

道後町遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2005『道後町遺跡Ⅱ』・愛媛県埋蔵文化財調査センター2009『道後町遺跡3次』

道後湯月町遺跡：松山市教育委員会ほか2008『道後湯月町遺跡・道後湯之町遺跡』

道後湯之町遺跡：松山市教育委員会ほか2008『道後湯月町遺跡・道後湯之町遺跡』

能島城跡：今治市教育委員会2007～2020『史跡能島城跡』

登畑遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター1998『登畑遺跡』

登畑寺井遺跡：今治市教育委員会1998『登畑寺井遺跡』

乃万の裏遺跡：松山市教育委員会ほか1999『乃万の裏遺跡2次』

拝志古窯跡群：愛媛県重信町教育委員会1998『拝志古窯跡群西地区』

八町遺跡・八町一号遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター1989『一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』・今治市教育委員会1998『八町1号遺跡—第3次調査—』

東垣生八反地遺跡：松山市教育委員会ほか2020『東垣生八反地遺跡5次』・松山市教育委員会ほか2022『東垣生八反地遺跡6次』

火内遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター1998『火内遺跡・臥間遺跡』

姫原遺跡：松山市教育委員会ほか1998『和気・堀江の遺跡Ⅱ』

平井遺跡：松山市教育委員会ほか2010『平井遺跡3～9次』

平田七反地遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2000『道ヶ谷古墳・池の奥遺跡・平田七反地遺跡』

船ヶ谷遺跡：松山市教育委員会ほか1999『船ヶ谷遺跡3次』

文京遺跡：愛媛大学埋蔵文化財調査室2004『文京遺跡Ⅲ』

別名成ルノ谷遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター1993『別名端谷Ⅰ遺跡・別名端谷Ⅱ遺跡・別名成ルノ谷遺跡・別名寺谷Ⅰ遺跡・別名寺谷Ⅱ遺跡』

別名端谷Ⅰ遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター1993『別名端谷Ⅰ遺跡・別名端谷Ⅱ遺跡・別名成ルノ谷遺跡・別名寺谷Ⅰ遺跡・別名寺谷Ⅱ遺跡』

別名寺谷遺跡：今治市教育委員会2015『別名寺谷遺跡』

別名寺谷Ⅰ遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター1993『別名端谷Ⅰ遺跡・別名端谷Ⅱ遺跡・別名成ルノ谷遺跡・別名寺谷Ⅰ遺跡・別名寺谷Ⅱ遺跡』

別府遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2004『善応寺畔地遺跡・大相院遺跡・別府遺跡』

宝泉遺跡：愛媛県川内町教育委員会1990『宝泉遺跡Ⅱ』

星野遺跡：愛媛県丹原町教育委員会2003『星野遺跡Ⅱ～Ⅴ区埋蔵文化財発掘調査報告書』

星原市東遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2004『星原市東遺跡・星原市遺跡』

政枝遺跡：新居浜市教育委員会2006『政枝遺跡』

松ヶ鼻遺跡：愛媛県教育委員会編2002『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書—埋蔵文化財編一』

松山城跡(県民館跡地)：愛媛県埋蔵文化財調査センター1999『史跡「松山城跡」内県民館跡地』

御館山遺跡：愛媛県教育委員会編2002『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書—埋蔵文化財編一』

見近島城跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター1989『瀬戸内海大橋関連遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅲ(見近島城跡)』

水満田遺跡：愛媛県砥部町教育委員会1991『水満田遺跡調査報告書』

南梅本上方遺跡：松山市教育委員会ほか2007『南梅本上方遺跡1次・2次・南梅本長広遺跡1次・2次』

南江戸上沖遺跡：松山市教育委員会ほか2021『南江戸上沖遺跡1次・2次』

南江戸鬮目遺跡2次：愛媛県埋蔵文化財調査センター2004『南斎院土居北遺跡・南江戸鬮目遺跡2次』

南江戸桑田遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター1994『一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』

南久米町遺跡：松山市教育委員会ほか2000『来住・久米地区の遺跡Ⅲ』

南斎院土居北遺跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター2004『南斎院土居北遺跡・南江戸鬮目遺跡2次』

宮浦遺跡：愛媛県中島町教育委員会2002『愛媛県中島町宮浦遺跡発掘調査報告書』

御幸遺跡：松山市教育委員会ほか1998『松山大学構内遺跡Ⅲ』

湯築城跡：愛媛県埋蔵文化財調査センター1998『湯築城跡第1分冊』・愛媛県埋蔵文化財調査センター2000『湯築城跡第2・3・4分冊』・愛媛県埋蔵文化財調査センター2002『湯築城跡第5分冊』

余戸中ノ孝遺跡：愛媛県埋蔵文化財センター2018『余戸中の孝遺跡3・6次』・松山市教育委員会ほか2019『余戸中ノ孝遺跡1・2・4・5次・余戸柳井田遺跡1・2・3・6次・東垣生八反地遺跡1・3・4次・南吉田南代遺跡1次』

余戸弘川遺跡：愛媛県埋蔵文化財センター2022『余戸弘川遺跡1・2次・余戸中の孝遺跡7次・余戸柳井田遺跡4・5・7次・東垣生八反地遺跡2次・南吉田南代遺跡2次』

挿図出典

図1：筆者作成。図2：各報告書を一部改変して筆者作成。

(2026年3月19日)

愛媛県西条市富岡遺跡出土の青銅製花瓶をめぐって

松葉竜司[†]

1 はじめに

国営ほ場整備事業(道前平野農地整備事業)に伴い発掘調査が実施された西条市・富岡遺跡では、令和6年(2024)8月に県内で類を見ない青銅製の花瓶が出土した(松葉2025)。その後、類例を探索したところ、国内でも出土事例が決して多くない資料であることが判明した。

富岡遺跡の発掘調査報告書の刊行時期は当分先であるため、本稿では出土青銅製花瓶を資料紹介し、その類例を概観した上で花瓶が出土した背景、遺跡の性格について概述する。加えて、出土花瓶に対しても一定の評価をおこなう。

2 富岡遺跡と青銅製花瓶の概要

(1)遺跡と出土遺構の概要

富岡遺跡は西条市周布に所在する。石鎚山系の青滝山北方を源流として道前平野中央部を貫流する中山川は広く沖積平野を形成するが、中山川の中流域には氾濫原性の扇状地が展開する。その中でも左岸の自然堤防上の微高地に富岡遺跡、幸の木遺跡、久枝遺跡などが立地するが、小河川の本郷川と崩口川の合流地点に位置するのが富岡遺跡である。

富岡遺跡では、西条市教育委員会の試掘調査において古代から中世にかけての遺構、遺物が確認されている(西条市教育委員会2020)。令和6・7年(2024・2025)度の2か年において、ほ場整備に

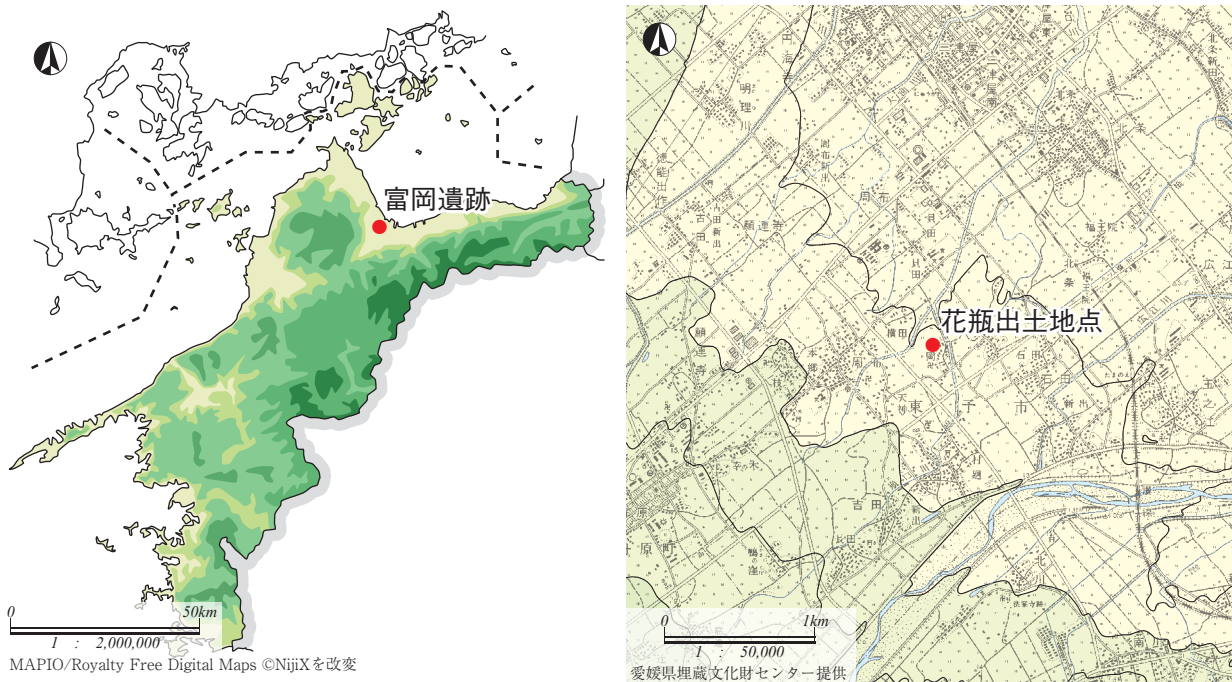


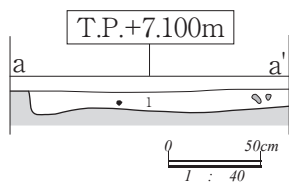
図1 富岡遺跡位置図

[†]愛知県埋蔵文化財調査センター

伴う記録保存の発掘調査が実施されており、土坑35基、自然流路8条、溝21条、小穴163穴などが検出された。事業の性質上、調査区はトレンチ状に線形をなす箇所が多く、検出遺構の評価が難しい部分も大きい。小穴が直線に並ぶ箇所もあり、掘立柱建物ないしは柵列などの存在も想定される。出土遺物には、15～16世紀、中世後期を中心とした備前焼、土師質土器、瓦質土器などがあり¹⁾、土師質土器の皿や釜が多い傾向がある一方で、青磁、白磁などの貿易陶磁器類は極少であるなど、日常雑器が中心を占める(松葉2025、石貫2026)。

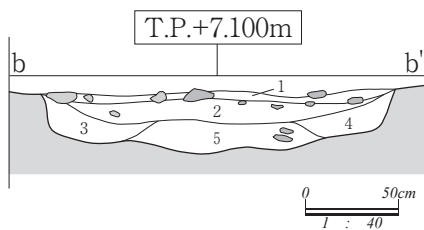
2区は遺跡の東縁、現在の崩口川の流路に接する地点に位置する。表土となる耕作土直下に灰黄褐色シルトが0.2～0.3mほど堆積し、さらに下位にオリーブ黒色細礫混じり粗砂や褐灰色中礫混じり粗砂が堆積するが、それぞれの層の上面が遺構面をなし、上層は16世紀、下層は15～16世紀に伴うものと考えられる。

上層で検出された溝3・8(SD3・8)は南北の延長10m以上、溝8で幅2mほどを測る。溝8が溝3を切るが、ほとんど時期差は認められない。最深で0.3mほどと浅いが、埋土に炭化物、酸化鉄、



[TMO2区 SD3]

層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	暗褐	10YR3/3	粗砂混じりシルト	弱	疎	酸化鉄・極細炭多く混じる



[TMO2区 SD8]

層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	褐灰	10YR3/3	シルト	中	密	径10cmまでの礫多く混じる
2	灰黄褐	10YR4/2	シルト	中	密	径10cmまでの礫多く混じる
3	黄灰	2.5Y4/1	シルト	弱	密	底面に脆い小鉄滓多く混じる
4	灰黄褐	10YR4/2	細砂	弱	密	底面に脆い小鉄滓多く混じる
5	褐灰	10YR4/1	細砂	弱	密	底面に脆い小鉄滓多く混じる

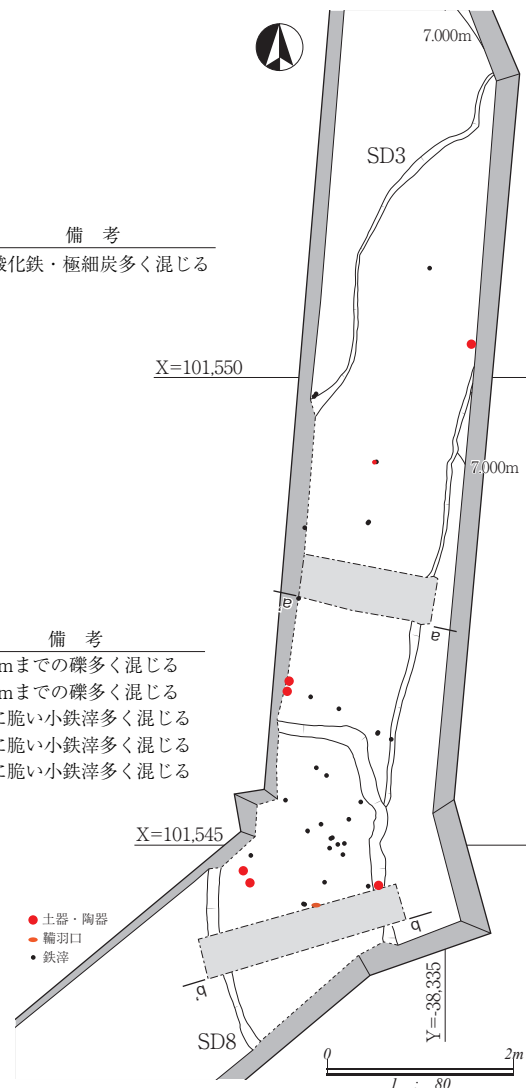


図2 富岡遺跡2区SD3・SD8 平面図・土層断面図

小鉄滓を多く含む。溝の上部から15～16世紀の土師質土器釜・茶釜、備前焼すり鉢、丸瓦などとともに、鉄釘などの鍛造遺物、鉄鍋などの鑄造遺物、鞆羽口5点やコンテナ1箱ほどの鉄滓などが出土した²。これらの遺物は南側からの流れ込みによるものと推察される。溝埋土の小鉄滓を回収するため、篩による土壌分別をおこなったところ、青銅製花瓶の口縁部1点が含まれるのを確認した。

(2)青銅製花瓶の概要

法量は、残存高4.5cm、口径2.3cm、口縁帯高0.24cm、頸部高3.6cm、頸部最小径1.1cm、頸部基部径2.2cm、器厚1.2mmを測る。

口縁帯・頸部の下に体部、高台部を伴い、全体の器形は徳利形をなすものと考えられるが、口縁帯から体部の肩付

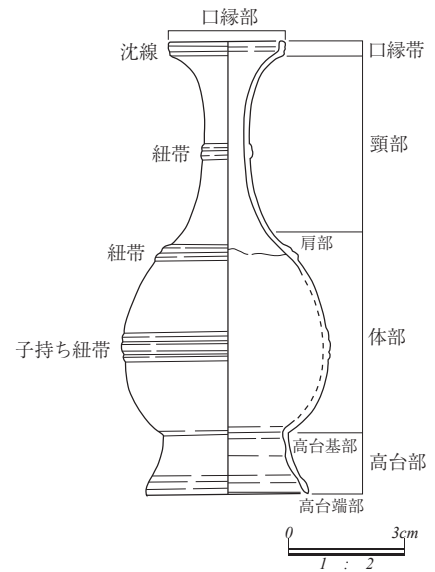


図3 徳利形花瓶模式図
(白山橋遺跡出土資料)

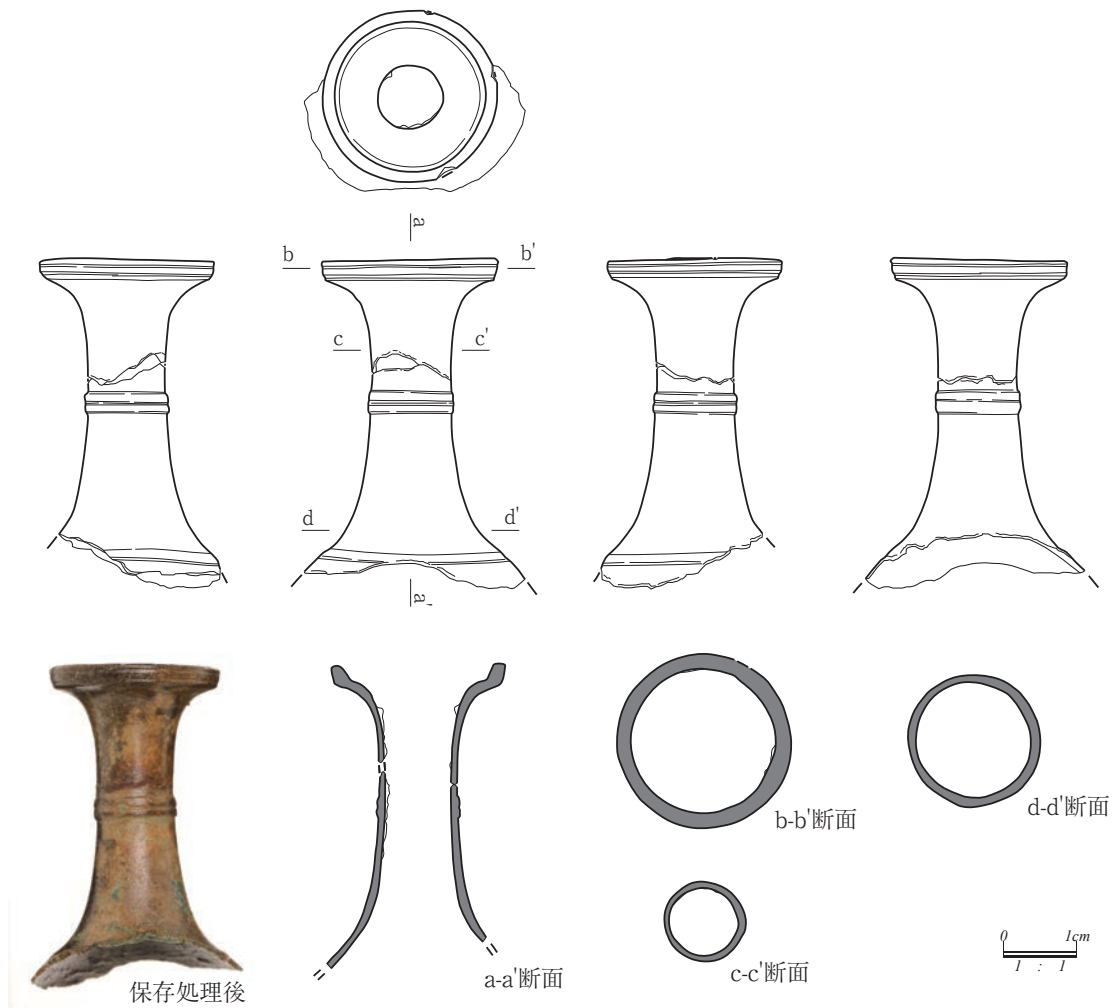


図4 富岡遺跡出土青銅製花瓶実測図・写真

近までが残存するにとどまる。口縁帯はやや外方に開き、その外面に2条の沈線をもつ。頸部基部と体部との間に屈曲をもち、頸部と体部の境をなす。頸部は直線的に立ち、外面の中ほどに2条の紐帯が見られるが、扁平である。体部外面の肩部付近に3条の子持ち紐帯をもつが、上下の沈線で紐帯が表現されており、紐帯自体かなり扁平となる。

花瓶の素材を確認するため、蛍光X線分析をおこなったところ、銅(Cu)、スズ(Sn)、鉛(Pb)の元素が検出され、青銅製であることが判明した*3。

3 銅製徳利形花瓶の諸例

(1)概要

遺跡からの出土例もさることながら、寺院での伝世例、大学・博物館等のコレクションを含めれば銅製花瓶の現存数は相当数に上るものと推察される。その種別は、中国製と考えられる管耳瓶などを除き、大きくは壺字形、徳利形、觚形に分類できる。

壺字形花瓶は「壺」という漢字を形態的な特徴として名称に付すように、胴部が最大径となる形態で、器高8～10cmほどのものが多く、中世以後はやや大型化の傾向がある。頸部と脚台部に2条の紐帯をもつ。9世紀前半には出現した可能性が推測されており(小池1997)、以後、古代末期にかけて密教法具の一つとして経塚や寺院、山岳遺跡などから出土する事例が多い。中世以後も継続して存在し、寺院などに多くの伝世例があるが、出土事例は北信越地域の周辺に偏る。

徳利形花瓶は細長い頸部、倒卵形・茄子形を呈する下膨れの体部、高台部からなる。法量は器高6～19cmほどと幅があるが、10cmほどのものが多く、頸部の中ほどに2条の紐帯が、体部外面のうち肩部付近と体部最大径付近に2条の紐帯ないしは3条の子持ち紐帯を伴うが、多くは子持ち紐帯である。13世紀には出現し、出土事例は北信越地方とその周辺に分布がやや偏るが、中世後期まで時期が降ると西日本にも分布が認められる。富岡遺跡出土花瓶も徳利形に該当する。

觚形花瓶は口縁部が大きく開く。胴部の上下に突線があり、その間に雷文をもつものもある。脚台基部にも1条ないしは2条の突線をもち、脚台部はハの字に開き、端部は下方に折れる。法量は器高15～20数cm、口径20cm前後のものが多く、香炉、燭台とともに三具足を構成する花瓶がこの觚形である。14世紀に出現した可能性があるが、15～16世紀を中心として北陸から関東にかけて出土事例がみられる。

博多遺跡群出土例(福岡市教育委員会2007)など、胴部と脚台部の径が大きくなり、ずんぐりと太い形態となる尊形花瓶も散見され、三具足を伴う事例もあるなど、觚形との共通性が強い。

(2)出土事例

銅製徳利形花瓶の出土、不時発見事例として管

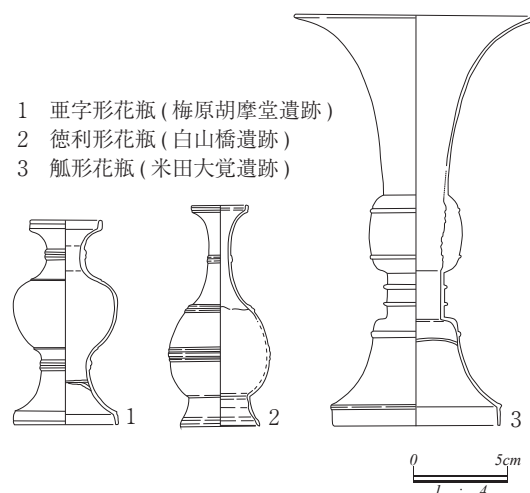


図5 銅製花瓶の諸例

見に触れるだけで13箇所、20例が知られる。

1.信夫山頂遺跡(福島県福島市)

信夫山主峰に所在する月山神社付近から仏像、鏡、馬具、武器、銭貨などが出土し、仏具として銅製の露盤1、水瓶1、錫杖1、鏡5、六器2、六器台4・蓋6・皿3、火舎1・火舎蓋1、香炉1、そして花瓶1(図6-1)が出土した(時枝・高橋2011、時枝・高橋2022)。

花瓶は銅製。器高10.3cm、口径2.3cm、器厚0.8～1.5mmほどを測る。体部上下に子持ち紐帯をもち、精緻な造りで、子持ち部分が扁平となる。頸部の2条の紐帯間が1mmほど空き、高台下部はくの字状に外方に屈曲する。時枝・高橋2022で14世紀の年代が想定されている。

2.丘中学校遺跡(長野県塩尻市)

平安時代の堅穴建物群などからなるが、花瓶1(図6-2)は遺構面から出土。発掘調査では中世瓦なども出土しており、寺院の存在が指摘されている(塩尻市教育委員会1983)。

花瓶は口縁部が欠損。青銅製。現存高10.0cm、器厚1mmほどを測る。頸部は強い括れをもち、体部の子持ち紐帯はやや扁平である。高台はあまり張らない。高台基部の内面に1条の沈線が巡り、内底を接着した痕跡が見られる。塩尻市教育委員会1983では、南北朝期に伴うものと想定されている。

3.島立南栗遺跡(長野県松本市)

古代から中世にかけての堅穴建物群などが確認されており、古代に伴うとされる第19号住居址

表1 出土銅製徳利形花瓶法量一覧表(数値の単位はセンチメートル、表中の番号は図6・7の資料番号と対応)

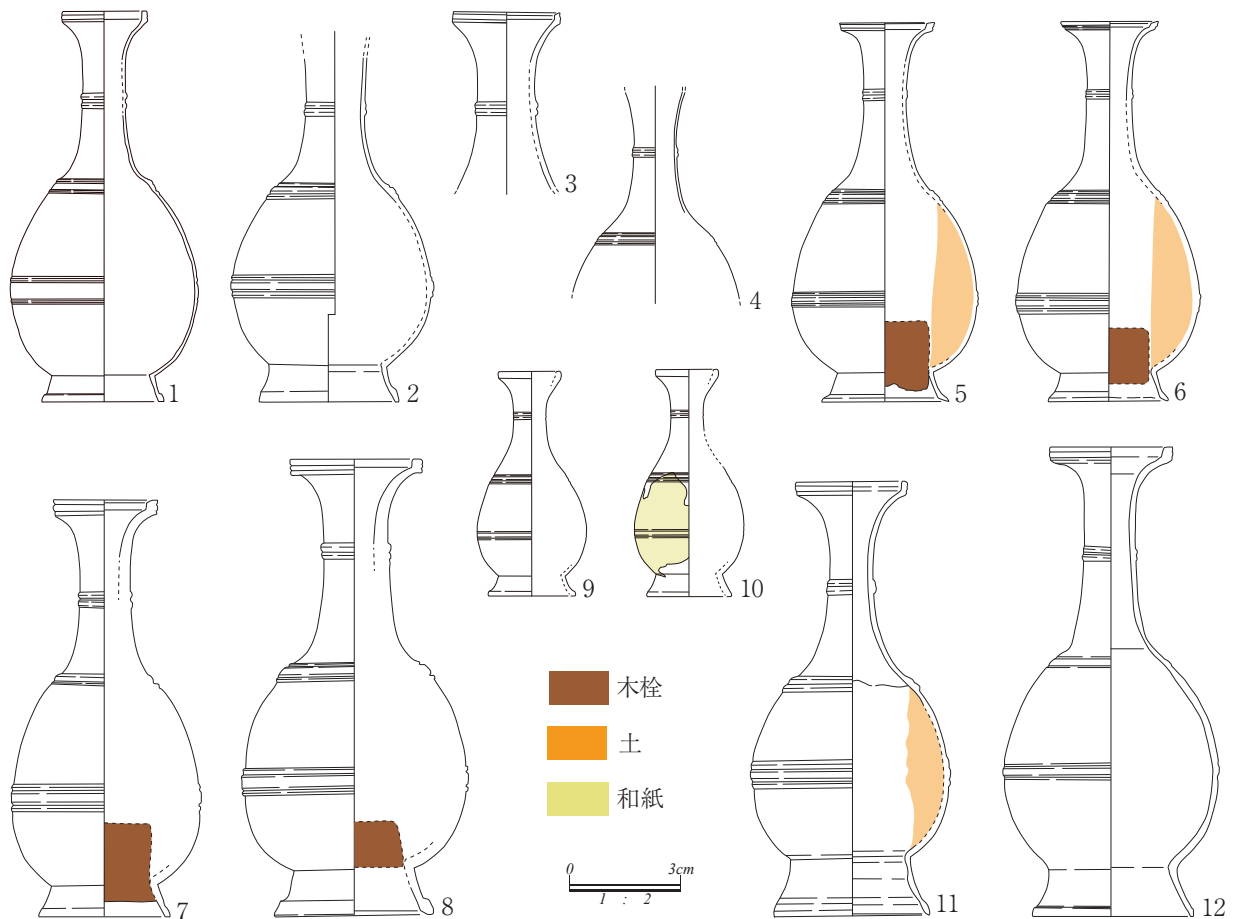
	遺跡名	口径	器高 (現存高)	口縁帯 高	頸部 高	頸部 最小径	頸部 基部径	体部 最大径	高台 径	高台 基部径	高台 高
1	信夫山頂遺跡	2.3	10.3	0.28	4.0	1.2	1.8	5.1	3.3	2.8	0.7
2	丘中学校遺跡	-	(10.0)	-	-	1.6	2.1	5.3	3.8	3.2	0.95
3	島立南栗遺跡	2.9	(4.8)	0.3	-	1.1	-	-	-	-	-
4	長水遺跡	-	(5.9)	-	-	1.1	2.0	-	-	-	-
5	大武遺跡	2.6	10.2	0.2	3.5	1.2	1.8	4.8	3.35	2.6	0.75
6	大武遺跡	2.6	10.2	0.2	3.6	1.15	1.8	4.7	3.35	2.6	0.75
7	木崎山遺跡54号土坑	2.8	11.2	0.4	3.9	1.4	1.8	5.0	3.5	2.8	0.8
8	木崎山遺跡68号土坑	3.5	12.3	0.4	4.8	1.7	2.7	5.9	4.2	3.2	1.2
9	くつがた遺跡	1.6	6.1	0.18	2.3	0.9	1.5	2.9	2.3	1.8	0.6
10	くつがた遺跡	1.6	6.0	0.14	2.3	0.9	1.7	3.0	2.3	1.8	0.6
11	白山橋遺跡	3.1	11.7	0.36	4.4	1.2	2.2	5.2	4.2	3.2	1.5
12	那谷寺滝ヶ原道	3.2	12.9	0.42	5.0	1.4	2.3	5.8	4.2	3.4	1.2
13	願成寺境内	2.95	12.5	0.37	4.8	1.2	2.1	5.5	4.1	3.3	0.78
14	願成寺境内	3.1	12.7	0.26	5.0	1.5	5.1	6.1	4.4	3.5	1.0
15	願成寺境内	3.4	13.0	0.43	4.8	1.5	4.8	6.0	4.8	3.7	1.2
16	願成寺境内	5.9	19.0	0.67	6.8	2.7	4.4	9.4	7.8	5.7	1.9
17	願成寺境内	6.0	19.1	0.62	6.8	2.7	4.3	9.4	7.8	5.75	1.8
18	東本願寺前古墓群	2.2	8.7	0.25	3.05	1.2	1.6	4.3	3.2	2.7	0.8
19	富田川河床遺跡	2.45	9.1	0.2	3.5	1.1	1.9	4.2	3.1	2.5	1.0
20	富岡遺跡	2.3	(4.5)	0.24	3.6	1.1	2.2	-	-	-	-

床面付近から土師器甕とともに徳利形と考えられる青銅製瓶類1(図6-3)が出土する。第7号住居址から14世紀の常滑焼壺とともに青銅製六器が、第8号住居址からは15世紀の古瀬戸灰釉平碗と青銅製高台付銅甕が出土するなど、花瓶を含め、これらの青銅製の仏具は中世の寺院あるいは墓地との関わりが推測されている(長野県中信土地改良事務所・松本市教育委員会1984)。

花瓶は肩部以下が欠損。青銅製。残存高4.8cm、口径2.9cmを測る。口縁帯に2条の沈線が巡るが、浅く、断面形状も不定形である。長野県中信土地改良事務所・松本市教育委員会1984では、中世に伴うものと想定されている。

4.長水遺跡(長野県上水内郡信濃町)

黒姫山麓から古瀬戸水注1、銅製の五鈷杵1、錫杖1、北宋銭(元豊通寶)4、銅製花瓶1(図6-4)などが不時発見される。水注に銭貨を納めたとされるが、これらの遺物は複数回の不時発見に伴うようで、花瓶を含めて厳密な共伴関係は判然としない。出土地付近に黒姫山別当雲龍寺の前身寺院が所在したことが想定されている(長野市立博物館1994、信濃町立野尻湖博物館1991)。花瓶



- 1 信夫山頂遺跡(福島県福島市) 2 丘中学校遺跡(長野県塩尻市) 3 島立南栗遺跡(長野県松本市)
 4 長水遺跡(長野県信濃町) 5・6 大武遺跡(新潟県長岡市) 7 木崎山遺跡54号土坑(新潟県上越市)
 8 木崎山遺跡68号土坑(新潟県上越市) 9・10 くつがた遺跡(新潟県妙高市) 11 白山橋遺跡(石川県穴水町)
 12 那谷寺滝ヶ原道(石川県小松市)

図6 銅製徳利形花瓶の諸例(1)

表2 銅製徳利形花瓶出土遺跡一覧表

	地域	遺跡名	点数	遺跡の性格					花瓶の年代			遺構相伴銅製仏器					遺跡出土銅製仏器										
				山岳信仰	寺院	集落・寺院	集落・祭祀	集落・廃棄	集落・墓地	城下町・寺院	13世紀後半	交14世紀	15・16世紀	提子	独鈷杵	五鈷杵	六器	飲食器	火舎	三具足	水瓶	露盤	錫杖	五鈷杵	鏡	六器	飲食器
1	陸奥	信夫山頂遺跡	1	○	△						○								○	○	○	○	○	○		○	○
2	中信	丘中学校遺跡	1			△					○																
3	中信	島立南栗遺跡	1			△			△			○											○	○			
4	北信	長水遺跡	1	○	○					○												○	○				
5・6	中越	大武遺跡	2			○					○																
7	上越	木崎山遺跡 54号土坑	1			○				○				○	○												
8	上越	木崎山遺跡 68号土坑	1			○					○										○						
9・10	上越	くつがた遺跡	2	○						○			○	○	○	○	○										
11	能登	白山橋遺跡	1					○			○						○										
12	加賀	那谷寺 滝ヶ原道	1	○							○														○		
13-17	美濃	願成寺境内	5	○						○	○	○															
18	山城	東本願寺前 古墓群	1				○	△				○															
19	出雲	富田川 河床遺跡	1						○			○															
20	伊予	富岡遺跡	1		○							○															

は口縁帯と体部下半以下が欠損。銅製。残存高5.9cmを測る。頸部の紐帯と体部の子持ち紐帯は厚い。頸部から体部にかけてなだらかな形態である。器厚は0.5mmとごく薄い。長野市立博物館1994などでは帰属年代が示されていないが、過去に不時発見されたという古瀬戸水注との相伴関係が仮に成立するのであれば、その帰属時期⁴から類推して埋納時期は交14世紀前後が想定される。

5.大武遺跡(新潟県長岡市)

中世の水田跡、溝、井戸、土坑、ピットなどが検出されている。建物跡は未確認であるが、中世陶磁器、砥石、銭貨、木器、漆器などが出土し、近傍に集落の存在が推定されている。SD9は幅2.2m、深さ0.7mほどを測る水田の用水路とされる溝で、珠洲焼片口鉢・甕・壺などとともに溝底面から花瓶2(図6-5・6)が並んで出土している。その出土状況から意図的に置かれ、儀礼的行為に使用されたものと推定されている(新潟県教育委員会2000)。

花瓶はともに銅製で完形。5・6の花瓶は器高10.2cm、口径2.6cmを測る。器壁が1mmほどと薄いこともあり、ともに軽量。頸部の紐帯、体部の子持ち紐帯ともに突線は低く、扁平である。口縁帯はやや外方に開くが、明瞭な沈線が巡る。高台部はハの字に開き、高台端部を外方に折り、張り出す。5の花瓶には径2.0cm、高さ1.9cm、6の花瓶には径2.0cm、高さ1.5cmの木栓を伴い、高台部の下方から嵌めて内底をなす。木栓下部の数ミリの範囲に漆状の黒色有機物が付着し、体部内面の器壁に細土を残していることから、体部内面の幅を狭めて下から木栓を装着したものと想定される。新潟県教育委員会2000では、13～14世紀の年代が想定されている。

6.木崎山遺跡(新潟県上越市)

奈良・平安時代の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、中世の道路状遺構、溝、掘立柱建物跡、井戸、土坑などが検出されている。13～15世紀を中心とした在地領主層の館跡として推定されている(新潟県教育委員会1992)。

54号土坑は短径0.96m、深さ0.63mを測り、底面南隅から花瓶1(図6-7)、飲食器3、六器鏡1・台皿5などの青銅製仏具を納めた13世紀の古瀬戸四耳壺が出土した。四耳壺付近から青銅製五銚鈴・舌が出土し、地鎮に伴い仏具を一括埋納した13世紀の遺構として報告されている。また、68号土坑からも銅製花瓶1(図6-8)が単独で出土する。

花瓶はともに銅製で完形。7の花瓶は器高11.2cm、口径2.8cm、8の花瓶は器高12.3cm、口径3.5cmを測る。頸部の紐帯、体部の子持ち紐帯ともに厚い。口縁帯は直立し、沈線は深い。器壁は2mm以上と厚い。高台部はハの字に開き、8の高台端部は厚く、段をなす。7の花瓶には径2.6cm、高さ2.2cmほどの、また8の花瓶には径2.6cm、高さ1.5cmの木栓を伴う。大武遺跡と同様な形態の内底となる。

7.くつがた遺跡(新潟県妙高市)

曲物の中から銅製の提子1、独銚杵1、五銚杵1、火舎1、六器鏡6・台皿6、小六器鏡5・台皿3、飲食器2、小飲食器3、花瓶2(図6-9・10)に加えて青磁皿3が不時発見されたとされる(金子・宮腰1977)。

花瓶は銅製。一部欠損、破損があるが、ほぼ完形。9の花瓶は器高6.1cm、口径1.6cm、10の花瓶は器高6.0cm、口径1.6cmを測る。頸部の紐帯、体部の子持ち紐帯ともに細く、鋭い。口縁帯は丸みを帯び、沈線は明瞭ではない。高台部はわずかに外反する。図示できなかったが、9の口縁帯内部に段をもつ。10の体部外面には和紙が付着する。金子・宮腰1977では共伴の青磁皿は南北朝期に伴うものと報告されているが、この碗は太宰府分類Ⅲ類に相当するものと考えられ⁵(太宰府市教育委員会2000・柴田2025)、埋納年代もおよそ13世紀後半頃と想定される。

8.白山橋遺跡(石川県鳳珠郡穴水町)

掘立柱建物跡、井戸、溝、土坑、墓と考えられる配石遺構群などが検出されており、遺跡の時期は12世紀末から16世紀前半までとされる。34号配石は配石遺構群北隅にあり、南北1.26m、東西1.15m、石囲いを伴う施設である。内部から銅製三具足(甗形花瓶、燭台、香炉)が倒置して、また銅製德利形花瓶(図6-11)が遺構隅外側に正位に埋め込まれた状態で出土した(穴水町教育委員会1987)。

三具足の花瓶・燭台・香炉と同様、11の花瓶も銅製であるが、色調や質感が異なり、その製作場所や来歴は異なる可能性が高い。完形で、器高11.7cm、口径3.1cmを測る。口縁帯に2条の沈線が、頸部と体部上位に2条の紐帯が、体部下位に3条の子持ち紐帯が巡る。高台部はやや外反し、高い。高台基部の内面付近に幅の広い凹みがあり、この箇所には漆と考えられる黒色有機物が付着する。円盤状の木製板材を内底として接着したものと考えられる。共伴の土師器皿の年代から15世紀後半ごろの年代が想定される⁶。

9.那谷寺滝ヶ原道(石川県小松市)

那谷寺境内の奥には金堂跡と伝承される平坦地や溜池があり、15世紀の土師器皿を多量に含む

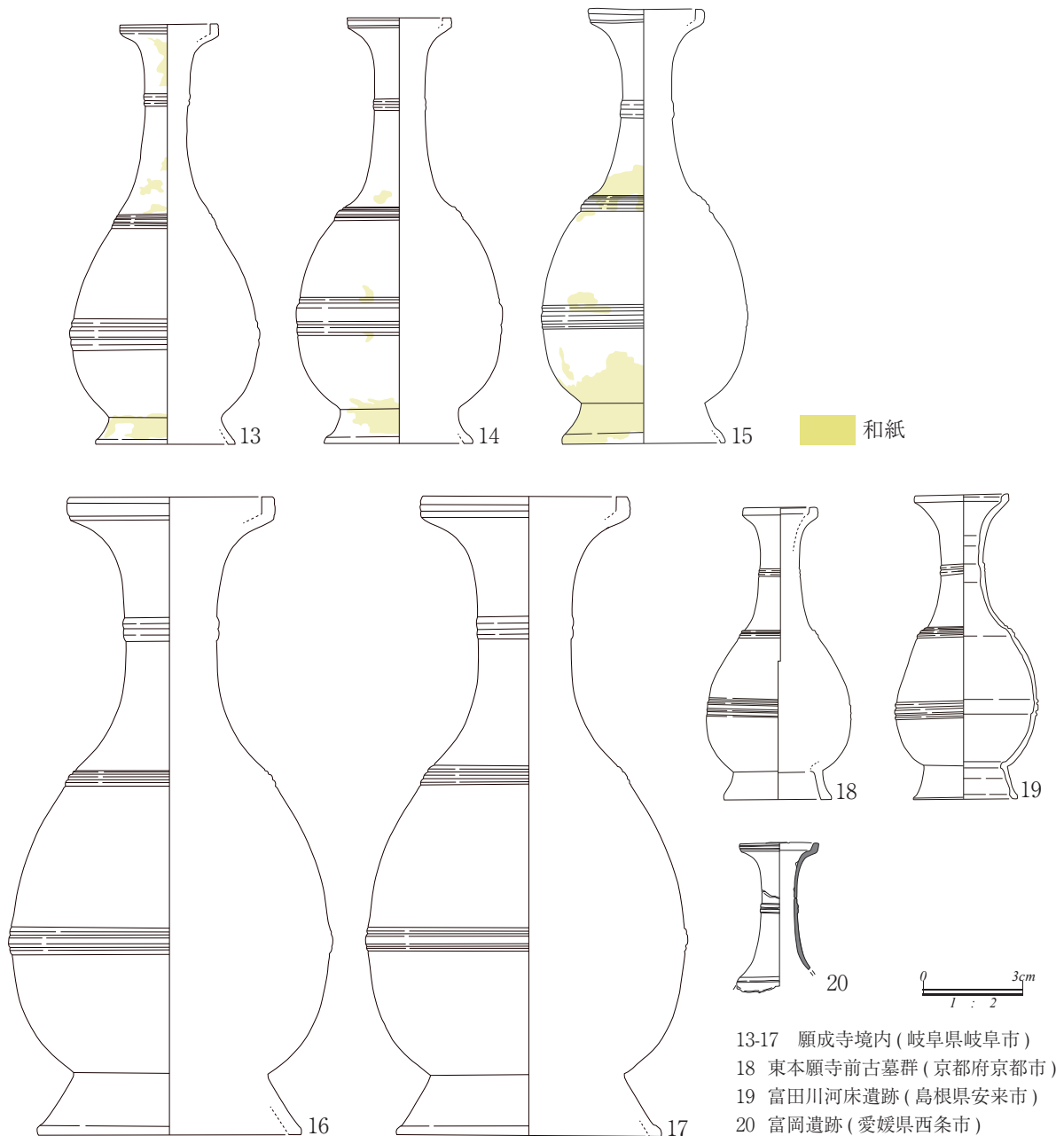


図7 銅製徳利形花瓶の諸例(2)

包含層、整地層、炭化物層に加えて小規模な石垣や水路などが確認されている。また、溜池の東辺を通過していたという滝ヶ原道からは銅製の花瓶1(図6-12)、飯食器1が出土し、一帯に中世寺院の存在が想定されている(垣内2010)。

花瓶は肩部で上下に破断するが、完形。銅製。器高12.9cm、口径3.2cmを測る。直立する口縁帯に2条の沈線が巡り、口縁帯は厚い。頸部は直線的に立つ。体部上端付近と中ほどに3条の子持ち紐帯が巡るが、紐帯は低く、沈線によって紐帯を表現する。高台はハの字状に広がる。高台の亀裂、体部から口縁部にかけての器壁の荒れから被熱を受けたものとされる。垣内2010では14世紀に伴うものと指摘されているが、15世紀に降る可能性を想定する⁷⁾。

10.願成寺境内(岐阜県岐阜市)

真言宗寺院・願成寺の境内から銅製闕伽桶1と銅製花瓶5が出土。昭和2年(1927)、本堂の北東5、6間、約10mの山際から発見され、闕伽桶の藁の中に小型の花瓶3(図7-13~15)を口縁部を下方に向けて、その両側には大型の花瓶2点(図7-16・17)を置いて納めた状態で出土した(片野1959)。

13~15の花瓶は銅製。13は頸部に折損があるが、完形。器高12.5cm、口径2.95cmを測る。14は完形、器高12.7cm、口径3.1cmを測る。15は頸部から体部にかけて破損があるが、全形がわか

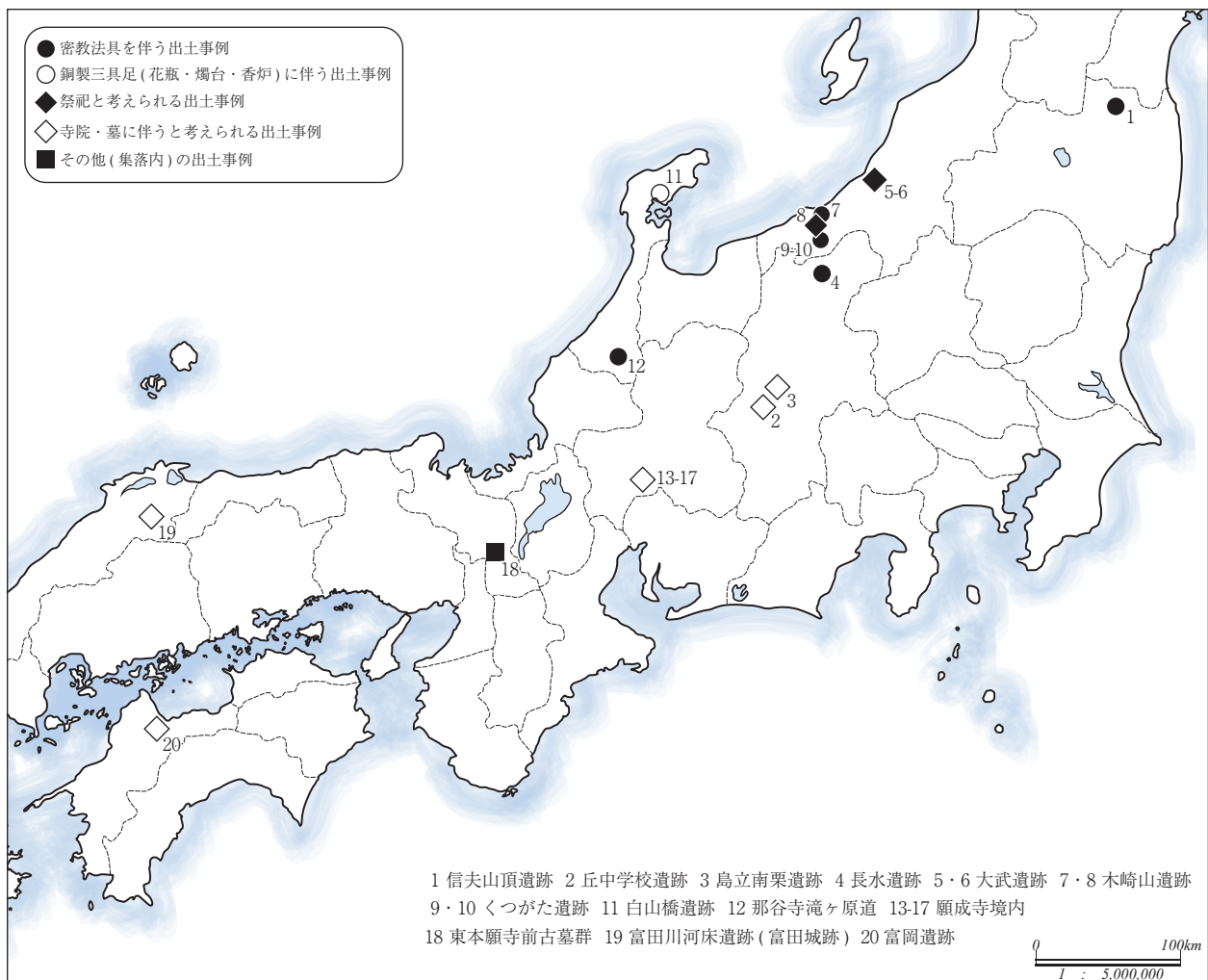


図8 銅製德利形花瓶出土位置図

り、器高13.0cm、口径3.4cmを測る。いずれも口縁帯に2条の沈線、頸部に2条の紐帯、体部上端付近と中ほどに厚く幅の広い3条の子持ち紐帯が巡る。13は頸部から体部までなだらかで、14・15の頸部はやや直線的に立ち、体部は球状をなし、境が明瞭である。高台端部は肥厚し、15は段をなす。図示し得ないが、3点とも高台基部内面に明瞭な段をもつ。外面に和紙が付着する。

16・17は金銅製で完形。16は器高19.0cm、口径5.9cm、17は器高19.1cm、口径6.0cmを測る。ともに口縁帯の沈線と頸部の紐帯、体部の3条の子持ち紐帯は銅製の花瓶と同様、明瞭である。頸部は短く、緩やかに体部にいたる。体部外面には横方向の強い研磨痕跡が認められる。高台端部は肥厚し、高台基部の内面に強い段をもつ。16には径5.9cm、厚さ4.6cmほどの円盤状の木製内底を伴う。ともに高台内面には永楽寺の線刻銘を伴う⁸。

片野1959では花瓶は鎌倉時代の年代とされるが、13～17、それぞれに形態差があり、その製作年代には年代幅があるものと想定される。

11.東本願寺前古墓群(京都府京都市)

東本願寺前古墓群の一角にあたり、京都市下京区烏丸通下珠数屋町上る常葉町、H区20～21地点の1977年調査トレンチNo.72で平安後期から近世までの堀、井戸、溝、ピットなどが検出されている。井戸9は掘方が一辺約1.9mの方形、下部で径0.88～1.24mの楕円形を呈し、15世紀中葉～後半の土師器皿、瓦質土器火鉢・盤、磁器碗、瓦、鉄釘、古瀬戸花瓶とともに、銅製花瓶1(図7-18)が出土(京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1982)。

花瓶は銅製で完形。器高8.7cm、口径2.2cmを測る。頸部の紐帯は突線をなすが、体部の子持ち紐帯は幅が広い沈線を巡らし、溝間を紐帯として表現する。体部上位の紐帯は2条、下位の紐帯は3条の溝を巡らせるので、下位においては子持ち紐帯としての元の構成が崩れている。口縁帯にはわずかに2条の沈線が認められる。高台基部の内面には突起が見られるので、この部分が内底とするよう意識されている。高台内部には上端径2.2cm、下端径2.4cm、高さ0.6～0.75cmの白色有機物が充填され、内底としている。和紙状のものを詰めたものと考えられる。

12.富田川河床遺跡(富田城跡)(島根県安来市)

富田城西麓の城下町にあたり、中世末から近世初頭にかけての町家遺構が確認され、陶磁器をはじめ多彩な遺物が出土。第7次調査区FT区第4遺構面で16世紀後半の建物跡、井戸、石列、土坑、ピットが検出され、土坑SK208から釘2点とともに銅製花瓶1(図7-19)が出土する(島根県教育委員会1983)。

花瓶は銅製で、体部に土圧による歪みが認められるが、完形。器高9.1cm、口径2.45cmを測る。口縁帯に沈線がみられない。頸部の紐帯と体部上位の子持ち紐帯は扁平であるが、体部下位の子持ち紐帯はしっかりと造る。口縁帯と高台端部の内側に面をもつ。

4 銅製徳利形花瓶の評価

(1)銅製徳利形花瓶の型式変化と編年

花瓶という資料そのものがもつ性質上、一見、その型式変化に乏しいが、寺院所蔵資料やコレクション資料を参照しつつ、その型式変化の模式を図9に、編年案を図10に示す。

共伴の青磁碗の年代から13世紀後半頃の埋納と考えられるくつがた遺跡例は、ごく小型で頸部から体部にかけての曲線形が強く、低い高台部をもつ。13世紀とされる愛知県美術館所蔵の木村定三コレクションM2242が器高7.9cmとやや小型で、くつがた遺跡例と同形態となる。鎌倉時代の銅製懸仏に表現された徳利形花瓶として武蔵御嶽神社所蔵資料の例があるが、やはり同様な形態をとる(齋藤2000)。

鎌倉後期作とされる浅草寺・岩屋寺所蔵資料は器高12cmほどとやや大きく、頸部・体部に蓮弁飾りをもつ点、高台部が高く、二段に開く点でくつがた遺跡例と異なるが、やはり頸部は細く、体部にかけて滑らかな曲線形となる。このような形態を呈するものが徳利形花瓶の極初期のものとして想定できる。

共伴陶器の年代から13世紀の埋納とされる木崎山遺跡54号土坑例は、器高11.2cmと浅草寺・岩屋寺例と法量が近く、高台部が二段に開く痕跡をとどめるなど、比較的近い時期のものとして推測される。ただ、木崎山遺跡の例は口縁帯直下、頸部上部がやや屈曲し、体部が倒卵形となり、高台端部が肥厚化するなど、後出的な要素も認められる。これは交14世紀頃における形態的な特徴と理解しておきたい。木崎山遺跡54号土坑例と同様な特徴をもつ長水遺跡例、願成寺境内例(図7-13)も同時期のものと推察される。

以上のことから、13世紀後半から交14世紀における花瓶の形態は、頸部から体部にかけて強い曲線形となり、体部はあまり張らない倒卵形、茄子形を呈し、高台部は二段に開くか、その痕跡をとどめるといふ特徴を指摘できる。

14世紀における形態的な特徴として、信夫山頂遺跡、木崎山遺跡68号土坑、大武遺跡、願成寺境内(図7-14)の各例に見るように、頸部から体部にかけての曲線形が失われ、頸部の上下で屈曲をもち、頸部中位がやや直線的となる。木崎山遺跡68号土坑、丘中学校遺跡、願成寺境内(図

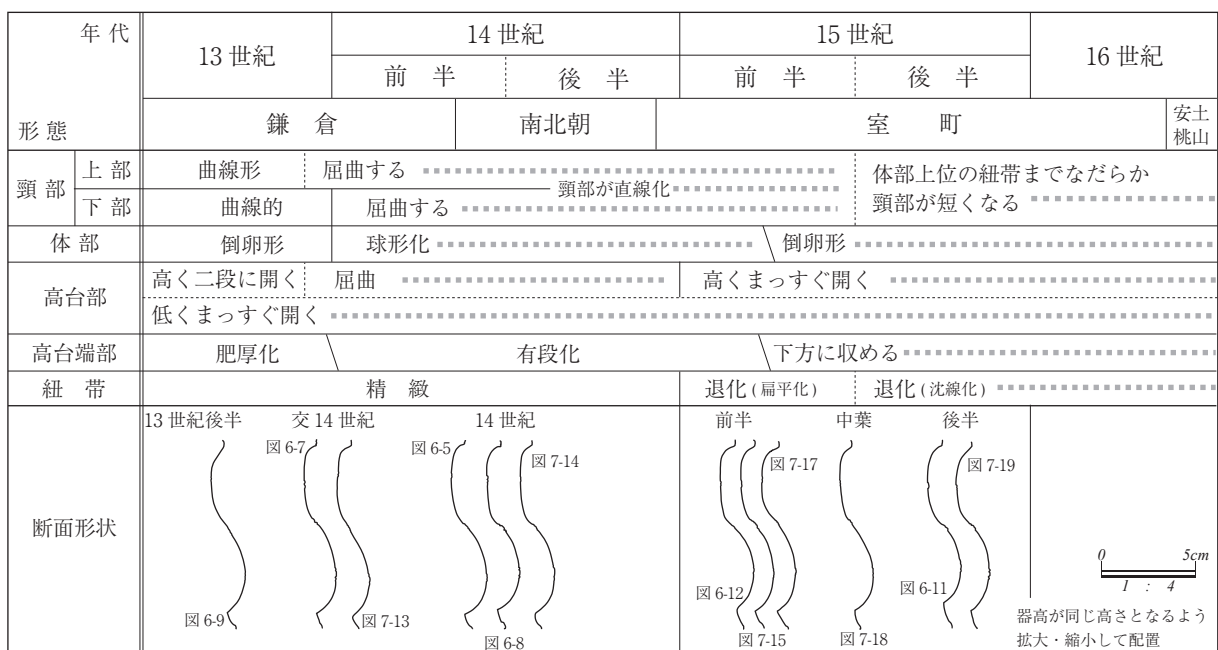


図9 銅製徳利形花瓶の形態変化

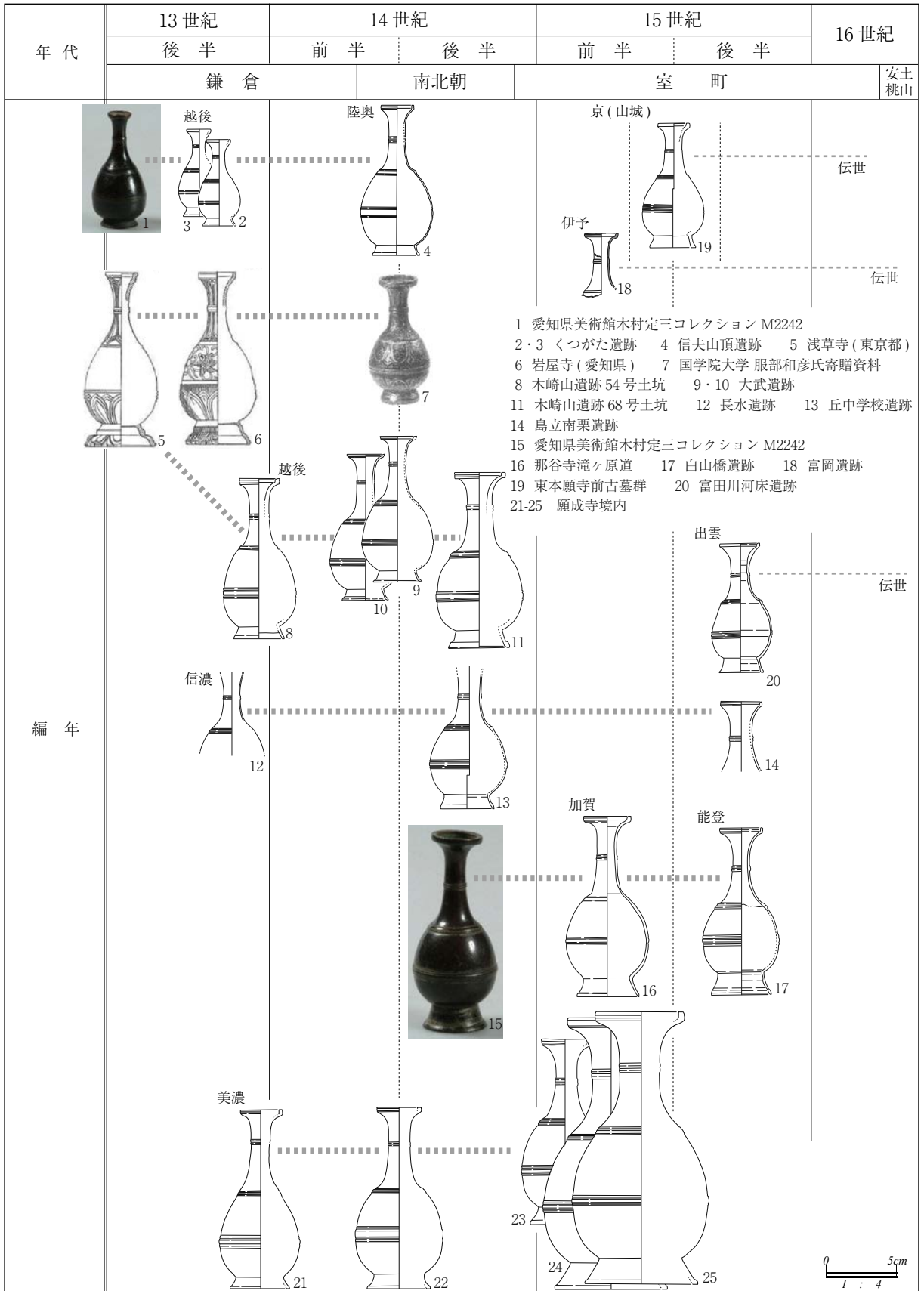


図10 銅製德利形花瓶の編年

7-14)の例に見られるように、体部は丸みを帯びて球形化する。高い高台部をもつものは二段に開いた形が崩れて肥厚したまま下方に収め、さらに高台端部が外方に台形状に張り出す木崎山遺跡、大武遺跡の例が見られるようになる。

寺院伝世例となるが、信濃・東信地域の弥勒寺に伝わる器高24.2cmの金銅製花瓶が木崎山遺跡68号土坑、丘中学校遺跡と同形態であり、応永14年(1407)の寄進銘をもつことから(高橋・丸山2010)、体部が強く球体化するのは14世紀後半頃に伴う特徴とみてよいであろう。

15世紀前半には体部が再び倒卵形を呈するようになるが、願成寺境内(図7-15)、富岡遺跡、那谷寺滝ヶ原道の各例のように頸部の直線化が顕著となる。

15世紀後半には頸部が短くなり、頸部から体部上位の紐帯にかけて緩やかな曲線形となり、頸部の断面形は鼓形となる。その器形は13~交14世紀に伴う形態の復古が意識されている可能性がある。法量差はあるものの、白山橋遺跡、東本願寺前古墓群、富田川河床遺跡、願成寺境内(図7-16・17)の各例がほぼ同形態となる。体部、高台部は前段階からの形態的な特徴を踏襲する一方で、それまで高い突線で表現されていた紐帯がこの段階以後は退化傾向を示す。紐帯の突線は幅が狭く低くなり、突線間の溝幅が広く、深くなる。15世紀前半にも一部でこの傾向が認められたが、富田川河床遺跡例では、ほぼ溝のみで紐帯を表現するようになり、15世紀後半に顕著な特徴となる。

東本願寺前古墓群や富田川河床遺跡の例は出土状況から判断すれば、花瓶の製作年代と埋没年代にある程度の時期幅が想定でき、このような資料は一定期間の伝世を想定できそうである。願成寺境内出土例も、埋納年代が15世紀前半であるものと理解しておきたい。

中世陶器の花瓶は銅器の器形を写し取って生産されたものと想定されるので、尾張瀬戸窯の施釉陶器である古瀬戸の徳利形をなす花瓶を例にとって、形態変化を確認しておきたい。

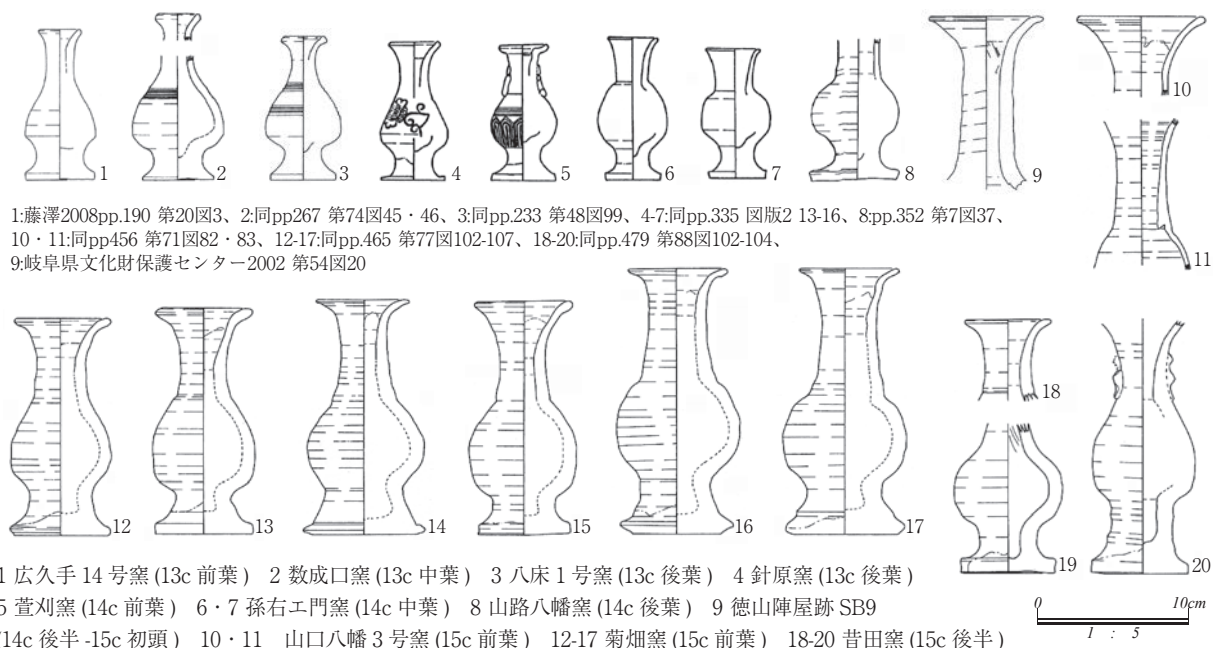


図11 古瀬戸花瓶の諸例

図11、藤澤良祐氏の編年に従うと(藤澤1995・2008)、古瀬戸前期様式のⅡ期、13世紀前葉に德利形花瓶が出現し、Ⅳ期、13世紀後葉において頸部から体部にかけて曲線形をなす形態のものが認められるようになる。前述のとおり出土事例では13世紀後半に伴うものが出現初期と考えられるが、銅製德利形花瓶は13世紀前葉には出現していた可能性が高い。

古瀬戸中期様式のⅠ期(14世紀前葉)からⅣ期(14世紀中葉)にかけて頸部の上下が屈曲し、明瞭な頸部をなし、体部が丸みを帯びる形態が続く。消費地遺跡の例では、岐阜県・徳山陣屋跡掘立柱建物跡SB9出土の14世紀後半～15世紀初頭に伴うとされる古瀬戸花瓶の頸部が細く直立する形態を呈する(岐阜県文化財保護センター2002)。

古瀬戸の德利形花瓶の型式変化を照らし合わせても、図10で示した銅製德利形花瓶の編年観はおおむね妥当であると考えられる。

(2)銅製德利形花瓶の製作技術

白山橋遺跡出土事例から、花瓶の体部内面に「焼き砂と中子の挽目が残存することから惣型ではなく蠟型」の鑄型によることが発掘調査報告書において想定されており(穴水町教育委員会1987)、基本的には一連の資料は土製鑄型を用いた蠟型による鑄造と考えられる。全ての出土銅製德利形花瓶を実見した限りでは、器面に湯口の痕跡は認められなかった。研磨によりその痕跡をとどめないものと推察される。

大武遺跡や白山橋遺跡の例では体部の内側面に内型とみられる細土がそのまま残り、大武遺跡例ではそれに密着させるように木栓を嵌めて内底とするので、鑄造後、意図的に体部内側面の内型の細土を残した場合もあったものと考えられる。

花瓶の外面全体、口縁帯から頸部にかけての内面は研磨で仕上げられており、丘中学校遺跡、大武遺跡、木崎山遺跡、白山橋遺跡、那谷寺滝ヶ原道の各例では高台部の内面に横方向の粗いケズリ状の条痕をとどめる。有機質の内底を嵌めるために器厚を調整した痕跡であろう。

体部内面の器面の凹凸が顕著な例として丘中学校遺跡、那谷寺滝ヶ原道、願成寺境内(図7-13)の各例があり、逆に器面が滑らかで凹凸が見られない例として大武遺跡、東本願寺古墓群、願成寺境内(図7-14～17)の各例がある。工房によって、内型(中子)と外型のどちらに蠟を被せたかを反映しているものと理解される。

図12は外型と内型の鑄型を模式として示したものである。外型に蠟を被せる場合は、①花瓶のモデル(図中では石製を想定)に外型の粘土を被せ、②蠟を被せた後に内型の細土を詰めるため、③体部内面には蠟との間にどうしても隙間が生じるので、鑄造時に隙間に銅が流れ込んでしまう。④鑄造後に外型を外し、内型の細土を突き崩す。という工程が復元できる。また、内型に蠟を被せる場合は、①外型(図中では石製を想定)に細土を詰めて花瓶の中型を造り、②蠟を被せて紐帯を貼り付け、③外型の粘土を被せるという工程を復元できる。この場合は、体部内面の隙間は生じないので、鑄造時に体部内面の凹凸は生じない。つまり、花瓶体部の内面に凹凸が認められる場合は外型に蠟を被せたものと推定できる。

中世の鑄造関係の職人として鑄物師と銅などの細工の存在が知られ、後者は仏具や建築にか

かる装飾品を製作し(佐々木2002)、社寺祭祀に関わる小型で装飾性の高い銅鑄物を生産した職人であることが指摘されている(五十川1998)。

京においては発掘調査によって11世紀後葉から14世紀前半までの銅細工に伴う工房跡の様相が判明しており(村木2018)、事実、甗形ではあるが花瓶と考えられる鑄型が出土する(財団法人古代学協会1983)。また、地方でも博多近郊の金屋遺跡で中世の花入の鑄型⁹が出土している(芦屋町教育委員会1996)。

鎌倉をはじめ関東、東国では13世紀以後、河内系鑄物師の影響を含めたさまざまな形態の鑄造工房が一定数存在したことが知られており(村上2006)、中世における銅製花瓶の製作は地方において既に開始されているものと考えられる。13世紀後半から14世紀前半において河内系鑄物師が1国ほどの領域で定着化することに対して、14世紀以後は主要街道に沿って1国数か所ほどの鑄造工房が在りし、技術的に稚拙となったとされる(村上2006)。先に見た15世紀後半以後に顕著となる花瓶紐帯の退化傾向と無関係とは言えず、地方における鑄造工房の技術力の高低が影響を及ぼしているものと推察される。

(3)銅製德利形花瓶の消長とその背景

出土事例を概観すると、木崎山遺跡54号土坑で飲食器、六器を、くつがた遺跡では独鉦杵、五鉦杵、火舎、六器、飲食器を花瓶とともに埋納する。また、長水遺跡では五鉦杵や錫杖などとともに花瓶が埋められた可能性が高いことから、銅製德利形花瓶の出現初期、13世紀～交14世紀には密教法具の一つとして花瓶が埋納された状況が認められる。加えて、この時期の花入は越後・上越地域から信濃・北信地域に出土分布が偏る。長水遺跡では近傍に中世寺院の存在も推定されるが、黒姫山という地域の靈山に対する信仰¹⁰として埋納された意図も見受けられる。

14世紀においては、山岳や仏堂に対する信仰¹¹としての埋納事例として、錫杖や水瓶、六器、火舎、香炉などを伴う陸奥の信夫山頂遺跡の例がある一方で、越後・上越地域の木崎山遺跡68号土坑は単独での出土であり、信濃・中信地域の丘中学校遺跡では寺院の存在も想定される集落内からの出土、越後・中越地域の大武遺跡では農耕祭祀に伴うと想定される例が見られるようにな

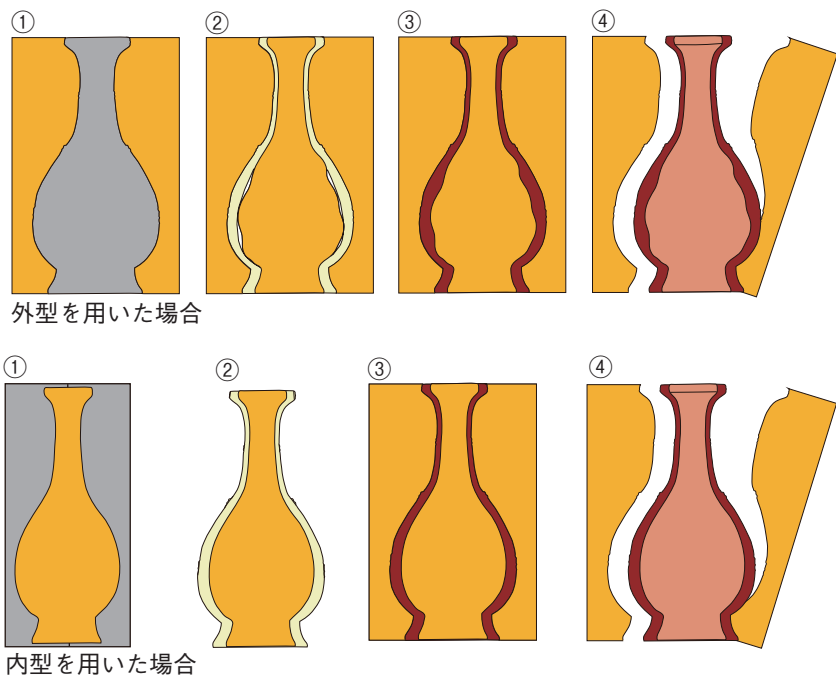


図12 銅製德利形花瓶の鑄造過程模式

る。密教法具を伴う埋納が上越・北信地域から陸奥などの周辺地域へと広がった一方で、初現地である上越・北信地域とその周辺部では密教法具としての花瓶という厳密な意識、位置づけが希薄となり、仏具や祭祀具の一つと見做した上で使用、納置する意味合いが付加されているのが14世紀の特徴である。

15世紀にも飯食器が伴う加賀の那谷寺滝ヶ原道の例があり、密教法具としての意味合いをもつ花瓶の埋納最終段階となるが、その埋納のあり方から見れば厳密な密教法具としての構成は崩れ去っている。

むしろ山城(京)や伊予といった西日本に出土分布の広がりを見せ、井戸からの出土ではあるが、もとは東本願寺前古墓群内に埋納されていた可能性も否定できない例や、後述するように中世寺院に伴う可能性が想定される伊予・富岡遺跡の例がある。また、能登では墓地と想定される白山橋遺跡の配石遺構から銅製三具足と共伴するという、これまで例を見なかった埋納形態も認められるようになる。富田川河床遺跡の例も16世紀後半の城下町遺跡からの出土ではありながら花瓶は寺院に伴う可能性が指摘されている(西尾2025)。密教法具としての初期の性格が完全に失われ、仏具としての性格がより一層強くなり、その使用や埋納には地域や遺跡間で異なる個別の事情が想定されるのが15～16世紀であり、中世後期には銅製花瓶の性格が大きく変容したことが想定される。

出土事例の多くは銅製の花瓶である一方、寺院伝世例の花瓶には外面に飾りを鋳出したものや金銅製のものが散見される。これらは埋納されずに寺院において後世に伝世した可能性が高い。図7-16・17、願成寺境内出土の寺院銘入りの金銅製花瓶2点においても元は寺院に伝世するものであったと想定され、銅製徳利形花瓶は鍍金や装飾などの有無によって伝世させるものと埋納するもの、それぞれにおいて位相が異なっていた可能性が高い。

5 富岡遺跡と出土銅製花瓶をめぐって

(1)富岡遺跡出土花瓶の年代と製作地

図9・10で示した銅製徳利形花瓶の型式変化の模式、編年案に照らし合わせると、富岡遺跡出土の青銅製花瓶は頸部の直線化が顕著な事例となり、15世紀前半頃の製作年代が想定される。富岡遺跡では15～16世紀の遺構、遺物が確認されており、富岡遺跡からこの花瓶が出土することに時期的な矛盾はない。一方で、前述のとおり発掘調査では上層が16世紀、下層は15～16世紀に伴うものと考えられ、花瓶が伴う溝3・8(SD3・8)はこの上層面で検出されていることから、その埋没年代は16世紀と考えられる。

出土花瓶の具体的な製作工房は判然としないが、伊予国古田郷に所在する興隆寺の梵鐘には弘安9年(1286)5月の年紀銘があり、貞治7年(1368)2月の「長谷有安堵状」には古田郷に銅とは特定できないものの細工所の存在が見えるなど(景浦1992)、13～14世紀には近郊に銅鑄物の工房が存在した可能性の一端が垣間見える。また、富岡遺跡では花瓶が出土した溝3・8(SD3・8)から鉄の鍛冶関連遺物の他に鍛造、鑄造製品も出土しており、遺跡近郊に鉄関連の工房が存在した可能性が高いことから、銅の鑄造や細工をおこなった施設の存在も否定できない。工房が常置され、工人

が常駐したかという問題はあるが、いずれにせよ在地の工房で生産された可能性が高いのではないかと推察される。

(2)富岡遺跡出土花瓶と中世寺院

富岡遺跡の発掘調査では、寺院の存在をうかがわせる遺物として、青銅製花瓶の他、2～4区において瓦片10点ほどが、4区からは瓦質土器火鉢1点が出土している。しかし、瓦類の出土点数は少なく、この調査区内に寺院そのものの存在は想定しがたい。2～4区の南側は現代の宅地が展開する微高地にあり、図13に示したように発掘調査地の南方に中世後期の寺院が存在した可能性が考えられる。

現在、遺跡南側には仏土山寂光寺という臨済宗妙心寺派の寺院が所在する。『周布村誌』などの郷土誌によれば、寂光寺は近世の在地豪族であった首藤四郎右衛門の第四子、海霊による建立を伝え、長福寺の南明禅師の弟子となり、松島瑞巖寺の寂照神光禅師のもとで修行した後、西迎寺を再建し、後に寂光寺に改められたという。

仏土山西迎寺は鎌倉時代の僧、明尊が開いたと伝わる浄土宗の寺院で、天正13年(1585)、豊臣秀吉の四国侵攻に伴い、小早川隆景軍によって焼失したとされる。その時に本尊阿弥陀三尊仏が救出され、その後、小堂で祀られたことが知られている。昭和年間に現在の寂光寺から南東に約

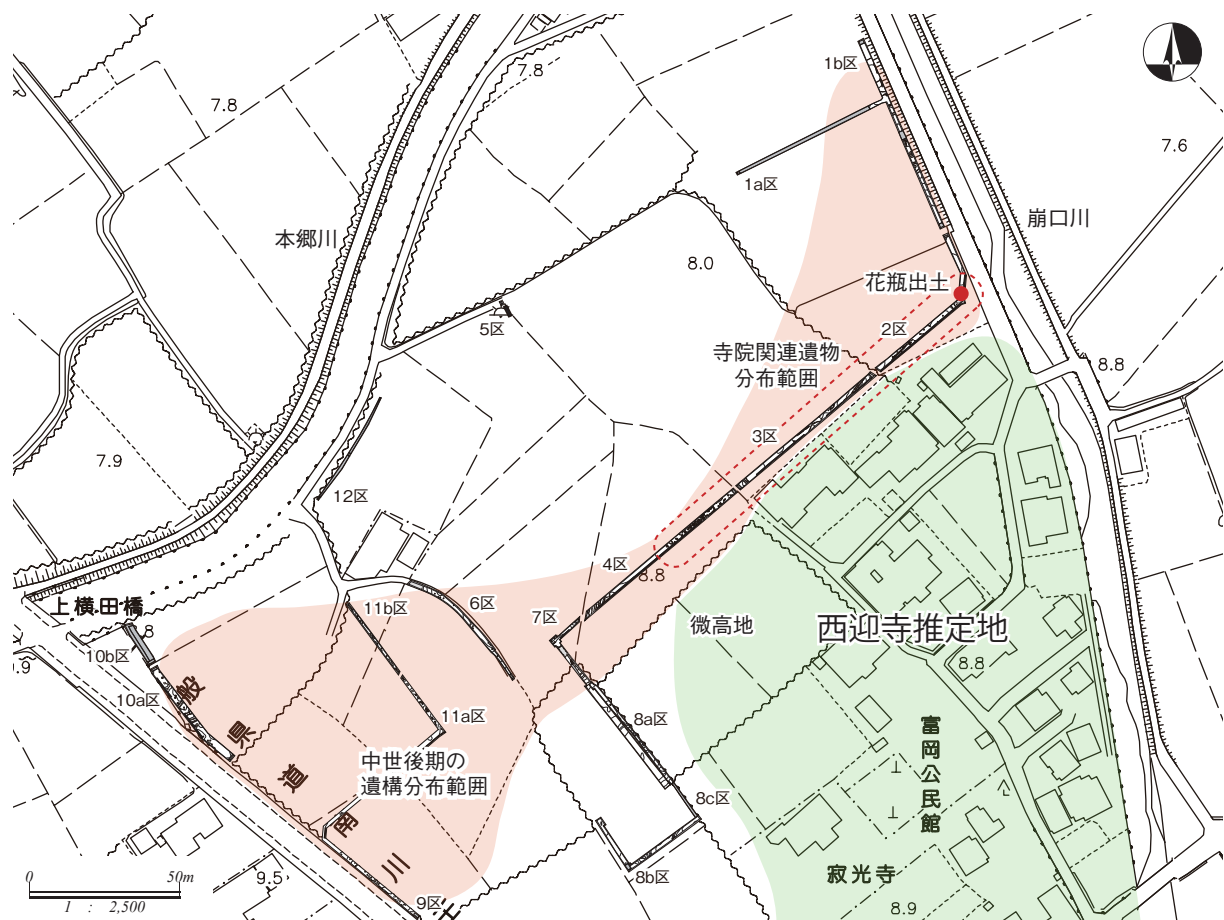


図13 富岡遺跡と西迎寺推定地

200m地点での崩口川河川改修時に寺院建物の雨落ちに伴うとされる石が並んでいる状況が確認された¹²(藤岡1978)。

『周布村誌』の記述から知られる内容は以上であるが、寂光寺の前身にあたる中世寺院が存在したことは近世の地誌にも見られ、近世末期の『小松邑志』には「往古ハ定式ト云地ニ在リ。浄土宗ニテ西迎寺ト号ス。故ニ此村ヲ西迎寺ト云フ。」とあり、富岡村と改めたのは最近で、寺院が現在の地に移った時期は不明、という記述が続く(近藤1860)。

今回、富岡遺跡2～4区の発掘調査で出土した寺院関連遺物は、この西迎寺に関連する可能性も考えられ、中世寺院が実在した可能性が高まったといえる。遺跡南側の微高地に中世後期段階の寺院や集落構成者の上位層が展開し、集落の中心部を形成した可能性が考えられる。遺跡から出土する15世紀以後の銅製徳利形花瓶は密教法具から仏具へとその性格が変容していたあり方を前述したが、富岡遺跡出土の青銅製花瓶は仏具として中世寺院に帰属し、伝世した後、16世紀後葉の西迎寺焼失によって流失し、最終的に富岡遺跡で埋没した状況が推察される。

おわりに

本稿では、富岡遺跡出土の青銅製花瓶を紹介し、現時点での遺跡と花瓶の評価を示した。また、銅製徳利形花瓶は、その出土・発見事例が全国で20例と少なく、制約も多いが、中世における型式変化や編年、性格について現時点での理解を示した。特に15～16世紀には密教法具から仏具へとその性格が変容し、西日本においても寺院や墓地に伴う状況が確認されることから、今後、日本各地で中世後期に伴う銅製徳利形花瓶の類例が増加する可能性も示唆される。

最後に、本稿に(公財)愛媛県埋蔵文化財センターが保有する調査図面・写真等を使用させていただくとともに、センターの先輩、同僚の方々に纏々、ご指導・ご教示を賜りました。資料調査に際しては、日本海学推進機構(富山県地方創生局多文化共生推進室)ならびに職場である愛媛県埋蔵文化財センターの研究助成を賜りました。また、受託業務の一環で類例調査を実施しており、中国四国農政局ならびに西条市教育委員会のご高配を賜りました。

資料調査、類例探索、文献入手および本稿の執筆、図表作成においては、以下の機関、個人のご指導、ご協力を賜りました(敬称略)。記して感謝申し上げます。

芦屋町芦屋釜・歴史文化課、穴水町教育委員会、願成寺、京都市考古博物館、京都市文化財保護課、岐阜市文化財保護課、小松市埋蔵文化財センター、(公財)元興寺文化財研究所、(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団、西条市教育委員会、塩尻市教育委員会、信濃町教育委員会、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター、瀬戸内海考古学研究会、中国四国農政局道前平野農地整備事業所、長岡市教育委員会、那谷寺、福島県立博物館、松本市立考古博物館、松本市立博物館、妙高市教育委員会

會田美保、青木聡志、石貫睦子、岡島俊也、梶田昌宏、河合一希、川畑謙二、北川毅、木林俊英、小林康幸、小松学、笹田朋孝、佐藤慎、佐藤友子、柴田圭子、下條信行、神野恵、鈴木圭、首藤久士、其田佑佳、高橋充、谷若倫郎、時枝務、中谷幸奈、伴井嘉正、仁木聡、新田和央、乗松真也、初村武寛、八軒かほり、丸山一昭、水澤幸一、宮森一、三吉秀充、両角太一、山岡奈美

恵、山岸峰雄、山口繁生、山本雅和、吉田晋右、吉永壮志、渡邊芳貴

註

- *1 出土土器・陶磁器の年代観については、柴田圭子、首藤久士、青木聡志の各氏のご教示を賜った。
- *2 出土遺物を愛媛大学法文学部 笹田朋孝氏に実見いただき、多くのご教示を賜った。
- *3 煩雑となるため、蛍光X線スペクトルは示さない。蛍光X線分析の結果は発掘調査報告書に収録予定である。
- *4 実見した限りにおいて、藤澤良祐氏が示す中期様式の範疇に含まれるものと考えられる(藤澤1995・2008)。
- *5 青磁碗の年代観については、柴田圭子氏にご教示賜った。
- *6 共伴土師器皿に関して、発掘調査報告書ではIV(筆者註:15世紀後半～16世紀)前期の年代が示されており(四柳1987)、その後、複数の研究者による土師器皿の編年が提示されている(四柳1997・田嶋1997・柿田2006・岩瀬2018・阿部2022など)。これらの先行研究を勘案し、年代を推定した。
- *7 白山橋遺跡例との類似性から14世紀に伴う可能性が指摘されているが(垣内2010)、白山橋遺跡例そのものの製作年代が降る可能性が高いこと、那谷寺境内奥の遺構群は15世紀に伴う可能性が高いこと、後述するように花瓶の形態から見ても15世紀に伴う可能性が高いことから、14世紀から降るものと理解した。
- *8 「大型瓶の一つ高台裏に「永楽寺」の刻銘がある。」とされるが(片野1959)、実見したところ図7-16・17の2点ともに永楽寺銘があることを確認した。
- *9 実見したところ、觚形花瓶の胴部から頸部基部にかけての部位ないしは燭台の鋳型である可能性が高い。
- *10 新潟県側にも青海黒姫山、刈羽黒姫山といった同名称の山岳が所在するが、ここでは上越市や妙高市から遠望できる長野県側の黒姫山を指す。
- *11 遺跡の立地、出土遺物の構成からみて山岳祭祀に伴う可能性が高いが、それでも仏堂のような施設が存在した可能性があることを高橋充氏からご教示いただいた。
- *12 寂光寺から南東約200mの地点に江戸年間の造立銘をもつ墓石を含む墓地が所在するが、中世まで遡るものは見受けられない。この墓地内に近年に設置された西迎寺跡と刻まれた石製の標柱がある。

参考文献

- 愛知県美術館2015『愛知県美術館研究紀要22号 木村コレクション編』
- 芦屋町教育委員会1996『筑前金屋遺跡』
- 穴水町教育委員会1987『西川島 能登における中世村落の発掘調査』
- 阿部来2022「第1部 地域論 第5章 北陸」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会編 真陽社
- 石田茂作1965『密教法具』奈良国立博物館監修 臨川書店
- 石貫睦子2026「C.富岡遺跡」『愛比売 2025(令和7)年度年報 ～発掘調査事業および普及活動事業の記録～』(公財)愛媛県埋蔵文化財センター
- 五十川伸矢1995「丹南の鋳物師」『中世の風景を読む第五巻 信仰と自由に生きる』網野善彦・石井進編 新人物往来者
- 五十川伸矢1998「銅関連鋳造遺跡 鋳造遺跡からみた古代・中世の銅鋳物生産」『季刊考古学第62号 古代・中世の銅生産』雄山閣出版
- 五十川伸矢2006「中世の鋳物生産と地域性」『新領域創生研究部門A01-2 日本中世における銅鉄の金属生産とその流通に関する研究 シンポジウム 中世日本の鋳物生産-日本列島の西と東-』五十川伸矢
- 岩瀬由美2018「能登における15世紀中葉～17世紀初頭の土師器皿の様相」『石川県埋蔵文化財情報』第39号 (公財)石川県埋蔵文化財センター

岡崎讓治1984「密教法具」『新版 仏教考古学講座』第五巻 仏具 石田茂作監修 雄山閣出版

押水町教育委員会1987『嵯峨井コレクション図録』

垣内光次郎2010「第五章 社殿・境内の造形 第四節 滝ヶ原出土の仏具」『新修小松市史』資料編9 寺社 新修
小松市史編集委員会編 小松市

柿田祐司2006「加賀・能登の様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸・美濃製品』北陸中世考古学研究会

景浦勉1992『観念寺文書 改訂版』

片野温1959「重要文化財 花瓶及闍伽桶」『岐阜県指定文化財調査報告書』第三巻 岐阜県教育委員会

金子拓男・宮腰公健1977「くつがた遺跡出土の密教法具」『月刊文化財』1977年7月号(166号) 文化庁文化財保護部監修 第一法規株式会社

京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1982『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』本文編

岐阜県文化財保護センター2002『徳山陣屋跡(徳山14)』

小池伸彦1997「第V章 考察 5.金属製品 密教・密教法具の変遷と大覚寺出土銅花瓶の意義」『史跡大覚寺御所跡 発掘調査報告 大沢池北岸域復元整備事業に伴う調査』大覚寺

國學院大學研究開発推進機構学術資料館2008『服部和彦氏寄贈資料図録Ⅱ 懸仏・仏具』

近藤範序1860「上篇五 北条村」『小松邑志』伊予史談会

西条市教育委員会2020『市内遺跡試掘調査報告書 国営緊急農地再編整備事業に伴う試掘調査報告書Ⅰ』

齋藤慎一2000「連載 武蔵御嶽神社宝物シリーズ10 金剛蔵王権現の懸仏」『武州みたけ』14号 武蔵御嶽神社

佐々木稔2002『鉄と銅の生産の歴史 -金・銀・鉛も含めて- 増補改訂版』雄山閣出版

財団法人古代学協会1983『平安京跡調査研究報告第6号 平安京左京八条三坊二町』下條信行・川西宏幸編

塩尻市教育委員会1983『丘中学校遺跡 長野県塩尻市丘中学校遺跡発掘調査報告書』

信濃町立野尻湖博物館1991『博物館だよりNo.26』

柴田圭子2025「第2章 龍泉窯青瓷碗・皿・盤の編年」『明代龍泉窯青磁の研究』吉川弘文館

島根県教育委員会1983『富口川河床遺跡発掘調査報告書Ⅲ』

鈴木実雄・穂月敬吾1956「第十九章 宗教」『庄内村誌』庄内村誌編纂委員会編 庄内公民館

高橋基・丸山正俊2010「文化財編 二 美術品・工芸品 鍍銅箔鍍金花瓶」『白田町誌』第六巻 文化財・史料・年表編 白田町誌編纂委員会編 佐久市白田町誌刊行会

太宰府市教育委員会2000『太宰府条坊跡X V -陶磁器分類編-』

田島明人1997「5 北陸」『国立歴史民俗博物館研究報告第71集 〈共同研究〉中世食文化の基礎的研究 [第1部] 中世食器の地域性』国立歴史民俗博物館

土山公人ほか2015「第2章 崇め敬う 神仏との対話 17 岐阜県重要文化財 華瓶及び闍伽桶」『特別展 日本遺産 認定記念 先人からのギフト』岐阜市歴史博物館編 先人からのギフト展実行委員会

時枝務・高橋充2011「信夫山頂遺跡出土品の研究(1)」『福島県立博物館紀要』第25号 福島県立博物館

時枝務・高橋充2022「信夫山頂遺跡出土品の研究(8)」『福島県立博物館紀要』第36号 福島県立博物館

長野県中信土地改良事務所・松本市教育委員会1984『松本市文化財調査報告No.32 松本市島立南栗遺跡 緊急発掘調査報告書』

長野市立博物館1994『第三十五回特別展 信濃の山岳信仰』

新潟県教育委員会1992『新潟県埋蔵文化財調査報告第28集 北陸自動車道関係発掘調査報告書 木崎山遺跡』

新潟県教育委員会2000『新潟県埋蔵文化財調査報告第97集 一般国道116号和島バイパス関係発掘調査報告書Ⅰ 大武遺跡Ⅰ(中世編)』

西尾克己2025「富田城下に所在した寺院 -発掘調査の成果から探る-」『島根県古代文化センター研究論集第35号 中世山陰の戦争と地域社会』島根県古代文化センター編 島根県教育委員会

福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館1983『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』

福岡市教育委員会2007『福岡市埋蔵文化財調査報告書第942集 博多112 博多遺跡群第153次調査報告』

藤岡武文1978「第九編 宗教 第二章 仏教 四 伝土山寂光寺」『周布村誌』周布村誌編集委員会

藤澤良祐1995「Ⅲ 土器・陶磁器 9.中世陶器 (1)古瀬戸」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社

藤澤良祐2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

松葉竜司2025「A.富岡遺跡」『愛比売 2024(令和6)年度年報 ～発掘調査事業および普及活動事業の記録～』(公財)愛媛県埋蔵文化財センター

水澤幸一2016「第5章 中世の遺跡と遺物 第2節 神社・寺院跡」加茂市史編集委員会編 加茂市

村上伸二2006「東国における鋳物師のむら」『鎌倉時代の考古学』小野正敏・萩原三雄編 高志書院

村木二郎2014「中世鋳造遺跡からみた鉄鍋生産」『考古学と中世史研究11 金属の中世 -資源と流通-』小野正敏・五味文彦・萩原三雄編 高志書院

村木二郎2018「中世京都七条町・八条院町界隈における生産活動 銅細工を中心として」『国立歴史民俗博物館研究報告第210集 [共同研究] 中世の技術と職人に関する総合的研究』国立歴史民俗博物館

四柳嘉章1987「中・近世漆器の編年」『西川島-能登における中世村落の調査』穴水町教育委員会

四柳嘉章1997「能登国における土師器の編年」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会編

挿図表等出典

図1：MAPIO/Royalty Free Digital Maps ©NijiX、愛媛県埋蔵文化財センター提供図をもとに筆者作成。

図2：公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センターが保有する測量図・写真等を使用し、筆者作成。

図3：筆者作成。

図4：愛媛県埋蔵文化財センターが元興寺文化財研究所に委託した業務の成果品である初村武寛氏作成の実測図を筆者がトレースし、元興寺文化財研究所撮影写真を合成して作成。

図5：筆者作成。

図6・7：1は時枝・高橋2011 図版2-6、2は塩尻市教育委員会1983 第34図、3は長野県中信土地改良事務所・松本市教育委員会1984 第90図-2、5・6は新潟県教育委員会2000 図版19-21・22、7は新潟県教育委員会1992 図版71-18、8は同図版70-9、11は穴水町教育委員会1987 図64-3、12は垣内2010 第4図-17、19は島根県教育委員会1983 図65-2に収録の各実測図を筆者が一部改変のうえ再トレースし、20は図4を元に作成した。また、4・9・10・13～18は筆者がRealityScan Mobileで作成した三次元モデルをオルソ化してトレースしたものである。

図8・9：筆者作成。

図10：図6・7掲載図に加えて、愛知県美術館2015(pp.73 50・51 銅華瓶)、石田茂作1965(pp.160 479・482)、國學院大學研究開発推進機構学術資料館2008(pp.110 1378 花瓶)に収録の図・写真を転載の上、筆者作成。

図11：1～8・10～20は藤澤2008、9は岐阜県文化財保護センター2002 収録図を転載の上、筆者作成。

図12：筆者作成。

図13：西条市提供の都市計画図を改変し、筆者作成。

表1・2：筆者作成。

(2026年2月25日)

愛媛県における戦争遺跡調査の動向

藤本清志

1 はじめに

2024(令和6)年、松山市の北吉田馬場遺跡において一般国道56号松山外環状道路空港線および県道余戸北吉田線開発に伴い、記録保存目的としては当センターで初となる戦争遺跡の発掘調査が実施された(写真1・2、藤本2025)。内容は丘陵裾部の防空壕2基と丘陵部のコンクリート製構造物の調査で、これらは松山海軍航空基地関連施設と考えられる。これまで県内各団体の発掘調査で防空壕や塹壕などの遺構、戦時中遺物の調査・報告は数例行われており、『紀要愛媛』第9号の「第8章 近代」で報告している(多田・藤本2010)。2025(令和7)年で戦後80年となり、また当センターで本格的に戦争遺跡の発掘調査が実施されたことから、愛媛県における戦争遺跡調査の動向をまとめたいと思う(表1)。



写真1 北吉田馬場遺跡遠景



写真2 北吉田馬場遺跡調査状況

2 遺跡調査・踏査など(図1)

2009(平成21)年までの状況は概ね前述の『紀要愛媛』第9号の通りであり、それ以降の調査例として松山市南吉田町の掩体壕調査(松山市教委・松山市埋文2016)や今治市の防空壕調査(今治市教委2023)、八幡浜市や西宇和郡伊方町での防空壕や砲台跡内部の三次元計測(愛媛新聞2015年3月8日)などが挙げられる。

松山市の掩体壕は63基造られたとされ、現存する3基のうちの1基であり、松山市の有形文化財に指定された(写真3・2018(平成30)年5月18日指定)。この掩体壕を含む松山市内の戦争遺跡や関連遺物については再整理され、報告が行われている(鶴久森2025)。今治市の大浜防空壕では民間防空壕9



写真3 掩体壕 (松山市指定有形文化財)

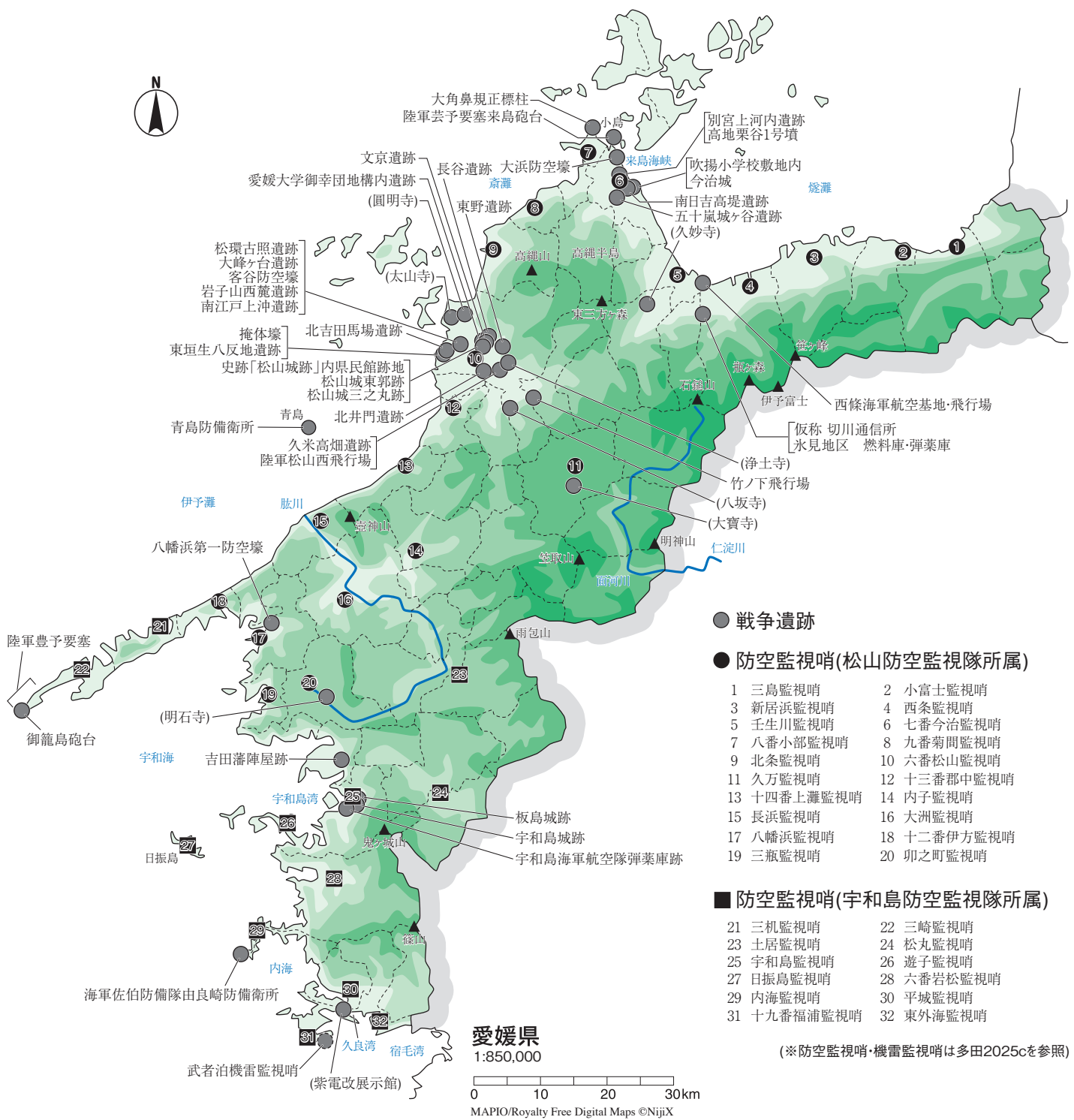


図1 愛媛県内戦争遺跡位置図

基の調査が行われ、防空壕内から陶磁器や金属・ガラス製品などの遺物が採集された。現地確認や踏査例として、多田仁氏や増田晴美氏らによる防空監視哨調査(多田・高嶋2018、多田・藤本・増田2019など)、山本達也氏による地下壕調査(山本2024)、松野町戦時遺構調査会による塹壕調査(愛媛新聞2012年2月8日)などがある。防空監視哨は1937(昭和12)年の防空法制定により建設が進められ、上空および海上監視が行われていたが、その性格から地元でも存在や場所が知られていないこともあった。2010年代後半頃より、多田氏は史資料や聞き取り調査から場所を推定し、踏査によって位置を特定した。現地では聴音壕や哨舎跡などの遺構の測量や遺物採集を行い(写真4)、2025(令和7)年8月の伊予史談会例会で県内の防空監視哨が32哨(松山防空監視隊所属20哨・宇和島防空監視隊所属12哨)であることを報告した(多田2025c)。また議事録や議決書なども発見され、史料の面からも調査が進みつつある(多田2025b・2025c・2025f)。



写真4 防空監視哨測量状況

この他、踏査によって西宇和郡伊方町山中より「豊予要塞の地帯標」が採集されている(愛媛新聞2025年7月25日4面・前田編2026)。このような標柱に関するものとして松山市堀之内に陸軍関連の境界標柱があったが、現在は撤去され跡地にプレートが埋め込まれている(愛媛新聞2009年10月19日・多田2015)。大洲市長浜町青島では海軍関連の境界標柱が4本確認されている(多田・藤本・増田2018)。

3 遺物

戦時中の遺物のひとつに統制陶器がある。この統制陶器については桃井勝氏や萩谷茂行氏・舟橋健氏らによって研究が進められ、特に岐阜県陶磁器工業組合連合会に保存されていた史料により、同組合に所属していた生産窯・生産者までが判明している(桃井編1999、桃井・萩谷・舟橋2010など)。

愛媛県関連の統制陶器として伊予陶磁器工業組合(昭和19(1944)年に伊予陶磁器工業統制組合へ移行)の製品が挙げられる。沖縄県でスンカンマカイと呼ばれる碗が数多く確認されており、これらの碗の高台内には同組合の統制番号(組合記号+工場番号)が確認できるものがある。1990年代以降、沖縄県を中心にスンカンマカイに関する研究が進められてきた(下地1994など)。管見の限り、スンカンマカイが砥部焼の碗としたのは宮城篤正氏の報告が最初であろう(宮城1978)。

愛媛県内では2011(平成23)年に『板島城跡』(愛媛県埋文2011)で同組合製品が報告されたのを契機として(写真5)、近年では報告事例が増加しつつあり、三机監視哨からはスンカンマカイも採集されている(多田・藤本2020)。石岡ひとみ氏は伊予陶磁器工業組合の生産窯を実物資料から推定し、『番号は「2、5、8、10、11、13」が存在する』(石岡2016b)とした。多田氏は県内で確認できた統制陶器19例を集成し、そのうち9例の同組合製品を報告している(多田2017a)。これまで

同組合製品の記号は「○ト」や「丸内にト」と呼称し、砥部の「ト」と考えられてきたが、藤本は四国や沖縄県の発掘調査報告書を中心に集成し、○の上下が途切れていること、組合名が「伊予陶磁器工業(統制)組合」であることから、「○ト」ではなく伊予のカタカナ表記「イヨ」を変形・図案化したものとした(多田・藤本2020)。十亀幸雄氏は他地域の事例を参考に、組合の頭文字である漢字一字の「伊」を意匠化した文字と考えている(十亀2022)。榎林啓介氏は台湾での調査により、新たに番号「6」を確認した。この番号の製品は製作技法から台湾産(北投焼)の可能性を指摘している(榎林2025a・2025b)。このように近年では生産地側でも研究が進展を見せているものの資料数は今もなお少なく、今後は資料数のさらなる増加と、岐阜県のように生産窯・生産者を記録した史料の発見が望まれる。

愛媛大学 四国遍路・世界の巡礼研究センターが実施した「四国遍路と霊場」調査や愛媛県教育委員会による四国八十八箇所霊場詳細調査において、セメント製や統制陶器の仏具が確認されている(石岡2015b・角南2019ほか)。これらは昭和16(1941)年の金属類回収令によって供出された金属製仏具の代用品である。

西宇和郡伊方町では佐田岬灯台公園周辺の整備工事中に、御籠島砲台跡の大砲の車軸部品などが発見され(愛媛新聞2016年6月23日7面)、大砲等のレプリカが設置されている。

松山市御幸の愛媛大学御幸団地構内遺跡からは、手榴弾・模擬弾(鉄製・ゴム製)・薬莢・銃部品の破片が出土している(愛媛大学先端研究・学術推進機構埋蔵文化財調査室 2022)。

4 研究会・シンポジウム・博物館展示など

2010(平成22)年より、戦争遺跡保存四国シンポジウムが四国各県の持ち回りで実施され、各県の戦争遺跡見学(フィールドワーク)や調査事例の報告などが行われている(池田2010など)。



写真6 戦争遺跡見学



写真7 シンポジウム



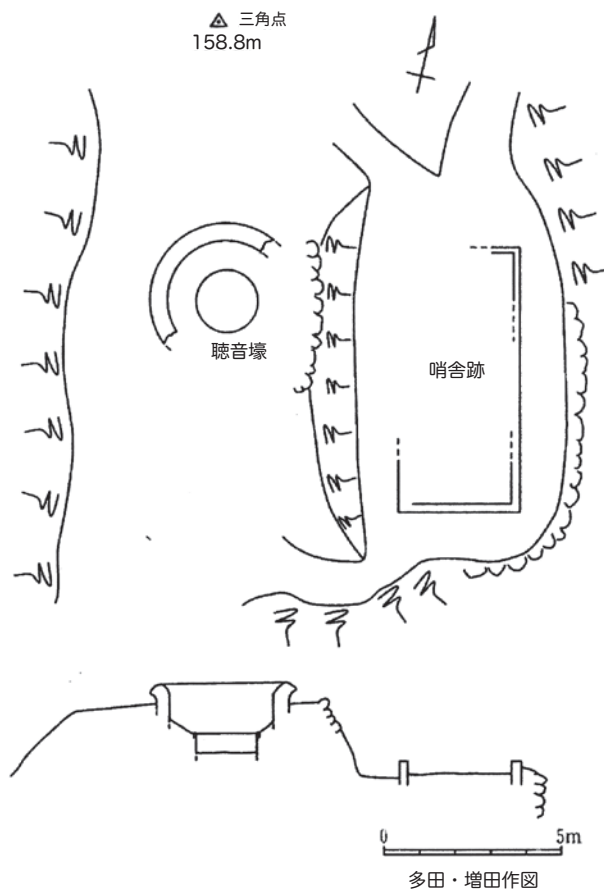
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 2011
『板島城跡』より

写真5 板島城跡出土統制陶器(縮尺任意)

2025(令和7)年までに11回の開催を数え、そのうち愛媛県では今治市(2011(平成23)年・第2回)、西宇和郡伊方町・八幡浜市(2013(平成25)年・第4回、写真6)、松山市(2018(平成30)年・第8回)、西条市(2024(令和6)年・第11回、写真7)で実施されている。

愛媛県歴史文化博物館や愛媛大学ミュージアム・各市町の展示施設などでは、戦争や戦争遺跡に関する展示が実施されている(愛媛県歴史文化博物館2008など)。1978(昭和53)年11月に南宇和郡愛南町久良湾で地元ダイバーにより発見された紫電改は翌年7月に引き揚げられ、1980(昭和55)年に紫電改展示館で展示された。この展示館や実機の老朽化に伴う紫電改の機体調査(愛媛県2024)によると、展示館建て替え・実機移設に多額の費用が必要となり、ふるさと納税型クラウドファンディングが実施された(愛媛県2025a)。第一目標金額1,000万円のところ最終的には8,000万円を超える寄付があり、関心の高さがうかがえる結果となった(愛媛県2025b)。またこの紫電改は2025(令和7)年7月25日に重要航空遺産((一財)日本航空協会)に認定されている。

これらの他、戦争を体験された方々の体験談や証言などを後世に残し伝える方法として、インターネット上での公開も行われている(Yahoo! JAPAN(<https://wararchive.yahoo.co.jp/>)・みたかデジタル平和資料館(<https://www.city.mitaka.lg.jp/heiwa/>)など)。



日振島監視哨 聴音壕
(Agisoft Metashape による写真合成・縮尺任意)

日振島監視哨 遺構分布略測図(多田2024eより)

図2 日振島監視哨 遺構分布略測図と聴音壕写真

5 おわりに

愛媛県における戦争遺跡調査の主な動向について概観した。県内では池田宏信氏や竹中義顕氏などによる史資料調査(文献史的調査)が先行していたが(池田2001・愛媛新聞2018年10月8日ほか)、近年では多田氏や山本氏などによる地道な現地調査(考古学的調査)も進められ、成果をあげている。戦時中の遺跡についてはその性格上、所在地さえ分かっていない遺跡が多数あると考えられる。また崩壊や開発行為によりこれまで記録されないまま姿を消した遺跡も少なくないだろう(愛媛新聞2024年9月24日3面)。

図2は宇和島市日振島に所在する日振島監視哨の遺構分布略測図(多田2024e)と聴音壕の写真である。筆者も踏査に同行し、現地では略測図作成と写真撮影を実施、後日写真を合成した。近年の三次元計測技術の発達により比較的手軽に写真合成が可能となり、コンクリート表面の状態(ヒビ割れや劣化具合)を記録することができる。このように略測図作成と三次元計測は現状把握に有効な手段であると考えられ、方位やスケール管理などをすればより正確な記録となる。2024(令和6)年8月には『近世・近代の埋蔵文化財保護について(報告)』として、近世・近代遺跡の保護に関する考え方や指針が示された(埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会2024)。まずは県内の現状把握から始めることが急務であろう。

今回の報告をまとめるにあたって、下記の方々に情報提供・資料提供など多大な御協力をいただきました。記して感謝申し上げます。また筆者も同行した防空監視哨踏査においても各市町教育委員会をはじめ、たくさんの方々・関係者にお世話になりました。

石岡ひとみ 鷗久森 彬 織田浩史 高嶋賢二 多田 仁 藤本吉信 増田晴美 山本達也
(五十音順・敬称略)

引用・参考文献(表1の文献番号と対応)

- 1.宮城篤正 1978「琉球の呉須絵—いわゆる琉球染付について—」『沖縄県立博物館紀要』第4号、沖縄県立博物館
- 2.愛媛県教育委員会 1979『東野遺跡埋蔵文化財調査報告書』
- 3.当真嗣一 1984「戦跡考古学のすすめ」『南島考古だより』第30号(反核考古学研究者の会編1989『戦争と平和と考古学』)
- 4.瑞浪陶磁資料館 1985『特別展 戦時下の陶磁器代用品』図録
- 5.佐久間信編 1987「特集・現代史と考古学」『月刊 考古学ジャーナル』No.278、ニュー・サイエンス社
- 6.南海日日新聞 1987「戦争、その日… 栗野浦防空監視所①～⑧」第1801(8月15日)・1802(8月18日)・1804(8月22日)・1805(8月25日)・1807(8月29日)・1808(9月1日)・1809(9月3日)・1810(9月5日)号、南海日日新聞社
- 7.(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1989「V.祝谷第三調査区」『一般県道「菅沢—松山線」埋蔵文化財調査報告書I』
- 8.(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1993『一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書I 松環古照遺跡』
- 9.瀬戸市歴史民俗資料館 1994『特別展「戦争とやきもの」』

表1 愛媛県戦争遺跡関連年表

(1/18)

年	月	遺跡名	所在地・場所	主体	内容	研究会・シンポジウム	博物館展示	出版物等(報告書・研究論文・書籍・新聞報道等)		文献
								愛媛県関連	愛媛県外	
1945	昭和20	8			終戦					
1975	昭和50	8			戦後30年					
		3		沖繩県立博物館	祇部焼の腕(スシカ ンマカイ)			宮城篤正「琉球の呉須絵—いわ ゆる琉球染付について—」『沖 縄県立博物館紀要』第4号		1
1978	昭和53	4	松山市	愛媛県教委	満州移民農兵隊兵 舎跡の調査					
		11	南宇和郡 愛南町		久良湾で地元ダイ バーにより「紫電 改」発見					
		3	松山市	愛媛県教委	報告書刊行・統制 陶器井?			愛媛県教委『東野遺跡埋蔵文化 財調査報告書』		2
1979	昭和54	7	南宇和郡 愛南町	愛媛県	前年発見された 「紫電改」を引き 揚げ					
1980	昭和55	5	南宇和郡 愛南町				紫電改展示館 オープン			
1984	昭和59								当真嗣一「戦跡考古学のす め」『南島考古だより』第30号 (1989「戦争と平和と考古学」反 核考古学研究者の会)	3
1985	昭和60	11	岐阜県 瑞浪市	瑞浪陶磁 資料館	戦後40年		特別展「戦時下 の陶磁器代用 品」			4
1985?	昭和60?		松山市	愛媛県埋文	焼夷弾出土					
		6								
1987	昭和62	8	八幡浜市					南海日日新聞「戦争、その日… 栗野浦防空監視所①～⑧」		5
		11	松山市	松山市埋文	第二次大戦中の高 射砲跡や野壕					6
1988	昭和63	6	松山市	愛媛県埋文	防空壕1基					
1989	平成元	3	松山市	愛媛県埋文	報告書刊行			(財)愛媛埋文「V.祝谷第三調 査区」『一般県道「菅沢—松山 線」埋蔵文化財調査報告書I』		7
1993	平成5	3	松山市	愛媛県埋文	報告書刊行			(財)愛媛埋文「一般国道196号 松山環状線埋蔵文化財発掘調査 報告書I 松環古照遺跡』		8
1994	平成6	8	愛知県 瀬戸市	瀬戸市歴史 民俗資料館	統制番号(「瀬 788」・「品89」・ 「岐619」・「信 185」)		特別展「戦争と やきもの」			9

年	月	遺跡名	所在地・場所	主体	内容	研究会・シンポジウム	博物館展示	出版物等(報告書・研究論文・書籍・新聞報道等)		文献
								愛媛県関連	愛媛県外	
1994	平成6	8						伊藤厚史「負の文化財—戦争遺跡の重要性—」『文化財学論集』	10	
								下地安広「沖繩の遺跡から出土する近代磁器—浦添の遺跡を中心に—」『南島考古』第14号	11	
1995	平成7	3	松山市	松山市埋文	報告書刊行			(財)松山市埋文「大峰ヶ台遺跡—第4次調査—」	12	
		4						文化庁文化財保護部記念物課「近代の遺跡の保護について—史跡名勝天然記念物指定基準一部改正—」『月刊文化財』4、379号	13	
1996	平成8	6	松山市	愛媛県埋文	防空壕2基					
		8			戦後50年 練兵場時代の野 壕、演習用葉莖が 出土					
1998	平成10	5	松山市	愛媛大学	集束焼夷弾部品(弾 頭ハラスト)出土					
		6	今治市	今治市教委	陸軍第22連隊関連 遺構や陶磁器・機 関銃葉莖が出土					
1999	平成11	9						五十嵐彰・阪本宏児「近現代考古学の現状と課題—「新しい時代の」考古学をめぐって—」『考古学研究』第43巻第2号	14	
		11	松山市	愛媛県埋文				(財)愛媛県埋文「岩子山西麓遺跡」『斎院・古照』	15	
1999	平成11	3	松山市	愛媛県埋文	報告書刊行			今治市教委「別宮上河内遺跡」	16	
		10	今治市	今治市教委	報告書刊行	日本考古学協会 1998年度沖繩大会 第5分科会「戦争・ 戦跡の考古学」				
1999	平成11	12	松山市	愛媛大学	野壕から青銅製銃 弾・葉莖、ベルト 金具が出土					
		3	岐阜県 土岐市					桃井勝編「51 生産者別標示記号(統制番号)」『土岐津町誌 史料編』	17	

年	月	遺跡名	所在地・場所	主体	内容	研究会・シンポジウム	博物館展示	出版物等(報告書・研究論文・書籍・新聞報道等)		文献
								愛媛県関連	愛媛県外	
1999	平成11	3	東京都目黒区	東京大学					堀内秀樹「3.「統制番号」のついた陶磁器について」『東京大学駒場構内遺跡 大学院数理学研究科Ⅱ期棟地点 発掘調査報告』	18
2000	平成12	2	松山市	愛媛大学	練兵場時代の塹壕、青銅製銃弾・薬莖・軍刀吊り金具が出土				(財)愛媛県埋文『史跡「松山城跡」内 県民館跡地』	20
2001	平成13	4	松山市	松山市埋文	第2次世界大戦中の陸軍松山西飛行場に関連する塹壕				池田宏信「翔べなかつた少年兵・松山海軍航空隊始末記」	22
2001	平成13	11	松山市	松山市埋文	第2次世界大戦中の陸軍松山西飛行場に関連する塹壕				宮城弘樹「いわゆるスンカンマカイについて」『壺屋焼物博物館紀要』第3号	23
2002	平成14	6	松山市	愛媛大学	練兵場時代の土管・銃弾薬莖が出土				十菱駿武・菊池実編『しらべる戦争遺跡の事典』	24
2003	平成15	3	今治市	今治市教委	焼夷弾2発出土				下地安広「沖繩の遺跡から出土する統制経済下の磁器」『南島考古』第21号	25
2005	平成17	1							(財)えひめ地域政策研究センター編「その他」『愛媛温故紀行 明治・大正・昭和の建造物』	26
2005	平成17	1							十菱駿武・菊池実編『続しらべる戦争遺跡の事典』	28

年	月	遺跡名	所在地・場所	主体	内容	研究会・シンポジウム	博物館展示	出版物等(報告書・研究論文・書籍・新聞報道等)		文献
								愛媛県関連	愛媛県外	
2005	3	文京遺跡20次調査	松山市	愛媛大学	報告書刊行			愛媛大埋文調査室「文京遺跡20次調査」『文京遺跡Ⅳ』		29
	8				戦後60年			池田宏信「昭和二〇年八月、愛媛の本土決戦準備始末―防衛庁戦史部所蔵史料からみる陸海軍部隊の配備と現存する戦争遺跡」		30
									今治明德高等学校分枝平和学習実行委員会編「米軍資料から読み解く愛媛の空襲」	
2006	6		佐賀県西松浦郡有田町	佐賀県立九州陶磁文化館					『近現代肥前陶磁銘款集』	32
2007	3	松山城東郭跡	松山市	松山市埋文	松山空襲(昭和20年7月26日)の痕跡(焼土層)					
		文京遺跡18次調査	松山市	愛媛大学	報告書刊行			愛媛大埋文調査室「文京遺跡18次調査」『文京遺跡Ⅴ』		33
	4							春野公麻呂「ロンブ・ブックス郷土ガイドシリーズ③ 四国の戦争遺跡ハイキング 帝国陸海軍ノ残影ヲ探訪ス」		34
2008	8	松山城三之丸跡7次調査	松山市	松山市埋文	陸軍第22連隊兵舎跡・陸軍航空機搭載機関銃					
	2	北井門遺跡2次調査	松山市	愛媛県埋文	陶製ボタン(金属ボタンの代用品)などが出土					
	6		岐阜県多治見市	岐阜県陶磁資料館				萩谷コレクション 全国の戦時中のやきもの特別展「愛媛と戦争～伝えたい戦争の記憶・平和な未来へ～」		35
2009	7		西予市宇和町	愛媛県歴史博						36
	3	久米高畑遺跡47次・51次調査	松山市	松山市埋文	報告書刊行			(財)松山市埋文「久米高畑遺跡47次調査」「久米高畑遺跡51次調査」「史跡久米官衛遺跡群調査報告書3』		37
	7	板島城跡	宇和島市	愛媛県埋文	統制陶器皿(「〇ト5」)が出土					

年	月	遺跡名	所在地・場所	主体	内容	研究会・シンポジウム	博物館展示	出版物等(報告書・研究論文・書籍・新聞報道等)		文献
								愛媛県関連		
2009	平成21 7	愛媛大学御幸 団地構内遺跡 1次調査	松山市	愛媛大学	手榴弾3個・鉄製模 擬手榴弾約110個・ ゴム製模擬手榴弾 約30個・葉莢・銃 部品などが出土。 愛媛県青年師範学 校もしくは愛媛県 立青年学校教員養 成所の頃に埋めら れた可能性。					
								愛媛新聞「旧陸軍の標石撤去 松山市の城山公園整備事業」		
2010	平成22 3	高地栗谷 1号墳	今治市	今治市教委	城山公園(堀之内)整 備工事に伴い陸軍 境界標石を撤去			今治市教委「高地栗谷1号墳」		38
								桃井 勝・萩谷茂行・舟橋 健「伝 世品にみる戦時中の美濃焼～産 地と製品傾向～」『瑞浪市陶磁 資料館 研究紀要』第13号		
2010	平成22 5		高知県 南国市	瑞浪市陶磁 資料館		第1回「戦争遺跡保 存ネットワーク四 国」シンポジウム ・池田宏信「愛媛 の戦争遺跡につい て」				40
								愛媛新聞「戦争遺跡保存進まず 動き鈍い県や市町」 多田 仁・藤本清志「第8章 近 代」『紀要愛媛』第9号		
	7			愛媛県埋文 宇和島市 教委	統制陶器碗(「〇ト 5」)が出土。 報告書刊行・統制 陶器皿(「〇ト5」)					42
								(財)愛媛県埋文「板島城跡」		
	1	吉田藩陣屋跡	宇和島市 吉田町	愛媛県埋文						43
	3	板島城跡	宇和島市	愛媛県埋文						44
2011	平成23 5		今治市		第2回「戦争遺跡保 存ネットワーク四 国」シンポジウム ・フィールドワー ク「陸軍芸予要 塞」 ・大成経凡「小島 の陸軍芸予要塞が 保存された背景」					45・ 46
								「特集 戦争と慰霊の考古学」 『季刊考古学』第116号		
	8									47

年	月	遺跡名	所在地・場所	主体	内容	研究会・シンポジウム	博物館展示	出版物等(報告書・研究論文・書籍・新聞報道等)		文献
								愛媛県関連	愛媛県外	
2011	平成23	11	岐阜県 瑞浪市	瑞浪市陶磁 資料館			特別展「番号の 付されたやきもの の-戦時下の瑞 浪窯業生産-」 企画展「瀬戸・ 美濃の近代-生 産と流通-」	出版物等(報告書・研究論文・書籍・新聞報道等) 愛媛県関連		48
2012	平成24	3	伊予市	宇和島市文化 振興財団	壱塚を発見 統制陶器皿(「〇ト 5」酸化クロム印・ 東亜製陶所) 報告書刊行・統制 陶器碗(「〇ト5」)	第3回「戦争遺跡保 存ネットワーク四 国」シンポジウム ・池田宏信「陸軍 松山西飛行場の歴 史について」 ・多田仁「久米陸 軍飛行場の考古学 的調査」	石岡ひとみ「伊予市三島焼の歴 史と製品に関する一考察」『伊 予市の歴史文化』第66号 宇和島市教委「吉田藩陣屋跡」 『宇和島市内遺跡調査報告書 IV』			53・ 54
2013	平成25	7	今治市	今治市教委	戦災ガレキ層を検 出 報告書刊行			(公財)愛媛県埋文「北井門遺跡2 次調査」		55
2013	平成25	3		愛媛県教委	防空壕・要塞・壱 塚・砲台・掩体・貯 兵舎・司令塔・貯 水施設・奉安殿 伊予陶磁器工業組 合・(株)梅野精陶所			(公財)えひめ地域政策研究セン ター編「第3章 第6節 軍事・戦 時遺産」『愛媛県の近代化遺産 -近代化えひめ歴史遺産総合調 査報告書-』愛媛県教委文化財 保護課 秋谷成行「統制経済下における 陶磁器製品製造、流通の一考察 〜いわゆる「統制番号」に関す る検証〜」『瑞浪市歴史資料 集』第2集		56

年	月	遺跡名	所在地・場所	主体	内容	研究会・シンポジウム	博物館展示	出版物等(報告書・研究論文・書籍・新聞報道等)		文献						
								愛媛県関連	愛媛県外							
2013	平成25	5	西宇和郡 伊方町 八幡浜市			研究会・シンポジウム 第4回「戦争遺跡保存ネットワーク四国」シンポジウム・フィールドワーク「佐田岬要塞」・山根龍司「伊方町正野地区に残る豊予要塞史跡」			愛媛県関連	59						
											10	えひめ地域政策研究センター	(公財)えひめ地域政策研究センター編『えひめの近代化遺産～続・愛媛温故紀行 明治・大正・昭和の建造物を訪ねて～』 今治市教委「6地点 学校統廃合による新校舎建設計画に伴う試掘調査」『市内遺跡試掘確認調査報告書(平成24年度 市公共事業に伴う調査)』	60		
															3	今治市教委 報告書刊行
2014	平成26	5	高知県 南国市			研究会・シンポジウム 第5回「戦争遺跡保存ネットワーク四国」シンポジウム・岡崎直司「愛媛県内の奉安殿」				62						
											9	八幡浜第一防空壕	愛媛新聞「八幡浜 四国初の本格的防空壕 立体計測で詳細判明」 石岡ひとみ「窯跡資料にみる伊予市三島焼の製品」『伊予市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ』伊予市教委	63		
															3	(太山寺)
2015	平成27	3	松山市		統制陶器の仏具(香炉・華瓶)、三重県万古焼・岐阜県美濃焼、金属供出に關わる古写真(昭和19年5月4日)	愛媛大学 法文学部 日本史 研究室			石岡ひとみ「太山寺の工芸品」胡光編『2014年度四国遍路と霊場研究1 四国霊場第五十二番札所太山寺総合調査報告書(1)』愛媛大学法文学部日本史研究室	65						
											4	南日吉高堤遺跡	岐阜県 瑞浪市	瑞浪市陶磁資料館	舟橋健「番号の付けられたやきもの～紀年銘のある製品と瑞浪の製品にみられる特徴～」『瑞浪市歴史資料集』第3集	66

年	月	遺跡名	所在地・場所	主体	内容	研究会・シンポジウム	博物館展示	出版物等(報告書・研究論文・書籍・新聞報道等)		文献
								愛媛県内	愛媛県外	
2015	5				スキャンマカイ・高台内の印(「〇ト」)			安斎英介・上原千明「沖繩の遺跡から出土する近代の本土産磁器について—スキャンマカイと統制番号を有する資料を中心に—」『南島考古』第34号	68	
			徳島県鳴門市			第6回「戦争遺跡保存ネットワーク四国」シンポジウム				
	8		松山市	愛媛大学ミュージアム				調査成果速報展「文京遺跡の解明Ⅱ 戦争の記憶」		
		南江戸上沖遺跡1次調査	松山市	松山市埋文	焼夷弾出土(SE13(SK9))					
	10		松山市	愛媛県文化振興財団	戦後70年				多田仁「松山の戦争遺跡—戦争遺跡の発掘とその未来を探る—」『文化愛媛』第75号	69
2016	1		松山市	松山市埋文	南吉田町の航空機用有蓋掩体(掩体壕)の確認調査					
			松山市		陶器製香炉(「万76」の押印)・陶器製華瓶(「万1」の押印)・金属供出に關わる古写真(昭和19年5月4日)			石岡ひとみ「埋もれた資料に光を—近代のやきものは歴史を語る—」四国ミュージアム研究会編『もつと博物館が好きっ!—みんなと歩む学芸員—』	70	
	3		松山市		伊予陶磁器工業組合(「〇ト」)の生産窯を推定。番号「2、5、8、10、11、13」が存在。2と13は梅野製陶所と梅野鶴市製陶工場・5と8は伊予市三島焼の東軍製陶所か伊予窯業株式会社・11は砥部陶業株式会社と推定。			石岡ひとみ「近世・近代における砥部焼磁器の製品と流通について」『中近世陶磁器の考古学』第二巻、雄山閣	71	
			西宇和郡伊方町	別府大学				別府大学史学研究会戦史研究室「豊予要塞—忘れられた巨大要塞—」『史学論叢』第46号	72	
	5		南宇和郡愛南町		統制陶器(「岐156・1050」)・ガラス製品・金属製品など			多田仁・増田晴美「由良崎防備所跡の採集遺物—愛媛県南宇和郡愛南町における戦争遺物—」『紀要愛媛』第12号	73	

年	月	遺跡名	所在地・場所	主体	内容	研究会・シンポジウム	博物館展示	出版物等(報告書・研究論文・書籍・新聞報道等)		文献
								愛媛県関連	愛媛県外	
2016	5	御籠島砲台跡	西宇和郡 伊方町	伊方町	佐田岬灯台公園周 辺の整備工事中 に、御籠島砲台跡 の大砲(三八式十二 糎榴弾砲)の車軸部 品などを発見。砲 台跡内部の三次元 計測。			愛媛新聞「砲台跡から大砲一部 佐田岬の御籠島 車軸など50 点」		74
					香川県 丸亀市		第7回「戦争遺跡保 存ネットワーク四 国」シンポジウム			
	12		松山市	松山市埋文 報告書刊行				松山市教委・(公財)松山市埋文 「航空機有蓋掩体確認調査」 「松山市埋蔵文化財調査年報 28」		75
2017	3	御籠島砲台跡	西宇和郡 伊方町	瑞浪市陶磁 資料館	大砲等レプリカ設 置				萩谷茂行「陶磁器代用品の誕生 と発展」『瑞浪市歴史資料集』 第4集	76
				伊方町						
	6		愛媛県埋文	愛媛県内の統制陶 器を集成(「岐24・ 156・264・396・ 438・1050」・「有 45」・「〇ト2・ 5・8・11・13」)				多田 仁「愛媛の統制陶器」『紀 要愛媛』第13号		77
7			西予市 宇和町	愛媛県歴史博			テーマ展「戦 時下に生きた 人々」			
2018	1	宇和島城跡	宇和島市	宇和島市 教委	統制陶器皿(「岐 1010」)が出土			愛媛新聞「戦争の記憶 ネットに ヤフー 資料や証言映像公開」	Yahoo!JAPAN「未来に残す 戦争の記憶」https://wararchive. yahoo.co.jp/	78・ 79
					高知県 高知市		第21回戦争・遺跡保 存全国シンポジウ ム高知大会ポス ターセッション ・多田 仁「福浦19 番監視哨の現況 愛媛県南宇和郡愛 南町における防空 監視哨の一例」			
平成30			宇和島市							

年	月	遺跡名	所在地・場所	主体	内容	研究会・シンポジウム	博物館展示	出版物等(報告書・研究論文・書籍・新聞報道等)		
								愛媛県関連	文献	
2018	平成30	12番伊方 監視哨	西条郡 伊方町	伊方町 町見郷土館	遺構測量図・採集 遺物(統制陶器)「岐 33・74・468・ 941(○許)・993・ 1070など」・「瀬 632」・「○ト 2」・「□青)など・ 行政資料・証言	多田 仁・高嶋賢二「12番伊方監 視哨の遺構と遺物」『伊方町 町見郷土館 研究紀要』第4号			81	
					愛媛大学法 文学部付属 四国遍路・ 世界の巡礼 研究 センター					石岡ひとみ「久妙寺所蔵の工芸 品について」胡光編『四国遍路 と霊場研究4 四国番外霊場久妙 寺総合調査報告書』
		3	西条市 丹原町		セメント製仏具(瀬 燭立(岐阜製))		多田 仁「内子監視哨の記録」 『郷土うちこ』36号			82
			喜多郡 内子町		遺構測量図・採集 遺物(統制陶器)「岐 85・94・247・ 358・406」・「瀬 646」など・証言		多田 仁・藤本清志・増田晴美 「青島における戦争遺跡の踏 査」『長濱史談』第42号			83
5		青島防備所	大洲市 長浜町青島		関連遺構・境界標 柱4本・遺物(磁器 碗・陶器酒樽)・文 献史料				84	
		掩体壕	松山市	松山市	南吉田町の掩体壕1 基が松山市有形文 化財に指定					
6		六番岩松 監視哨	宇和島市 津島町		遺構測量図・採 集遺物(統制陶器 (「品?」)・「東陽 軒平八製」など)・ 証言				多田 仁「六番岩松監視哨の記 録」『よど』第19号	85
			松山市		第8回「戦争遺跡保 存ネットワーク四 国」シンポジウム ・フイールドワー ク「掩体壕・隧道 壕跡・石碑等の見 学」 ・池田宏信「松山 海軍航空基地・松 山海軍航空隊の戦 争遺跡」 ・多田 仁「愛媛に おける防空監視哨 の遺構と遺物」			86・ 87		

年	月	遺跡名	所在地・場所	主体	内容	研究会・シンポジウム	博物館展示	出版物等(報告書・研究論文・書籍・新聞報道等)		文献
								愛媛県関連	愛媛県外	
2018	6		南宇和郡 愛南町	愛南町			みたかデジタル 平和資料館 https://www.city.mitakalg.jp/heiwa/	愛南町町史編纂委員会編『愛南町史』	愛媛新聞「戦争体験 デジタルで継承 行政や民間 証言や写真 若い世代に ネット公開の試みも」	88・89・90
								織田浩史「歴史編 第7章近代第7節戦時下の南宇和郡」 池田宏信「研究編 戦時下、南宇和郡に設置された軍施設と軍部隊について」		91
	平成30			東京都 三鷹市						
2019	8		松山市			第48回空襲・戦災を記録する会全国連絡会議・松山大		愛媛新聞「秘匿飛行場 写真発見 東温の重信川沿い、海軍が戦時中造成」		92
								奈良県立 奈良市	愛媛新聞「奈良県立図書館情報館に専門文庫 写真・手記 5万8000点所蔵 戦争体験 資料が語る」	93
								今治市	今治市教委「南日吉高堤遺跡・上徳居屋敷遺跡」	94
平成31	3	南日吉高堤 遺跡	西宇和郡 伊方町	今治市教委	報告書刊行 遺構測量図・採集 遺物(瓦(「伊予製瓦 組合」))・証言・史料 統制陶器(「岐 267・1075」・「有 115(防15)」・「信 17」・「名陶」・ 「〇ト5」・「〇 許」)など			多田 仁・高嶋賢二「三崎監視哨の記録」『伊方町 町見郷土館 研究紀要』第5号		95
								伊方町 町見郷土館	多田 仁「町見郷土館所蔵の戦争関係陶磁器」『伊方町 町見郷土館 研究紀要』第5号	96
								伊方町 町見郷土館	多田 仁「愛媛県南宇和郡愛南町柏採集の近代遺物」『愛媛考古学』第23号	97
平成31	3	(明石寺)	西予市 宇和町	愛媛県教委	統制陶器(陶製燭台 (「〇万103」))・ セメント製仏具(華 瓶・燭台)			角南聡一郎「第4章 3-4工芸 (1)明石寺の工芸⑥統制陶器・代用仏具」愛媛県教委編『四国八十八箇所霊場詳細調査報告書 第43巻 番札所 明石寺』		98
								多田 仁「愛媛県南宇和郡愛南町柏採集の近代遺物」『愛媛考古学』第23号	99	

年	月	遺跡名	所在地・場所	主体	内容	研究会・シンポジウム	博物館展示	出版物等(報告書・研究論文・書籍・新聞報道等)					
								愛媛県関連	愛媛県外				
2019	平成31	十九番福浦監視哨	南宇和郡 愛南町		遺構測量図・採集遺物(統制陶器(「岐89・394・427」・「有48」・「信17」)・「硬質陶器」・「東陽軒平八製」)			多田 仁「十九番福浦監視哨の記録―遺構・遺物編―」『愛媛考古学』第23号	100				
										大洲市 長浜町	遺構測量図・採集遺物(坩堝・煉瓦)・証言・史料	多田 仁「長浜監視哨の記録」『長濱史談』第43号	101
	5	東外海監視哨	南宇和郡 愛南町		遺構測量図・採集遺物(統制陶器(「岐74」・「品3」)など)・証言・史料			多田 仁・藤本清志・増田晴美「愛媛県南宇和郡愛南町の東外海監視哨について」『紀要愛媛』第15号	103				
										南宇和郡 愛南町		多田 仁「十九番福浦監視哨の記録―証言・史料編―」『よど』第20号	104
令和元	6	十九番福浦監視哨	香川県 観音寺市		第9回「戦争遺跡保存ネットワーク四国」シンポジウム・多田 仁「愛媛における防空監視哨の遺構と遺物2」		沖縄県立埋蔵文化財センター埋文コレクション(まいコレ)Vol.30「国民食器」	https://www.pref.okinawa.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/009/690/image30.pdf	106				
										沖縄県 中頭郡 西原町	スキャンマカイ・「〇ト」	愛媛新聞「1945.7.26 松山大空襲 戦争の惨禍 鮮明に」https://www.ehime-np.co.jp/online/news/matsuyama_air_raid/top.html	107
2020	令和2	東垣生八反地遺跡6次 長浜監視哨	松山市 大洲市 長浜町	松山市埋文 破片爆弾出土 史料・証言				多田 仁「長浜監視哨の記録2」『長濱史談』第44号	109				

年	月	遺跡名	所在地・場所	主体	内容	研究会・シンポジウム	博物館展示	出版物等(報告書・研究論文・書籍・新聞報道等)		文献	
								愛媛県関連	愛媛県外		
2020	5	八幡浜監視哨	八幡浜市		遺構測量図・採集遺物(陶磁器・焔炉・ガラス製品など)・遺品・史料			多田 仁「八幡浜監視哨の記録」『紀要愛媛』第16号		110	
								多田 仁「宇和島防空監視隊の記録」『よど』第21号		111	
	6	掩体壕	松山市		保存・修理工事に伴う確認調査						
	7	七番今治監視哨	今治市		証言			多田 仁「七番今治監視哨の記録」『今治史談』No.26		112	
	8	壬生川監視哨	西条市		証言・史料			多田 仁「壬生川監視哨の記録」『東予史談』第22号		113	
	令和2		三机監視哨	西宇和郡伊方町	伊方町町見郷土館	採集遺物(統制陶器「岐74・119・429・947」・「イヨ2・5」)・碗(オリンピック五輪マーク)・瓦(伊予製瓦組合)・伊予陶磁器工業(統制組合)の統制陶器を集成、「○ト」→「イヨ」か?		テーマ展「戦後75年 伝えたい10代の記憶」	多田 仁・藤本清志「三机監視哨の記録」『伊方町町見郷土館研究紀要』第6号		114
									多田 仁「内海監視哨の記録」『愛媛考古学』第24号		115
	2021	3	天ヶ森城跡(岩松監視哨)・宇和島城跡	宇和島市	宇和島市教委	報告書刊行。統制陶器皿(「岐1010」)が出土			宇和島市教委「天ヶ森城跡(岩松監視哨跡)」『宇和島城跡』「宇和島市内遺跡調査報告書XI」		116
多田 仁「十四番上灘監視哨の記録」『伊予市の歴史文化』第75号										117	
令和3			(浄土寺)	松山市	愛媛県教委	陶器製仏具(燗燭立・香炉・華瓶(「〇万158」))・古文書(伊物台帳)史料			石岡ひとみ「第4章第3節工芸(3)陶器製仏具」愛媛県教委編『四国八十八箇所霊場詳細調査報告書 第49巻 浄土寺』		118
									多田 仁「六番岩松監視哨の記録2」『よど』第22号		119

年	月	遺跡名	所在地・場所	主体	内容	研究会・シンポジウム	博物館展示	出版物等(報告書・研究論文・書籍・新聞報道等)		文献	
								愛媛県内	愛媛県外		
2021	令和3	南江戸上沖遺跡1次調査	松山市	松山市埋文	報告書刊行			(公財)松山市埋文「南江戸上沖遺跡」1次・2次調査―』		120	
			大分県宇佐市	豊の国宇佐市壘				愛媛新聞「終戦後・海軍松山飛行場 軍機焼却の映像発掘」		121	
	12	松山市	松山市	報告書刊行				松山市教委・(公財)松山市埋文「掩体壕確認調査」『松山市埋文文化財調査年報 33』		122	
2022	令和4	大浜防空壕	今治市	今治市教委	民間防空壕9基の測量調査。統制陶器(「瀬272」・「岐48」)、金属・ガラス製品など						
			伊予郡砥部町三角		統制陶器(「伊11」)・「〇ト」→「伊」				十亀幸雄「江戸・明治期砥部陶磁器窯址(4)伊予陶磁器工業統制組合の統制陶器―砥部町三角組の伊11を中心に―」『いせきニューズレター』第160号		123
			宇和島市	宇和島市教委					宇和島市教委「宇和島監視哨跡」『宇和島海軍航空隊弾薬庫跡』『宇和島市内遺跡調査報告書XII』		124
			上浮穴郡久万高原町	愛媛県教委	代用陶器(飯食器・線香立)・コンクリート製仏具(花瓶)				角南聡一郎「第4章 第3節 (2)工芸⑤金属代用品」愛媛県教委編『四国八十八箇所霊場詳細調査報告書 第44番札所 大寶寺』		125
			南宇和郡愛南町		採集遺物(磁器・ガラス製品・瓦)・証言				多田 仁「平城監視哨の記録」『よど』第23号		126
			松山市		史料				多田 仁「六番松山監視哨の記録」『伊予史談』406号		127
			上浮穴郡久万高原町		遺構測量図・採集遺物(統制陶器(「岐498」)・ガラス製品)・史料				多田 仁「久万監視哨の記録」『愛媛考古学』第26号		128
			西予市宇和町	宇和民具館					企画展「戦時下の子どもたち」		
			松山市	愛媛大学	報告書刊行				愛媛大学先端研究・学術推進機構埋蔵文化財調査室『愛媛大学御幸団地構内遺跡1次調査』		129
			今治市波方町		測量図(規正標柱・水尺)				山本達也「愛媛の軍事遺跡1―芸予要塞来島砲台群の規正標柱と水尺について―」『軍装操典』第150号		130

年	月	遺跡名	所在地・場所	主体	内容	研究会・シンポジウム	博物館展示	出版物等(報告書・研究論文・書籍・新聞報道等)	
								愛媛県関連	文献
2024 令和16	4	今治城	今治市	今治市教委	弾丸・銃弾(幕末～明治期)		企画展「今治城の鉄砲玉」	愛媛県関連	143
	5	卯之町監視哨 三瓶監視哨	西予市 宇和町 西予市 三瓶町		採集遺物(ガラス製品)・史料・証言			多田 仁「卯之町監視哨と三瓶監視哨の記録」『よど』第25号	144
	6		西条市			第11回「戦争遺跡保存ネットワーク四国」シンポジウム ・フィールドワーク「西条海軍航空隊関連施設等」 ・山本達也「切川・水見地下壕の位置と構造」 ・友澤明「西条海軍航空隊について」			145・146
			西条市		遺構測量図			山本達也「愛媛の軍事遺跡2 西条海軍航空隊の地下壕」『軍装操典』第157号	147
			今治市 波方町		遺構測量図・証言・史料			多田 仁「八番小部監視哨の記録」『怒麻』第46号	148
	7		南宇和郡 愛南町	愛媛県	「紫電改」機体調査を実施			愛媛県 2024「紫電改 機体調査」 https://www.pref.ehime.jp/uploaded/ife/101767_159074_misc.pdf	149
	8							埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会「近世・近代の埋蔵文化財保護について(報告)」	150
	9							愛媛新聞「戦争遺跡3割原形なく国文書記載642カ所調査 開発や劣化原因」	151
	11							「特集「戦争遺跡」研究の新展開」『月刊 考古学ジャーナル』No.803	152
	12		遊子監視哨 日振島監視哨	宇和島市 遊子 宇和島市 日振島		遺構測量図・採集遺物(陶磁器・土管・瓦・焜炉(「さ3」)など)		多田 仁「遊子監視哨と日振島監視哨の記録」『愛媛考古学』第28号	153

年	月	遺跡名	所在地・場所	主体	内容	研究会・シンポジウム	博物館展示	出版物等(報告書・研究論文・書籍・新聞報道等)		文献	
								愛媛県関連	愛媛県外		
2025	1	切川地下壕 水見地区の燃料庫・爆弾庫	西条市		遺構測量図・史料			愛媛新聞「空襲被害記録 全市民にマップ化し176カ所判明 民間死者1400人超か」 https://www.ehime-np.co.jp/online/life/digitalmap/war/	愛媛新聞「空襲被害記録 全市民にマップ化し176カ所判明 民間死者1400人超か」 www.ehime-np.co.jp/online/life/digitalmap/war/	154	
											山本達也「西条海軍航空隊の地下壕について」『小松史談』第151号
	2	(圓明寺)	松山市	愛媛県教委	統制陶器(花瓶(○万76)・香炉(○万155))			植村拓哉「第4章 第3節 (5)工芸品 ②供養具」愛媛県教委編『四国八十八箇所霊場詳細調査報告書 第53番札所 圓明寺』	愛媛新聞「五十嵐地区に現存 自家用防空壕」	155	
											十亀幸雄「砥部焼探訪(1)統制陶器一砥部88箇所に残る伊11三五碗一」『砥部古文書の会ニューレター』第19号
	3	五十嵐城ヶ谷遺跡	今治市五十嵐	愛媛県埋文	防空壕1基				多田仁「小富士監視哨の記録」『宇摩史談』第113号	多田仁「土居監視哨の記録」『よど』第26号	157
	4	小富士監視哨	四国中央市土居町		史料・証言				藤本清志「H.北吉田馬場遺跡」『愛比売』2024(令和6)年度年報	榎林啓介「経済統制の中の砥部焼」	158
	5	北吉田馬場遺跡	松山市	愛媛県埋文					榎林啓介「経済統制の中の砥部焼」	榎林啓介「経済統制の中の砥部焼」	159
	6		南宇和郡愛南町		愛媛県	台湾での調査で伊予陶磁器工業(統制)組合の「6」を確認。製作技法から台湾産(北投焼)の可能性を指摘。紫電改展示館建て替えるための、ふるさと納税型クラウドファンディング実施。			榎林啓介「経済統制の中の砥部焼」	榎林啓介「経済統制の中の砥部焼」	160
	7		西予市宇和町	愛媛県歴史博				テーマ展「戦後80年 戦時下のくらし」	榎林啓介「経済統制の中の砥部焼」	榎林啓介「経済統制の中の砥部焼」	161
			西予和郡伊方町		佐田岬半島ミュージアム	豊予要塞の地帯標。「豊予要塞第三区地帯標」の文字		企画展「戦争と佐田岬半島」	愛媛新聞「豊予要塞「地帯標」発見」	愛媛新聞「豊予要塞「地帯標」発見」	162

年	月	遺跡名	所在地・場所	主体	内容	研究会・シンポジウム	博物館展示	出版物等(報告書・研究論文・書籍・新聞報道等)		文献	
								愛媛県関連	愛媛県外		
2025	7		南宇和郡 愛南町	日本航空 協会	紫電改展示館の 「紫電改」が重要 航空遺産に認定			https://www.aero.or.jp/isan/ heritage/aviation-heritage-NIK2- ShidenKai.html		166	
					愛媛県内の防空監 視哨が32哨と報告	伊予史談会8月例会 (第1312回) ・多田仁「愛媛の 防空監視哨7 大東 亜戦争における民 間防空の一樣相」				167	
	8				戦後80年						
					愛媛大学古代 アジア考古学 研究センター	愛媛大学アジア古 代産業考古学研究 センター第35回ア ジア歴史講演会 ・植林啓介「砥部 焼考古学の新たな 展開」				169	
	10		三島監視哨	四国中央市 三島		史料・証言			多田仁「三島監視哨の記録」 『宇摩史談』第114号		170
						史料・証言・関連 施設			多田仁「北条監視哨の記録」 『風早』第94号		171
						史料(議事録など)			多田仁「愛媛県十九番福浦監視 哨と武者泊機雷監視哨に関する 史料」『土佐史談』290号		172
	12		十九番福浦 監視哨 武者泊機雷 監視哨	南宇和郡 愛南町		遺構測量図・出土 遺物(統制陶器(「イ ヨ11?」)・磁器・ 釘・葉巻・認識 票・小銃・機関砲 ほか)			鶴久森 彬「5.出土物整理・磁 器・金属製品他 近現代遺物の 再整理～松山の戦争遺跡～」 『松山市埋蔵文化財調査年報 37』		173
						防空監視哨・豊予 要塞・慰霊碑・奉 安殿ほか、関連資 料	佐田岬半島 ミュージアム	前田美和編『佐田岬半島ミュー ジウム自主企画展 凶録② 戦争 と佐田岬半島』		174	
						測量図(奉安殿・奉 安棚)	西宇和郡 伊方町	山本達也「西条市の奉安殿につ いて」『小松史談』第152号		175	
	1		大洲監視哨	西宇和郡 伊方町		遺構・史料・関連 施設			多田仁「大洲監視哨の記録」 『温故』復刊第48号		176
						関連報道史料			多田仁「八幡浜監視哨の記録一 戦時中の国民防空一」『八幡浜 史談』第54号		177
遺構・遺物						佐田岬半島 ミュージアム	多田仁「三崎監視哨の記録2」 『佐田岬半島ミュージアム研究 紀要』第1号		178		
2026	令和8	3	八幡浜監視哨	西宇和郡 伊方町							

- 10.伊藤厚史 1994「負の文化財—戦争遺跡の重要性—」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 11.下地安広 1994「沖縄の遺跡から出土する近代磁器—浦添の遺跡を中心に—」『南島考古』第14号、沖縄考古学会
- 12.(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1995『大峰ヶ台遺跡 —第4次調査—』
- 13.文化庁文化財保護部記念物課 1995「近代の遺跡の保護について 史跡名勝天然記念物指定基準一部改正」『月刊文化財』4、379号、文化庁文化財保護部
- 14.五十嵐彰・阪本宏晃 1996「近現代考古学の現状と課題—「新しい時代」の考古学をめぐって—」『考古学研究』第43巻第2号、考古学研究会
- 15.(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1998「岩子山西麓遺跡」『斎院・古照』
- 16.今治市教育委員会 1998『別宮上河内遺跡』
- 17.桃井 勝編 1999「51 生産者別標示記号(統制番号)」土岐津町誌編纂委員会編『土岐津町誌 史料編』土岐市土岐口財産区
- 18.堀内秀樹 1999「3.「統制番号」のついた陶磁器について」東京大学埋蔵文化財調査室編『東京大学駒場構内遺跡 大学院数理学研究科Ⅱ期棟地点 発掘調査報告』
- 19.柳 雄太郎 1999「近代遺跡の調査について」『月刊文化財』9、432号、文化庁文化財保護部
- 20.(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 2000『史跡「松山城跡」内 県民館跡地』
- 21.坂詰秀一編 2000「特集 近現代の考古学」『季刊考古学』第72号、雄山閣
- 22.池田宏信 2001『翔べなかった少年兵・松山海軍航空隊始末記』晴耕雨読
- 23.宮城弘樹 2002「いわゆるスンカンマカイについて」『壺屋焼物博物館紀要』第3号、那覇市立壺屋焼物博物館
- 24.十菱駿武・菊池 実編 2002『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房
- 25.下地安広 2002「沖縄の遺跡から出土する統制経済下の磁器」『南島考古』第21号、沖縄考古学会
- 26.(財)えひめ地域政策研究センター編 2003「その他 戦争遺跡」『愛媛温故紀行 明治・大正・昭和の建造物』アトラス出版
- 27.十菱駿武・菊池 実編 2003『続 しらべる戦争遺跡の事典』柏書房
- 28.大成経凡 2005『しまなみ海道の近代化遺産』創風社出版
- 29.愛媛大学埋蔵文化財調査室 2005「文京遺跡20次調査」『文京遺跡Ⅳ』
- 30.池田宏信 2005『昭和二〇年八月、愛媛の本土決戦準備始末—防衛庁戦史部所蔵史料からみる陸海軍部隊の配備と現存する戦争遺跡』晴耕雨読
- 31.今治明德高等学校矢田分校平和学習実行委員会編 2005『米軍資料から読み解く愛媛の空襲』創風社出版
- 32.佐賀県立九州陶磁文化館 2006『近現代肥前陶磁銘款集』
- 33.愛媛大学埋蔵文化財調査室 2007「文京遺跡18次調査」『文京遺跡Ⅴ』
- 34.春野公麻呂 2007『ロンプ・ブックス郷土ガイドシリーズ③ 四国の戦争遺跡ハイキング 帝国陸海軍ノ残影ヲ探訪ス』ロンプ事務局
- 35.(財)岐阜県陶磁資料館 2008『萩谷コレクション 全国の戦時中のやきもの』
- 36.愛媛県歴史文化博物館 2008 平成20年度特別展『愛媛と戦争～伝えたい戦争の記憶・平和な未来へ～』
- 37.(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 2009「久米高畑遺跡51次調査」「久米高畑遺跡47次調査」『史跡久米官衙遺跡群調査報告書3』
- 38.愛媛新聞 2009年10月19日「旧陸軍の標石撤去 松山市の城山公園整備事業」愛媛新聞社
- 39.今治市教育委員会 2010『高地栗谷1号墳』
- 40.桃井 勝・萩谷茂行・舟橋 健 2010「伝世品にみる戦時中の美濃焼～産地と製品傾向～」『瑞浪市陶磁資料館研究紀要』第13号、瑞浪市陶磁資料館

- 41.池田宏信 2010「愛媛の戦争遺跡について」『第1回戦争遺跡保存四国シンポジウム』当日資料
- 42.愛媛新聞 2010年7月20日「戦争遺跡保存進まず 動き鈍い県や市町」愛媛新聞社
- 43.多田 仁・藤本清志 2010「第8章 近代」『紀要愛媛』第9号、(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 44.(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 2011『板島城跡』
- 45.愛媛大会事務局 2011「陸軍芸予要塞(小島砲台)のフィールドワーク資料」『第2回戦争遺跡保存四国シンポジウム』当日資料
- 46.大成経凡 2011「小島の陸軍芸予要塞が保存された背景」『第2回戦争遺跡保存四国シンポジウム』当日資料
- 47.菊池 実編 2011「特集 戦争と慰霊の考古学」『季刊考古学』第116号、雄山閣
- 48.瑞浪市陶磁資料館 2012『番号の付されたやきもの一戦時下の瑞浪窯業生産一』図録
- 49.(財)瀬戸市文化振興財団 2011『瀬戸・美濃の近代一生産と流通一』図録
- 50.愛媛新聞 2012年2月8日「塹壕 松野に3ヵ所」愛媛新聞社
- 51.石岡ひとみ 2012「伊予市三島焼の歴史と製品に関する一考察」『伊予市の歴史文化』第66号、伊予市歴史文化の会
- 52.宇和島市教育委員会 2012「吉田藩陣屋跡」『宇和島市内遺跡調査報告書IV』
- 53.池田宏信 2012「陸軍松山西飛行場の歴史について」『第3回戦争遺跡保存四国シンポジウム』当日資料
- 54.多田 仁 2012「久米陸軍飛行場の考古学的調査」『第3回戦争遺跡保存四国シンポジウム』当日資料
- 55.(公財)愛媛県埋蔵文化財センター 2012『北井門遺跡2次調査』
- 56.(公財)えひめ地域政策研究センター編 2013「第3章 第6節 軍事・戦時遺産」『愛媛県の近代化遺産—近代化えひめ歴史遺産総合調査報告書—』愛媛県教育委員会文化財保護課
- 57.萩谷茂行 2013「統制経済下における陶磁器製品製造、流通の一考察～いわゆる「統制番号」に関する検証～」『瑞浪市歴史資料集』第2集、瑞浪市陶磁資料館
- 58.文化庁文化財部記念物課監修・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編 2013「コラム 近代遺跡と発掘調査」『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』同成社
- 59.山根龍司 2013「伊予町正野地区に残る豊予要塞史跡」『第4回戦争遺跡保存四国シンポジウム』当日資料
- 60.(公財)えひめ地域政策研究センター編 2013『えひめの近代化遺産～続・愛媛温故紀行 明治・大正・昭和の建造物を訪ねて～』
- 61.今治市教育委員会 2014「6地点 学校統廃合による新校舎建設計画に伴う試掘調査」『市内遺跡試掘確認調査報告書(平成24年度 市公共事業に伴う調査)』
- 62.岡崎直司 2014「愛媛県内の奉安殿」『第5回戦争遺跡保存四国シンポジウム』当日資料
- 63.愛媛新聞 2015年3月8日「八幡浜 四国初の本格的防空壕 立体計測で詳細判明」愛媛新聞社
- 64.石岡ひとみ 2015a「窯跡資料にみる伊予市三島焼の製品」『伊予市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ』伊予市教育委員会
- 65.石岡ひとみ 2015b「太山寺の工芸品」胡光編『2014年度四国遍路と霊場研究1 四国霊場第五十二番札所太山寺総合調査報告書(1)』愛媛大学法文学部日本史研究室
- 66.舟橋 健 2015「番号の付けられたやきもの～紀年銘のある製品と瑞浪の製品にみられる特徴～」『瑞浪市歴史資料集』第3集、瑞浪市陶磁資料館
- 67.愛媛新聞 2015年5月3日「愛媛など空襲の映像 大分の市民団体 米公文書館から入手」愛媛新聞社
- 68.安斎英介・上原千明 2015「沖縄の遺跡から出土する近代の本土産磁器について—スンカンマカイと統制番号を有する資料を中心に—」『南島考古』第34号、沖縄考古学会

- 69.多田 仁 2015「松山の戦争遺跡—戦争遺跡の発掘とその未来を探る—」『文化愛媛』第75号、(公財)愛媛県文化振興財団
- 70.石岡ひとみ 2016a「埋もれた資料に光を一近代のやきものは歴史を語る—」四国ミュージアム研究会編『もっと博物館が好きっ！—みんなと歩む学芸員—』株式会社教育出版センター
- 71.石岡ひとみ 2016b「近世・近代における砥部焼磁器の製品と流通について」佐々木達夫編『中近世陶磁器の考古学』第二巻、雄山閣
- 72.別府大学史学研究会戦史研究室 2016「豊予要塞—忘れられた巨大要塞—」『史学論叢』第46号、別府大学史学研究会
- 73.多田 仁・増田晴美 2016「由良崎防備衛所跡の採集遺物—愛媛県南宇和郡愛南町における戦争遺物—」『紀要愛媛』第12号、(公財)愛媛県埋蔵文化財センター
- 74.愛媛新聞 2016年6月23日7面「砲台跡から大砲一部 佐田岬の御籠島 車軸など50点」愛媛新聞社
- 75.松山市教育委員会・(公財)松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター 2016「航空機有蓋掩体確認調査」『松山市埋蔵文化財調査年報 28』
- 76.萩谷茂行 2017「陶磁器代用品の誕生と発展」『瑞浪市歴史資料集』第4集、瑞浪市陶磁資料館
- 77.多田 仁 2017a「愛媛の統制陶器」『紀要愛媛』第13号、(公財)愛媛県埋蔵文化財センター
- 78.愛媛新聞 2017年8月5日「戦争の記憶 ネットに ヤフー 資料や証言映像公開」愛媛新聞社
- 79.Yahoo!JAPAN 「未来に残す 戦争の記憶」<https://wararchive.yahoo.co.jp/>
- 80.多田 仁 2017b「福浦19番監視哨の現況 愛媛県南宇和郡愛南町における防空監視哨の一例」『第21回戦争遺跡保存全国シンポジウム高知大会ポスターセッション』
- 81.多田 仁・高嶋賢二 2018「12番伊方監視哨の遺構と遺物」『伊方町 町見郷土館 研究紀要』第4号、伊方町町見郷土館
- 82.石岡ひとみ 2018「久妙寺所蔵の工芸品について」胡光編『四国遍路と霊場研究4 四国番外霊場久妙寺総合調査報告書』愛媛大学法文学部附属 四国遍路・世界の巡礼研究センター
- 83.多田 仁 2018a「内子監視哨の記録」『郷土うちこ』36号、内子町郷土研究会
- 84.多田 仁・藤本清志・増田晴美 2018「青島における戦争遺跡の踏査」『長濱史談』第42号、長濱史談会
- 85.多田 仁 2018b「六番岩松監視哨の記録」『よど』第19号、西南四国歴史文化研究会
- 86.池田宏信 2018「松山海軍航空基地・松山海軍航空隊の戦争遺跡」『第8回戦争遺跡保存四国シンポジウム』当日資料
- 87.多田 仁 2018c「愛媛における防空監視哨の遺構と遺物」『第8回戦争遺跡保存四国シンポジウム』当日資料
- 88.愛南町町史編纂委員会編 2018『愛南町史』愛南町
- 89.織田浩史 2018「歴史編 第7章近代 第7節戦時下の南宇和郡」『愛南町史』愛南町
- 90.池田宏信 2018「研究編 戦時下、南宇和郡に設置された軍施設と軍部隊について」『愛南町史』愛南町
- 91.愛媛新聞 2018年8月17日「戦争体験 デジタルで継承 行政や民間 証言や写真 若い世代に ネット公開の試みも」愛媛新聞社
- 92.第48回空襲・戦災を記録する会全国連絡会議松山大会実行委員会 2018『第48回空襲・戦災を記録する会全国連絡会議松山大会 予稿集』
- 93.愛媛新聞 2018年10月8日「秘匿飛行場 写真発見 東温の重信川沿い 海軍が戦時中造成」愛媛新聞社
- 94.愛媛新聞 2019年3月3日「奈良県立図書情報館に専門文庫 写真・手記 5万8000点所蔵 戦争体験 資料が語る」愛媛新聞社

- 95.今治市教育委員会 2019『南日吉高堤遺跡・上徳居屋敷遺跡』
- 96.多田 仁・高嶋賢二 2019「三崎監視哨の記録」『伊方町 町見郷土館 研究紀要』第5号、伊方町町見郷土館
- 97.多田 仁 2019a「町見郷土館所蔵の戦争関係陶磁器」『伊方町 町見郷土館 研究紀要』第5号、伊方町町見郷土館
- 98.角南聡一郎 2019「第4章 3-4工芸 (1)明石寺の工芸⑥統制陶器・代用仏具」愛媛県教育委員会編『四国八十八箇所霊場詳細調査報告書 第43番札所 明石寺』愛媛県教育委員会
- 99.多田 仁 2019b「愛媛県南宇和郡愛南町柏採集の近代遺物」『愛媛考古学』第23号、愛媛考古学協会
- 100.多田 仁 2019c「十九番福浦監視哨の記録—遺構・遺物編—」『愛媛考古学』第23号、愛媛考古学協会
- 101.多田 仁 2019d「長浜監視哨の記録」『長濱史談』第43号、長濱史談会
- 102.高嶋賢二編 2019『伊方町 町見郷土館 収蔵資料目録 第3集 <佐田岬半島の考古資料目録>』伊方町町見郷土館
- 103.多田 仁・藤本清志・増田晴美 2019「愛媛県南宇和郡愛南町の東外海監視哨について」『紀要愛媛』第15号、(公財)愛媛県埋蔵文化財センター
- 104.多田 仁 2019e「十九番福浦監視哨の記録—証言・史料編—」『よど』第20号、西南四国歴史文化研究会
- 105.多田 仁 2019f「愛媛における防空監視哨の遺構と遺物2」『第9回戦争遺跡保存四国シンポジウム』当日資料
- 106.https://www.pref.okinawa.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/009/690/image30.pdf
- 107.愛媛新聞 2019年7月26日1・16～19面「1945.7.26 松山大空襲 戦争の惨禍 鮮明に」愛媛新聞社 https://www.ehime-np.co.jp/online/news/matsuyama_air_raid/top.html
- 108.沖野新一 2019「統制陶器が39点も」『からさき 唐崎文化通信』第490号、唐崎旧石器資料館
- 109.多田 仁 2020a「長浜監視哨の記録2」『長濱史談』第44号、長濱史談会
- 110.多田 仁 2020b「八幡浜監視哨の記録」『紀要愛媛』第16号、(公財)愛媛県埋蔵文化財センター
- 111.多田 仁 2020c「宇和島防空監視隊の記録」『よど』第21号、予土歴史文化研究会
- 112.多田 仁 2020d「七番今治監視哨の記録」『今治史談』No.26、今治史談会
- 113.多田 仁 2020e「壬生川監視哨の記録」『東予史談』第22号、東予史談会
- 114.多田 仁・藤本清志 2020「三机監視哨の記録」『伊方町 町見郷土館 研究紀要』第6号、伊方町町見郷土館
- 115.多田 仁 2020f「内海監視哨の記録」『愛媛考古学』第24号、愛媛考古学協会
- 116.宇和島市教育委員会 2021「天ヶ森城跡(岩松監視哨跡)」「宇和島城跡」『宇和島市内遺跡調査報告書XI』
- 117.多田 仁 2021a「十四番上灘監視哨の記録」『伊予市の歴史文化』第75号、伊予市歴史文化の会
- 118.石岡ひとみ 2021「第4章第3節工芸(3)陶器製仏具」愛媛県教育委員会編『四国八十八箇所霊場詳細調査報告書 第49番札所 浄土寺』愛媛県教育委員会
- 119.多田 仁 2021b「六番岩松監視哨の記録2」『よど』第22号、予土歴史文化研究会
- 120.(公財)松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター 2021『南江戸上沖遺跡—1次・2次調査—』
- 121.愛媛新聞 2021年12月5日5面「終戦後・海軍松山飛行場 軍機焼却の映像発掘」愛媛新聞社
- 122.松山市教育委員会・(公財)松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター 2021「掩体壕確認調査」『松山市埋蔵文化財調査年報 33』
- 123.十亀幸雄 2022「江戸・明治期砥部陶磁器窯址(4)伊予陶磁器工業統制組合の統制陶器—砥部町三角組の伊11を中心に—」『いせきニュースレター』第160号、遺跡発行会
- 124.宇和島市教育委員会 2022「宇和島監視哨跡」「宇和島海軍航空隊弾薬庫跡」『宇和島市内遺跡調査報告書 XII』

- 125.角南聡一郎 2022「第4章 第3節 (2)工芸⑤金属代用品」愛媛県教育委員会編『四国八十八箇所霊場詳細調査報告書 第44番札所 大寶寺』愛媛県教育委員会
- 126.多田 仁 2022a「平城監視哨の記録」『よど』第23号、予土歴史文化研究会
- 127.多田 仁 2022b「六番松山監視哨の記録」『伊予史談』406号、伊予史談会
- 128.多田 仁 2022c「久万監視哨の記録」『愛媛考古学』第26号、愛媛考古学協会
- 129.愛媛大学先端研究・学術推進機構埋蔵文化財調査室 2022『愛媛大学御幸団地構内遺跡1次調査』
- 130.山本達也 2022「愛媛の軍事遺跡1 ―芸予要塞来島砲台群の規正標柱と水尺について―」『軍装操典』第150号、全日本軍装研究会
- 131.角南聡一郎 2023「第4章 第3節 (2)工芸品①仏具工芸」愛媛県教育委員会編『四国八十八箇所霊場詳細調査報告書 第47番札所 八坂寺』愛媛県教育委員会
- 132.多田 仁 2023a「長浜町庁舎の三州瓦」『長濱史談』第47号、長濱史談会
- 133.愛媛県教育委員会 2023『愛媛県の近世・近代窯跡―分布調査報告書―』
- 134.今治市教育委員会生涯学習課 2023『令和5年度企画展 発掘された今治の戦災 改訂版』
- 135.多田 仁 2023b「宇和島監視哨の記録」『よど』第24号、予土歴史文化研究会
- 136.山本達也 2023「発掘された今治の戦災」『第10回戦争遺跡保存四国シンポジウム』当日資料
- 137.愛媛新聞 2023年8月17日4面「戦争遺跡 継承の動き 10道県 独自に全容調査 消失懸念 文化財指定も」愛媛新聞社
- 138.山本達也 2023b「今治城出土の弾丸」『令和5年度今治城特別展 動乱の時代と人びと ―今治市域の幕末―』(一財)今治文化振興会 今治城
- 139.多田 仁 2023c「九番菊間監視哨の記録」『今治史談』No.29、今治史談会
- 140.(一社)日本考古学協会編 2023 小特集「戦争遺跡研究の現状と課題」『日本考古学』第57号
- 141.多田 仁 2024a「十三番郡中監視哨の記録」『伊予市の歴史文化』第78号、伊予市歴史文化の会
- 142.多田 仁 2024b「新居浜監視哨の記録」『新居浜史談』411号、新居浜郷土史談会
- 143.今治市教育委員会生涯学習課 2024『令和6年度企画展 今治城の鉄砲玉』
- 144.多田 仁 2024c「卯之町監視哨と三瓶監視哨の記録」『よど』第25号、予土歴史文化研究会
- 145.山本達也 2024a「切川・氷見地下壕の位置と構造」『第11回戦争遺跡保存四国シンポジウム』当日資料
- 146.友澤 明 2024「西條海軍航空隊について」『第11回戦争遺跡保存四国シンポジウム』当日資料
- 147.山本達也 2024b「愛媛の軍事遺跡2 西条海軍航空隊の地下壕」『軍装操典』第157号、全日本軍装研究会
- 148.多田 仁 2024d「八番小部監視哨の記録」『怒麻』第46号、大西町史談会
- 149.愛媛県 2024「紫電改 機体調査」https://www.pref.ehime.jp/uploaded/life/101767_159074_misc.pdf
- 150.埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会 2024『近世・近代の埋蔵文化財保護について(報告)』
- 151.愛媛新聞 2024年9月24日3面「戦争遺跡 3割原形なく 国文書記載642ヵ所調査 開発や劣化原因」愛媛新聞社
- 152.考古学ジャーナル編集委員会編 2024「特集「戦争遺跡」研究の新展開」『月刊 考古学ジャーナル』No.803、ニュー・サイエンス社
- 153.多田 仁 2024e「遊子監視哨と日振島監視哨の記録」『愛媛考古学』第28号、愛媛考古学協会
- 154.愛媛新聞 2025年1月1日「空襲被害記録 全市町に マップ化し176ヵ所判明 民間死者1400人超か」<https://www.ehime-np.co.jp/online/life/digitalmap/war/> 愛媛新聞社
- 155.山本達也 2025「西条海軍航空隊の地下壕について」『小松史談』第151号、小松史談会

- 156.植村拓哉 2025「第4章 第3節 (5)工芸品②供養具」愛媛県教育委員会編『四国八十八箇所霊場詳細調査報告書 第53番札所 圓明寺』愛媛県教育委員会
- 157.愛媛新聞 2025年8月31日5面「五十嵐地区に現存 自家用防空壕」愛媛新聞社
- 158.十亀幸雄 2025「砥部焼探訪(1)統制陶器—砥部88箇所に残る伊11三五碗—」『砥部古文書の会ニューズレター』第19号、砥部古文書の会
- 159.多田 仁 2025a「小富士監視哨の記録」『宇摩史談』第113号、宇摩史談会
- 160.多田 仁 2025b「土居監視哨の記録」『よど』第26号、予土歴史文化研究会
- 161.藤本清志 2025「H.北吉田馬場遺跡」『愛比売 2024(令和6)年度年報』(公財)愛媛県埋蔵文化財センター
- 162.楨林啓介 2025a「経済統制の中の砥部焼」愛媛新聞 2025年6月14日15面、愛媛新聞社
- 163.愛媛県 2025a「紫電改ふるさと納税型クラウドファンディングの実施について」<https://www.pref.ehime.jp/page/114270.html>
- 164.今治市文化振興課 2025『令和7年度企画展 今治の戦争遺跡と遺物』
- 165.愛媛新聞 2025年7月25日4面「豊予要塞「地帯標」発見」愛媛新聞社
- 166.(一財)日本航空協会 <https://www.aero.or.jp/isan/heritage/aviation-heritage-N1K2-ShidenKai.html>
- 167.多田 仁 2025c「愛媛の防空監視哨7 大東亜戦争における民間防空の一樣相」伊予史談会8月例会当日資料
- 168.愛媛県 2025b「紫電改クラウドファンディングの実施結果について」<https://www.pref.ehime.jp/uploaded/attachment/158879.pdf>
- 169.楨林啓介 2025b「砥部焼考古学の新たな展開」『愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター第35回歴史講演会』当日資料
- 170.多田 仁 2025d「三島監視哨の記録」『宇摩史談』第114号、宇摩史談会
- 171.多田 仁 2025e「北条監視哨の記録」『風早』第94号、風早歴史文化研究会
- 172.多田 仁 2025f「愛媛県十九番福浦監視哨と武者泊機雷監視哨に関する史料」『土佐史談』290号、土佐史談会
- 173.鶴久森 彬 2025「5.出土物整理・磁器・金属製品他 近現代遺物の再整理～松山の戦争遺跡～」『松山市埋蔵文化財調査年報 37』松山市教育委員会・(公財)松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター
- 174.前田美和編 2026『佐田岬半島ミュージアム自主企画展 図録② 戦争と佐田岬半島』佐田岬半島ミュージアム
- 175.山本達也 2026「西条市の奉安殿について」『小松史談』第152号、小松史談会
- 176.多田 仁 2026a「大洲監視哨の記録」『温故』復刊第48号、大洲史談会
- 177.多田 仁 2026b「八幡浜監視哨の記録—戦時中の国民防空—」『八幡浜史談』第54号、八幡浜史談会
- 178.多田 仁 2026c「三崎監視哨の記録2」『佐田岬半島ミュージアム研究紀要』第1号、佐田岬半島ミュージアム

(2026年3月31日)

令和7年度 調査員の研究動向

氏名	職名	項目	内容
乗松真也	調査第二課長	①	「金山産サヌカイト製打製石剣の成立」兵庫考古学談話会第 51 回例会
		②	『弥生石器と瀬戸内社会』新泉社
松葉竜司	主幹	①	「中世銅製花瓶の諸例と各地での受容と展開」瀬戸内海考古学研究会第 67 回例会 「第 III 部 日本列島初期仏教受容史の多角的研究 III-5 コラム 愛媛県西条市宮之内遺跡出土の金銅製舍利容器」 『日本列島初期仏教受容史の再構築』京都府立大学文学部歴史学科
		②	「コラム 宮之内遺跡に納置された舍利容器」 『令和 7 年度特別展 伊予の経塚名品展 一堂ヶ谷経塚と松溪経塚一』愛媛県歴史文化博物館
			「日本海沿岸地域出土の中世銅製花瓶の基礎的研究」 『令和 7 年度日本海学研究グループ支援事業報告書』日本海学推進機構
首藤久士	主任調査員	①	「愛媛県における中世の出土銭貨について」ソーシャル・リサーチ 12 月例会 「中国・四国地方の動向」『東洋陶磁学会 会報』第 105 号
		②	「瀬戸内地域における瓦質土器の生産と流通」 『瀬戸内の中世 2 生産・流通・港津』高志書院
青木聡志	調査員		「伊予における緑釉陶器 一八町遺跡群と別名端谷 I 遺跡 2 次を中心に一」 瀬戸内海考古学研究会第 64 回例会
		①	「宮ノ浦遺跡における古代・中世の土器様相と時期区分」 愛媛大学考古学研究室第 21 回シンポジウム “もう一つの荘園” に遺されたもの・こと・ひと 一中世の上島町宮ノ浦遺跡一
		②	「宮ノ浦遺跡の古代・中世土器 一流通品からみた宮ノ浦遺跡一」 『宮ノ浦遺跡 VIII』愛媛県越智郡上島町教育委員会
柴田圭子	嘱託調査員		「西部瀬戸内海を越えて 一中世後期貿易陶磁器の流通一」 瀬戸内海考古学研究会第 11 回大会
		①	「新安沈船の龍泉窯青瓷をめぐって」 第 45 回日本貿易陶磁研究会研究集会 新安沈船とその時代 一近年の新たな研究成果を中心に一
			「首里城跡出土の龍泉窯青瓷 二階殿地区落ち込み資料を中心に」 東洋陶磁学会第 52 回大会 沖縄出土貿易陶磁
		②	「守護の居城 湯築城と城下 一築城、変遷と地域への影響一」 『瀬戸内の中世 1 権力・城館・宗教』高志書院
		「出土陶磁器からみた山北」 『今帰仁グスク 創立 20 周年特別号』今帰仁グスクを学ぶ会	
		「琉球列島出土龍泉窯青瓷研究の意義」『南島考古』第 45 号 沖縄考古学会	

項目の①は研究会や講座での発表、②は考古学関係書への執筆(論文・研究ノート・報告など)である。

愛媛県埋蔵文化財センター研究紀要
紀要愛媛

第 22 号

2026年5月

編集・発行 公益財団法人 愛媛県埋蔵文化財センター
〒791-8025 愛媛県松山市衣山四丁目68-1
TEL 089-911-0502
印刷 アマノ印刷株式会社

